

北陸自動車道関連遺跡
発掘調査報告書

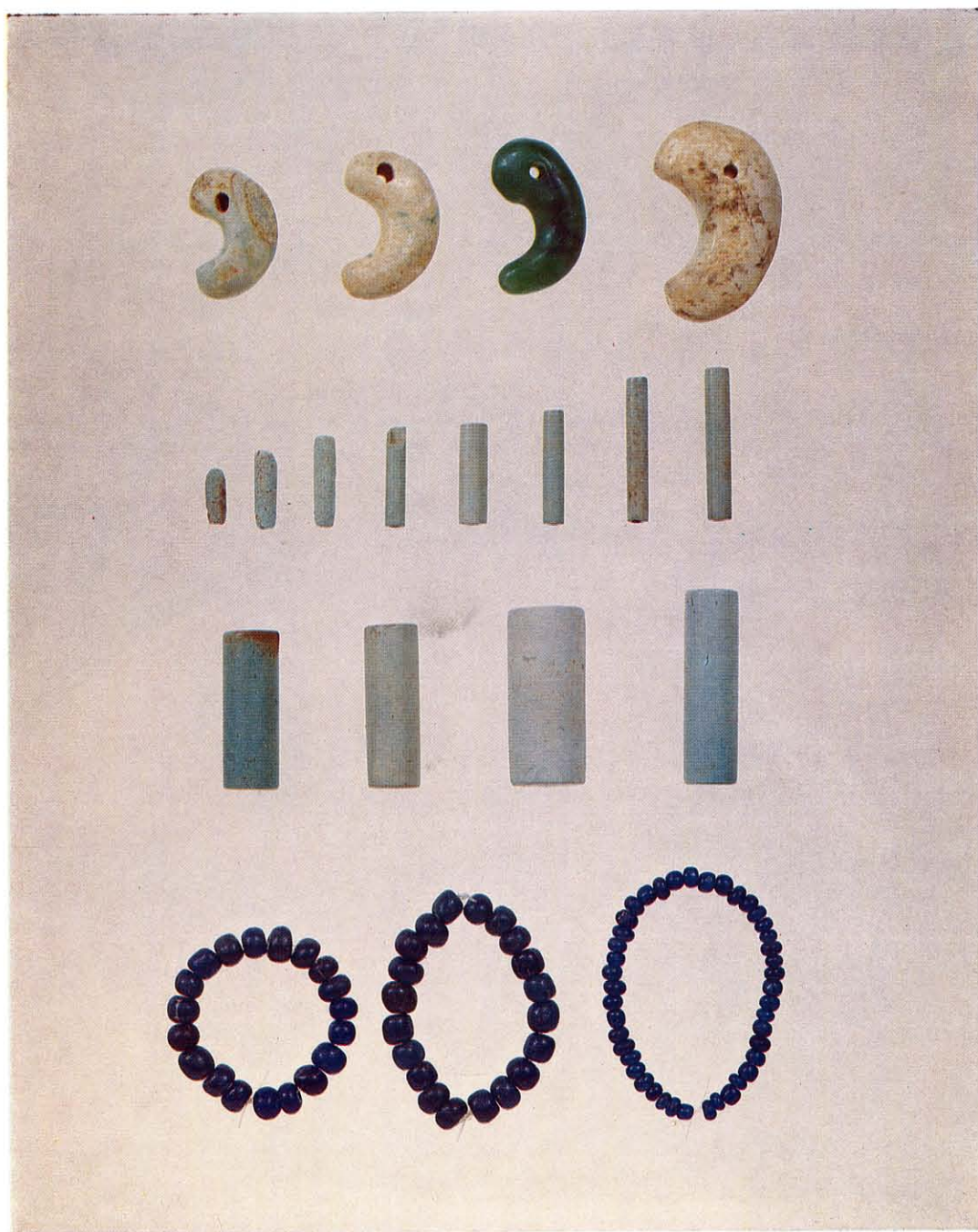
VIII

——高月町涌出山古墳——

1982.3

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会



序

滋賀県教育委員会では、北陸自動車道の建設に先き立って、昭和48年度から遺跡の発掘調査を実施しています。これらの結果については、その一部をすでに報告書にとりまとめましたが、このたび、昭和53年度に実施した高月町涌出山古墳の発掘調査の成果を報告するはこびになりました。

当古墳は、昭和55年度の開通に向けて急速に進行していた北陸自動車道の工事中に発見され、日本道路公団の要請もあって、降雪などの悪条件を克服し、急遽発掘調査を実施したものです。しかし、この結果、古墳時代中期末頃のハニワを持つ貴重な資料を得るところとなりました。

埋蔵文化財の場合、記録だけにとどまり、破壊のやむなきに至る場合が多いのですが、各自が正しい歴史理解を持つことによって、今後、幾多の遺跡の保存が計れるものと思います。本書がここに上梓されることで、歴史に対する認識の一助となれば最も幸せとするところです。

最後に、発掘調査及び整理業務等に日夜努力いただいた調査員の方々や地元関係者の方々に深謝します。

昭和57年 3 月

滋賀県教育委員会

教育長 南 光 雄

目 次

序	(1)
例 言	(8)
はじめに	1
I. 位置と環境	1
1. 位置と立地	1
2. 歴史的環境	1
II. 調査の結果	3
1. 墳 丘	3
イ. 墳形及び規模	3
ロ. 墳丘の構造	3
2. 外部施設	8
イ. 墳頂部ハニワ列	11
ロ. 墳丘裾部ハニワ列	12
ハ. その他	13
3. 主体部	13
イ. 主体部の位置	13
ロ. 構造	13
ハ. 副葬品の配列	16
III. 遺 物	17
1. 副 葬 品	17
イ. 鏡	17

ロ．鉄製刀子	17
ハ．鉄刀	19
ニ．勾玉	19
ホ．管玉	21
ヘ．ガラス小玉	21
2．主体部上方礫層上面	22
イ．須恵器	22
ロ．形象ハニワ	22
3．外部施設	25
イ．朝顔形ハニワ	25
ロ．円筒ハニワ	27
ハ．刻線文ハニワ	50
4．封土中	56
IV．古墳の年代	56
1．須恵器類	56
2．ハニワ	57
3．副葬品	57
4．主体部	57
5．古墳の年代	57
おわりに	58

挿 図 目 次

図 1. 涌出山古墳位置図及び周辺主要古墳分布図	2
2. 墳形測量図	4
3. 墳丘断面土層実測図	5 ~ 6
4. 墳丘築成工程模式図	7
5. ハニワ配列番号図	9 ~ 10
6. ハニワ出土状態実測図	11
7. 主体部上方積石状況実測図	12
8. 主体部実測図	14
9. 主体部基底部実測図	14
10. 主体部構築工程模式図	15
11. 主体部棺内副葬品出土状態実測図	16
12. 主体部棺内出土首飾り、左腕輪実測図(I)	18
13. 主体部棺内出土左腕輪、鉄製刀子、鏡実測図(II)	19
14. 鉄刀実測図	20
15. 墳頂部積石部分出土須恵器類実測図	21
16. 形象ハニワ実測図(I)	23
17. " (II)	24
18. ハニワ実測図(I)	28
19. " (II)	29
20. " (III)	30
21. " (IV)	31
22. " (V)	32
23. " (VI)	33
24. " (VII)	34
25. " (VIII)	35
26. " (IX)	36
27. " (X)	37
28. " (XI)	38
29. " (XII)	39
30. " (XIII)	40
31. " (XIV)	41
32. " (XV)	42
33. " (XVI)	43
34. " (XVII)	44
35. " (XVIII)	45

36. 円筒ハニワ計測値グラフ	48
37. ハニワ直径規模（底部）	49
38. ハニワ直径規模（下；二段目，上；三段目）	49
39. ハニワ器壁外傾度	50
40. ハニワ線刻文様実測図（Ⅰ）	54
41. " （Ⅱ）	55

図 版 目 次

図版一 (上)全景	(下)全景
二 (上)全景	(下)墳頂部ハニワ列
三 (上)墳頂部ハニワ列	(下)墳頂部ハニワ列
四 (上)墳丘裾部ハニワ列（北東部）	(下)墳丘裾部ハニワ列（南西部）
五 (上)墳丘裾部ハニワ列（南西部）	(下)墳丘裾部ハニワ列（北西部）
六 (上)ハニワ列（北東部）	(下)ハニワ列（南東部）
七 (上)ハニワ列（南西部）	(下)ハニワ列（南東部）
八 (上)墳丘裾部ハニワ列近景（北東部）	(下)墳丘裾部ハニワ列近景（南東部）
九 (上)墳丘裾部ハニワ列近景（南西部）	(下)墳丘裾部ハニワ列近景（北西部）
一〇 (上)16～21号ハニワ	(下)27～29号ハニワ
一一 (上)53～56号ハニワ	(下)61～64号ハニワ
一二 (上)65～68号ハニワ	(下)69～72号ハニワ
一三 (上)80号ハニワ	(下)79号ハニワ
一四 (上)104号ハニワ	(下)82号ハニワ
一五 (上)66号ハニワ埋設状態	(下)105号ハニワ埋設状態
一六 (上)主体部全景（発掘前）	(下)主体部上方積石
一七 (上)主体部積石	(下)主体部積石
一八 (上)主体部発掘前近景	(下)主体部積石近景
一九 (上)主体部上方積石近景	(下)主体部上方積石近景
二〇 (上)竪穴式石室全景	(下)竪穴式石室全景
二一 (上)竪穴式石室全景	(下)竪穴式石室全景
二二 (上)竪穴式石室近景	(下)竪穴式石室近景
二三 (上)竪穴式石室全景	(下)竪穴式石室近景
二四 (上)竪穴式石室基底部	(下)竪穴式石室基底部
二五 (上)竪穴式石室基底部近景	(下)竪穴式石室基底部近景
二六 (上)竪穴式石室基底部	(下)竪穴式石室基底部
二七 (上)竪穴式石室棺底	(下)竪穴式石室横断面
二八 (上)竪穴式石室基底部	(下)竪穴式石室棺底

元 (上) 竪穴式石室横断面	(下) 竪穴式石室後方石積状況
言 (上) 竪穴式石室北半分	(下) 竪穴式石室北短側壁
三 (上) 竪穴式石室北短側壁後方	(下) 竪穴式石室北短側壁横断面
三 (上) 竪穴式石室西側壁	(下) 竪穴式石室東側壁
三 (上) 竪穴式石室西側壁近景	(下) 竪穴式石室東側壁近景
畺 (上) 副葬品出土状態	(下) 副葬品出土状態
畺 (上) 副葬品出土状態	(下) 副葬品出土状態
𠄎 (上) 玉類(首飾り・腕輪) 出土状態	(下) 玉類(首飾り・腕輪)・鏡出土状態
𠄎 (上) 鏡・玉類(首飾り) 出土状態	(下) 鏡出土状態
𠄎 (上) 玉類(首飾り) 出土状態	(下) 玉類(首飾り) 出土状態
𠄎 (上) 玉類(首飾り) 出土状態	(下) 玉類(首飾り) 出土状態
𠄎 (上) 玉類(首飾り) 出土状態	(下) 玉類(首飾り) 出土状態
𠄎 (上) 玉類(腕輪) 出土状態	(下) 玉類(右腕輪) 出土状態
𠄎 (上) 玉類(左腕輪) 出土状態	(下) 刀子出土状態
𠄎 (上) 須恵器臚出土状態	(下) 須恵器臚出土状態近景
𠄎 (上) 墳丘断面土層 1	(下) 墳丘断面土層 2
𠄎 (上) 墳丘断面土層 3	(下) 墳丘断面土層 4
𠄎 (上) 首飾り	(下) 左：右腕輪、右：左腕輪
𠄎 (上) ガラス小玉 (中) 勾玉	(下) 管玉
𠄎 (上) 珠文鏡	(下) 左：鉄刀、右：刀子・須恵器臚
𠄎 2～7号ハニワ	
𠄎 9～14号ハニワ	
𠄎 14～17号ハニワ	
𠄎 19～21・23号ハニワ	
𠄎 24・25・27～30号ハニワ	
𠄎 30～33・42・45号ハニワ	
𠄎 44～46・48・53～55号ハニワ	
𠄎 56・59～63号ハニワ	
𠄎 65～68号ハニワ	
𠄎 69～71・74～77・80号ハニワ	
𠄎 81～86・89・90・93・95号ハニワ	
𠄎 95～98・102～104号ハニワ	
𠄎 (上) 105号及び墳頂部出土ハニワ	(下) 左：18号ハニワ、右：臚・蓋・広口壺
𠄎 刻線文ハニワ	
𠄎 (上) 刻線文ハニワ	(下) 形象ハニワ

例 言

1. 本書は、伊香郡高月町唐川地先に所在する涌出山古墳の発掘調査の結果である。
2. 本書は、昭和53年度に現地調査を実施し、昭和55年度に整理作業を行ったその成果である。
3. 本調査は、滋賀県教育委員会の指導のもとに、日本道路公団の委託により、財団法人 滋賀県文化財保護協会が実施した。
4. 調査、整理、報告には、滋賀県教育委員会 文化財保護課 技師 田中勝弘が指導に当たった。
5. 整理は、遺物写真を寿 福 茂、遺構写真を田中勝弘が撮影した。遺物の実測は田中勝弘、藤井益夫、井塚哲夫、北脇泰久が中心に行い、写真図版は田中勝弘が作成した。
6. 現地調査、整理作業には以下の諸氏の協力を得た。
滋賀県文化財保護協会：技師 林 純
京都産業大学学生：宮崎雅美、石本好典、田中聡一、岸本好弘、藤井益夫、北脇泰久、井塚哲夫、田村克哉、平通茂、大内裕子、児玉浩見、増田行雄、徳永行雄、武田知久
7. 本文は、田中勝弘が執筆した。

はじめに

涌出山古墳は、北陸自動車道建設工事による土取り場に係るものである。当初、地元高月町千田区の方より、土取り予定地に古墳があるとの通報があり、現地確認したのであるが、当該地は千田区の祭礼場として相当改変されていたため、古墳ではないと判断したのである。しかるに、その後、再び当該地から出土したハニワ片の提示があったため古墳と断定し、事前調査に着手したのである。

調査は、冬季雪積時に当り、厳寒と降雪に悩まされることとなったが、高月町井口、保延寺、雨森等の方々の御協力により、どうにか終了することができた。京都産業大学考古学研究会の諸君にも寒さの中、期末試験が控えているにもかかわらず多大な御援助をいただいた。ここに記して謝意を表します。

I. 位置と環境(図1)

1. 位置と立地

涌出山古墳は、行政上伊香郡高月町大字唐川字涌出山に所在する。国鉄北陸本線高月駅より北々西約3km程のところにある独立丘である涌出山の北東方向に張り出した尾根筋の中腹に立地する。

涌出山は、標高およそ200m程の丘陵で、長さ約1.4km程の東西に細長い小丘である。現在、丘陵の西端を余呉川が南流して独立丘となっているが、余呉川が改修されるまでは、賤ヶ岳からのびて西側の琵琶湖を界する地累状の山丘と直交した状態で続いていたらしい。涌出山の南側は高時川が形成する広大な湖北平野が広がる。北側は、現在は水田が開けているが、以前湿地を形成していたらしい。涌出山の山頂と周辺平地とは、およそ93m程の比高を計るが、古墳はやや下って標高183.8mのところであり、丘陵の東端、山頂より北東方向に張り出した尾根筋の中腹、山頂より17m程下って、傾斜がややゆるくなったところに築造されている。

2. 歴史的環境

湖北平野は、東側に高時川、南側に姉川があり、これらの沖積作用によって平担で広い平野が形成されているが、涌出山をはじめ、平野北部にあって琵琶湖を界する地累状の山丘上等に古保利古墳群、涌出山の南側の平地に姫塚古墳をはじめとする物部古墳群等多数の前方後円墳の築造が見られる。湖北地方にあっては、姉川以南の長浜平野の東側を界する横山丘陵の北端附近からその西方平地にかけて多数の前方後円墳のみられるいわゆる長浜古墳群と対峰する関係にある。ともに、湖北の若宮山古墳、長浜の茶臼山古墳のように、古墳時代前期にさかのぼって前方後円墳の築造が開始された可能性が強く、中期には、姫塚古墳や丸岡山古墳を代表として、平地に立地して大型化する傾向にある。また、後期に至って前方後円墳の築造が見られなくなる等の共通した一面を見ることができる。ただ、湖北平野においては、湖北町山本若宮山古墳、高月町古保利古墳群、物部古墳群、涌出山古墳群、さらには、方墳であるが、木ノ本町黒田長野古墳群等長浜平野に比べて広い範囲での



図1 涌出山古墳位置図及び周辺主要古墳分布図

(●; 墳形不明、○; 後期古墳群、●; 前方後円墳、■; 方墳、●; 円墳)

1. 涌出山古墳
2. 涌出山古墳群
3. 長野古墳群
4. 長山古墳群
5. 瓢箪塚古墳
6. 横山神社古墳
7. 瓢塚古墳
8. 大將軍古墳
9. 生塚古墳
10. 姫塚古墳
11. 父塚古墳
12. 西野古墳
13. 古保利103号墳
14. 古保利80号墳
15. 古保利75号墳
16. 古保利27号墳
17. 古保利26号墳
18. 古保利10号墳
19. 古保利6号墳
20. 若宮山古墳

古墳の築造を見るのであり、長浜古墳群のように、古代一郷域と想定される範囲をさほど越えない程度で築造されている点とは大きな相違である。また、湖北平野では、後期に前方後円墳の築造を見なくなるが、中期の終末期には、今回報告する涌出山古墳をはじめ、余呉町長山古墳群、浅井町雲雀山古墳群等、後期群集墳とは異り、主墳と従墳の関係の見られる小円墳群の築造を見ている。これらには短甲含むものがあり、畿内の鉄鍬を出土しており、さらには、竪穴式石室を簡略化させた構造の内部主体を持つ等非常に畿内色の濃厚な古墳群であって、いわば特異な古墳群といえる。長浜平野にあつては、現在のところ知られていないのである。

後期に至つては、湖北町四郷崎古墳で横穴式石室が採用されて以降、横穴式石室を主体とする群集墳が爆発的に築造されるが、湖北平野にあつては、涌出山周辺、西方地累状山丘周辺、余呉川上流の溪谷、高時川上流の谷合部等平野部を持たない谷合い部をも含めて非常に多数の群集墳が形成されており、この点も長浜平野とは顕著に異なる点であり、湖北平野が極めて早い速度で村落の変化が生じていった現われであろう。

こうした湖北平野における古墳文化の展開は、生産基盤が安定していたことも一つの要因であるが、古墳時代においては、畿内の政権にあつて、その前半には日本海地方への進出の拠点、後半には、やはり日本海地方との文物の交流の拠点として湖北平野の重要性が認められていたことと無関係ではなからう。湖北平野は、日本海地方と畿内・東海両地方を結ぶ結節点であり、日本海地方への門戸的位置にあるため、当該地域の政治的、社会的重要性が高かったといえるのであり、これらの情勢に対応して古墳文化が展開していったといえるのである。従つて、今回報告する涌出山古墳の発掘成果は貴重な資料を提示するものと考えてる。

II. 調査の結果

1. 墳 丘

イ. 墳形及び規模(図2)

墳形については、後述するように、外部施設としてハニワ列があり、その圍繞状態から円墳であったことは明らかである。ハニワ列は上下二段にめぐっていたが、下段のものは墳丘の裾部をめぐるのであつて、その直径は12.4mを計る。

墳丘の高さは、古墳が丘陵斜面に築造されているため、計測箇所によって数値が異なる。高さを標高で示すと、墳丘頂部は183.8m、裾部は、丘陵の高所側で183.4m、低所側で182.2mを計る。従つて、墳丘裾部の最大比高は1.2mであり、墳丘の高さは0.4～1.6mとなる。

ロ. 墳丘の構造(図3)

墳丘の築成は、地山整形からハニワの圍繞までの間で八段階に分けることができる。

まず第一段階は地山の整形である。整形はまず、丘陵の高所側を円弧状に切断する。これは溝状に掘り込まれるが、深さは標高183.4mまでで、これ以下の自然傾斜面には及んでいない。従つて、墳丘周囲の約7分の2程度がこの溝状の掘り込みによって決定される。次に行われる整形は、盛土すべき範囲で、東西トレンチの

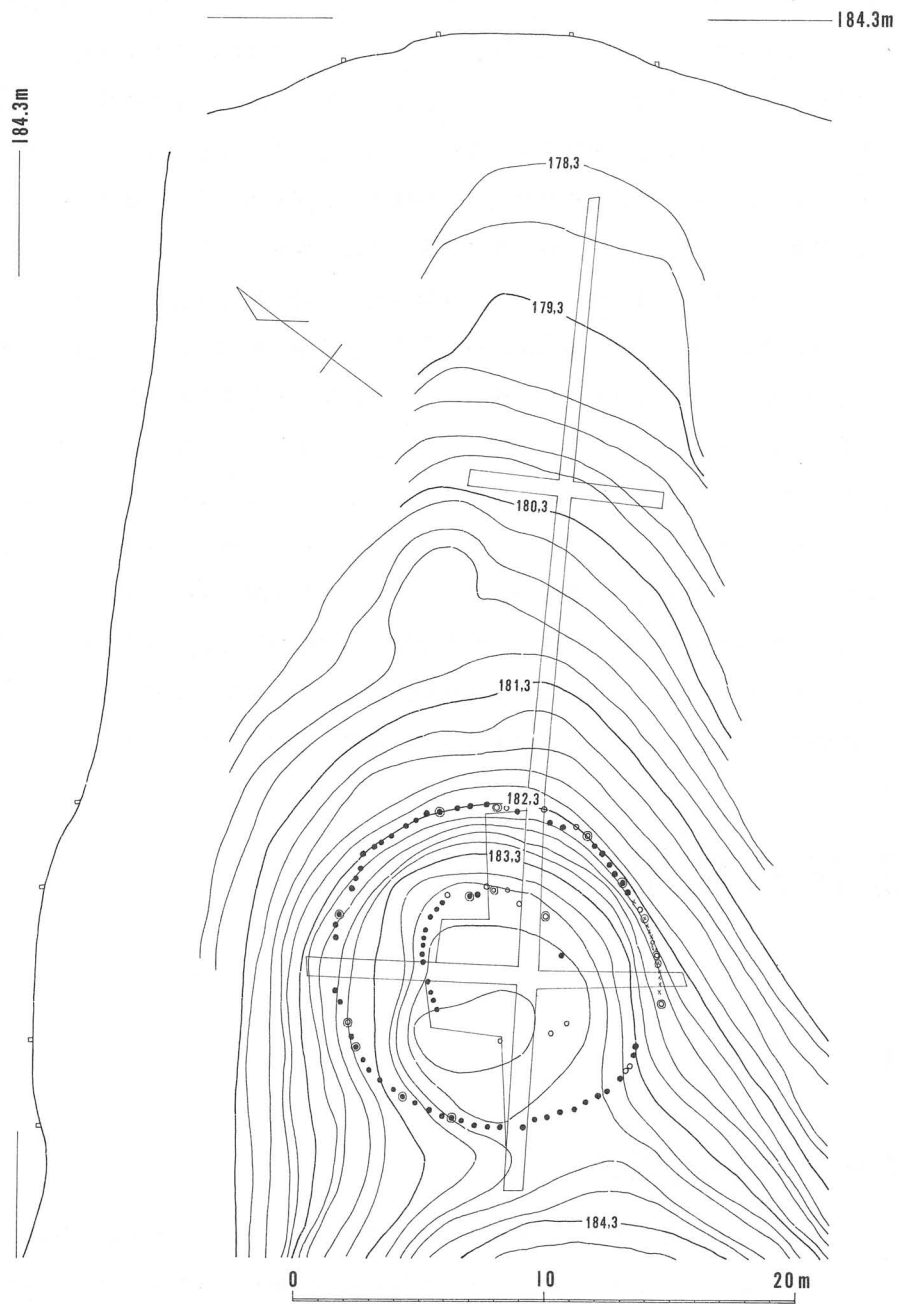


図2 墳形測量図

(●; 原位置を保つハニワ、○; 原位置を保たないハニワ、×; ハニワ採取地点、◎◎; 朝顔形ハニワ)

観察結果を示すと、水平距離（以下同じ）1mまで、標高183.7mまでは、上記の溝状部が残される。従って、溝の深さは約30cmである。以東では緩傾斜面を以って、標高182.4mまで削平される。墳丘東端より西側へ幅2.4mの間では、浅く溝状に凹む。最深所182.1m、東端が182.2mで、深さは10~30cmである。この部分は、後述するように、盛土の構造が異なる部分である。南北トレンチの観察では、整形面はほぼ水平で、丘陵の尾根筋に直交する方向では、並行する方向で示される削平レベルに合わせて削平され、以下では自然傾斜面が残される。墳丘裾部は、上述した丘陵高所側の円弧状の掘り込み以外は整形されていない。

地山整形後は盛土作業が実施される段階であるが、盛土は、墓坑を形成するまでの段階と埋棺後に墳丘を完

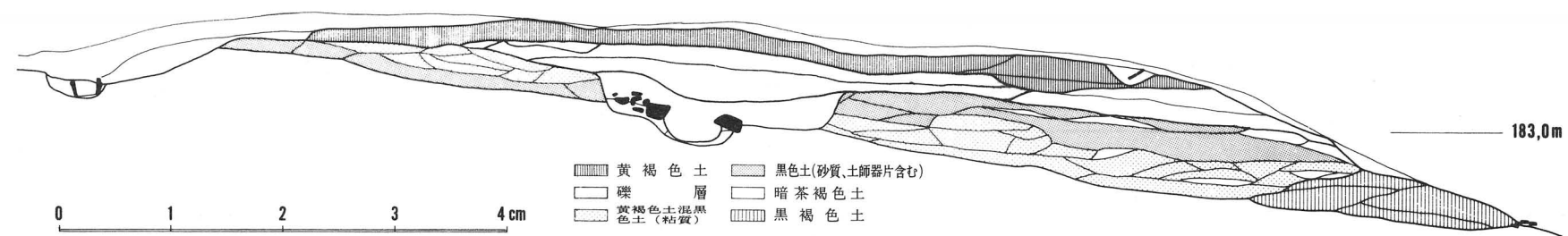


图3 墳丘断面土層実測図

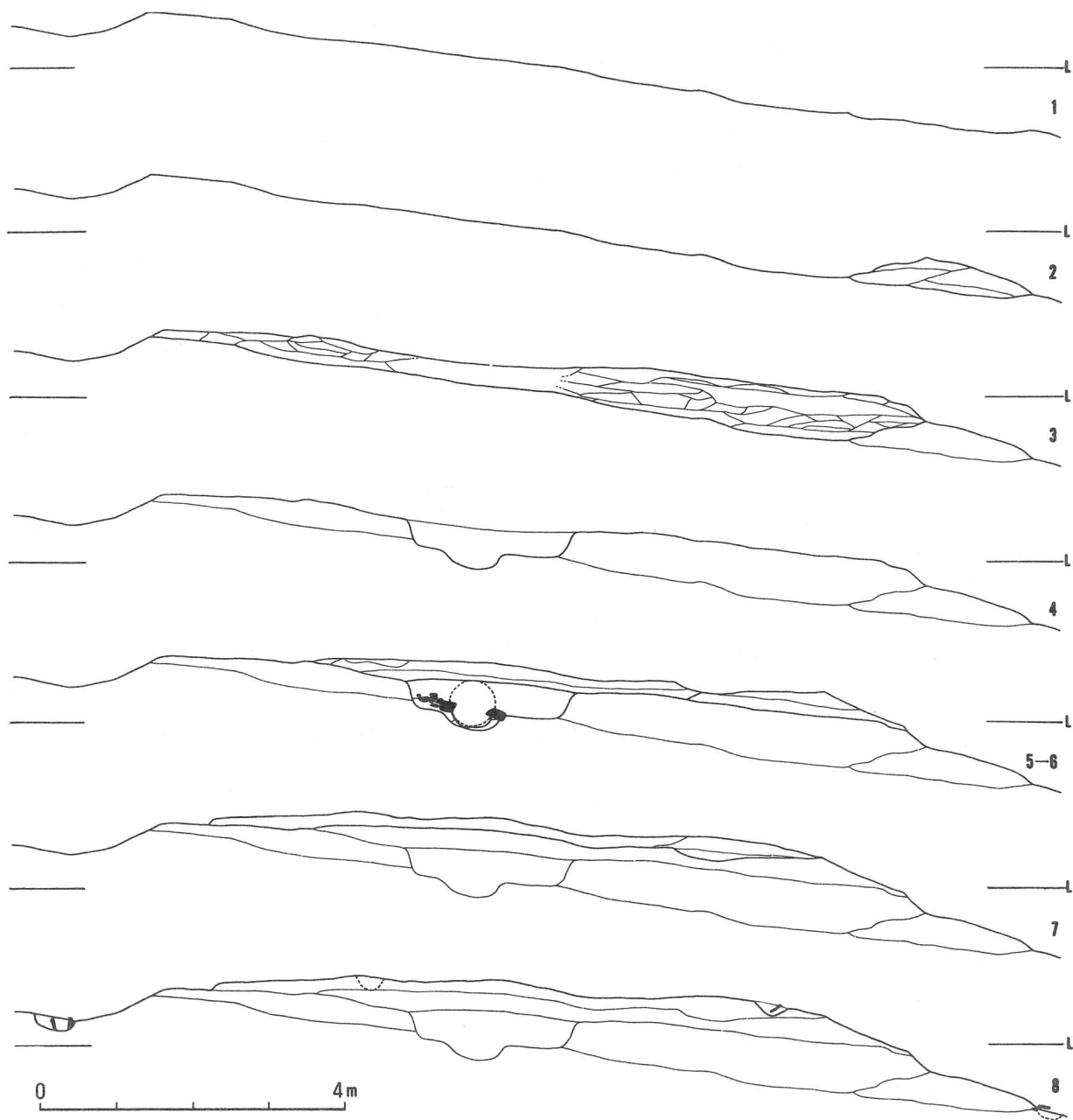


図4 墳丘築成工程模式図(番号は本文参照、L=183m)

成する段階とに明瞭に区別される。さらに、前段階は、墓抔の掘削までに二小段階に区別できる。東西トレンチの所見では、丘陵の低所側において、まず、墳丘端部附近で整形された浅い凹所部上に、凹所部を底辺とした三角形の盛土がなされる。頂点で標高182.66mを計り、従って、高さ56cmまで盛り上げられる。丘陵高所側にはこの盛土は見られないが、地山の削り残しが標高183.7mにまで及んでおり、特に、盛土によって墳丘端部附近を盛り上げる必要がなかったようである。南北トレンチにおいては、南側で、地山整形レベルである標高183.16mの高さまで、墳丘裾部の盛土がなされ、その後、南端より1.88m内側で、幅2.66mにわたる盛土がなされる。標高183.64m、すなわち、厚さ48cmを計る。北側では、墳丘裾部の盛土はなく、端部より38cm内側の間は自然地形が残される。これより内側、幅2.78mにわたって、厚さ22cm、標高183.1mの盛土がなされ

る。この南北トレンチにおける墳丘両端の盛土は、東西トレンチの東端の盛土に対応するものである。従って、盛土は、西側を除く外周に、幅2.06～2.78mにわたって、土堤状の盛土がなされるのである。西側は、地山を掘り残すことによってこれにかえている。高さは、トレンチによる標高を示すと、西で183.7m、北で183.64m、南で182.66m、南で183.1mで、自然地形に沿って、丘陵高所側が漸次高くなっている。

このように、墳丘の外周辺を盛り上げた後、その内側を埋めるように盛土される。この盛土が完了した後に墓壇が掘削される。この段階を三段階目とする。墓壇は、東西トレンチで見ると、肩部幅2.2m、下端幅1.88mで、肩部からの深さは33～34cmであるが、下端をレベルで示すと、西側で標高183.16m、東側で183mと墓壇底に傾斜が生じている。墓壇底には、さらに、西側によって棺底の掘り込みがなされる。幅80cmの横断面浅いU字形のもので、深さは、15～25cmを計る。南北トレンチでは、墓壇の深さは、北端で肩部が標高183.38m、下端で183.16m、東端で、肩部183.46m、下端183.6mを計り、深さは22～30cmである。

墓壇掘削後、棺が埋納されるわけだが、その墓壇内の構造については主体部の項で詳述する。

埋棺後は、棺上部に厚さ15cm程の盛土がなされ、その上部に、長さ20cm前後の割石が積まれる。東西トレンチでは、幅3.3mにわたって、標高にして183.7mまで（下面は183.3m）積み上げられる。墓壇全体を覆い、西側へ0.1m、東側へ1m程広く及ぶ。南北トレンチでは、下面がやはり墓壇肩部の高さで、肩部外側に約25cmまで及ぶ。この礫石の積み上げは雑然としたもので、ほぼ水平に積み上げられている。

次の段階は、墳丘を完成する段階である。この段階の盛土は、ハニワの遺存状態からしても削平されている部分が多く、遺存墳頂のレベルが183.8mであって、表土除去後、積石までは約20cm程で、本来の盛土は明瞭でない。墳丘裾部附近については、西側は円弧状の掘り込みによる溝状部の内側斜面が墳丘外表面を形成しており、他の部分についても、外周に最初に盛土される部分の外表面がそのまま墳丘斜面となっているため、最終段階の盛土は墳頂部附近に限られていたと考えられる。墳丘完成後、ハニワが樹立される。これについては次の項で述べる。

以上、墳丘の築成段階をまとめると以下の通りである（図4）。

1. 地山整形
2. 墳丘外周の盛土
3. 外周盛土内側への土砂の充填
4. 墓壇の掘削
5. 棺の埋納
6. 墓壇上部の割石被覆
7. 墳頂部の盛土
8. ハニワの樹立

2. 外部施設(図5・6)

外部施設としてはハニワ列がある。ハニワ列は、墳頂部と墳丘裾部の二重にめぐらされている。原位置を保つものは、墳頂部で16基、墳丘裾部で57基である。以下では、ハニワの採集地点に番号を附しておいたので、その番号を各ハニワに附して呼ぶことにする。

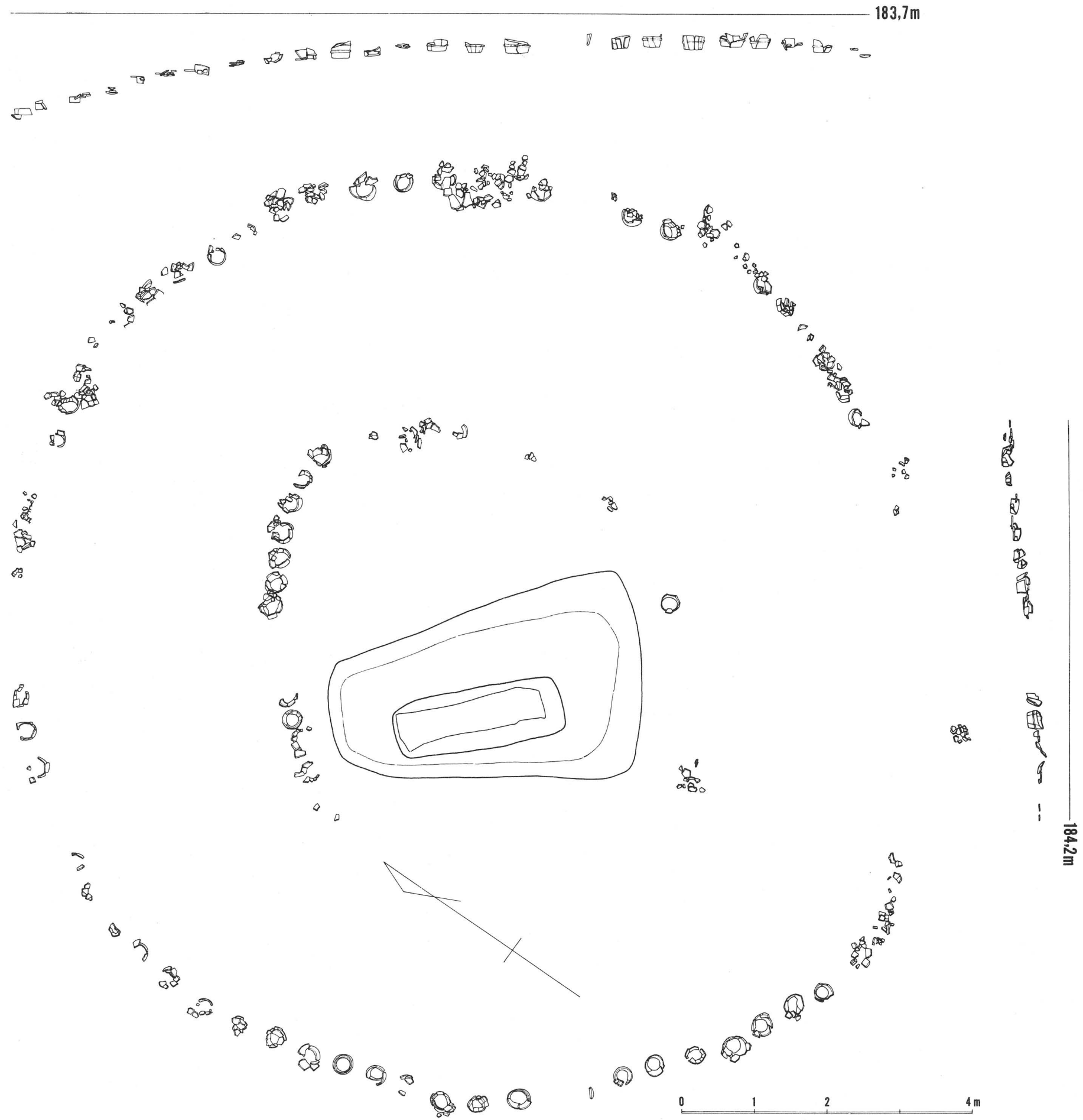


図5 ハニワ出土状況実測図

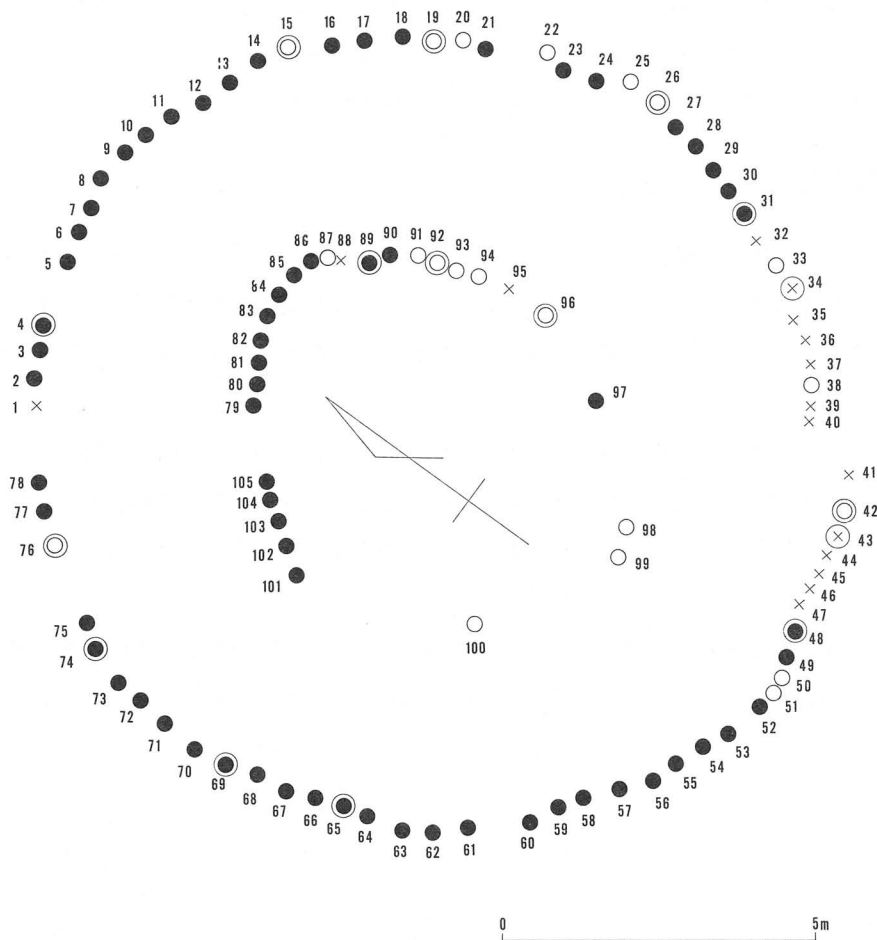


図6 ハニワ配列番号図(実測図番号と一致する)

(●; 原位置を保つハニワ、○; 原位置を保たないハニワ、×; ハニワ採取地点、●◎(×); 朝顔形ハニワ)

イ. 墳頂部ハニワ列

原位置を保つハニワは16基であるが、北側の遺存状態が非常に良好であった。102号から105号及び79号から85号までの11基は、105号と79号との間に3基分を欠くが、およそ $R=4.26\text{m}$ の弧形に並び、86号、89号、90号、91号の4基は、 $N35^\circ W$ の方向で直線的に並ぶ。これら原位置を保つものと、79号の対面で原位置にある97号とから圍繞状態を復原すると、北西部及び南東部は、各々15基を $R=4.26\text{m}$ 程の弧形に並べ、北東部及び南西部を直線的に12基並べて結んでいたと考えられる。従って、両弧形部分の間隔5.5m、両直線部分で5.2mの方形に近い状態で、総計54基が並べられていたものと思われる。

原位置を保つもので、その基底部のレベルを標高で示すと以下の通りである。

102号-183.8m、103号-183.76m、104号-183.66m、105号-183.64m、79号-183.6m、80号-183.52m、81号-183.48m、82号-183.46m、83号-183.44m、84号-183.36m、85号-183.32m、89~91号-183.42m

以上から、原位置を保つもので最高48cmの比高差があり、自然丘陵の低地側に向けて漸次、レベルを下げて樹立されている様子が知れる。すなわち、墳頂部は、ハニワ圍繞範囲内は平坦であるが、水平でなく、丘陵低地側に傾斜していたと考えられ、ハニワもこれに合わせて樹立されていたことが知れるのである。

ハニワの樹立方法は、平面では確認できなかったが、トレンチの断面土層等の観察で、幅45cm、深さ20cm程

の横断面U字形の溝が確認できたので、墳丘に溝を掘り、ハニワを埋設していたことを知ることができた。

ハニワは、ほとんど基底部を残すのみであるが、89号、96号で朝顔形ハニワの口縁部片が出土しており、また、96号、98号で円筒ハニワの口縁部片に篋刻線による文様を持つものがあつた。

ロ. 墳丘裾部ハニワ列

底部が遺存していて原位置を確認できたものは2～7号、9～25号、27～32号、48～75号の57基である。南東部の遺存状況が非常に悪く、流失しているものが多かった。最も遺存状況の良好なものは53～71号で、丘陵の高所側に位置するものである。10～32号も遺存状況は良好であるが、丘陵の低所側に当たるため、土圧により垂直に残るものは少い。

圍繞状況は、57～63号の7本が若干円周からずれるが、他は、 $R = 6.2\text{m}$ の同一円周上にのるようである。従って、直径12.4mの正円形に立て並べられていることになる。ハニワの芯心で45～55cm、ハニワ間で22～42cmの間隔を置いており、墳頂部ハニワ列より間隔が広い。流失部分を補うと、墳丘裾部には79本のハニワが樹立されていたことになる。

次に、ハニワの埋設法であるが、墳丘裾部に、幅0.54m、深さ24cm程の断面U字形の溝が掘られており、ハニワはこの溝内に埋設されていた。根固め石や円筒内に割石を入れるものも若干見られたが、ほとんどは溝内



図7 主体部上方積石状況実測図(破線; 木棺、2点破線; 墓壇上端)

に直接置き、埋められていた。

ハニワは、墳丘裾部のレベルに沿って樹立されており、従って、丘陵高所側から低所側に向って漸次、レベルが下る。たとえば、52～76号のハニワの基底部レベルを示すと以下の通りである。

52号－183.4 m、53号－183.42m、54号－183.44m、55号－183.46m、56号－183.48m、57号－183.46m
58号－183.48m、59号－183.46m、60号－183.5 m、61号－183.38m、62号－183.4 m、63号－183.42m
64号－183.46m、65号－183.34m、66号－183.32m、67号－183.3 m、68号－183.26m、69号－183.22m
70号－183.08m、71号－183.08m、72号－182.98m、73号－182.84m、74号－182.7 m、75号－182.6 m
76号－182.54m

以上から、54～60号附近が最高位に位置し、漸次低位に埋設されている様子が知れる。最低位に位置する21号ハニワの基底部が182.15mにあり、比高 1.3mを計る。

ハニワは大半が円筒ハニワであるが、朝顔形ハニワが、4・15・19・26・31・34・42・43・65・69・74・76の各号で採集できた。このうち、基底部まで判明し、その所属が明らかになったものは74号ハニワのみである。また、円筒ハニワの口縁部に篋による刻線文のあるものが4・6・7・14・17・27・34・35・40号で見つまっている。

ハ. その他(図7)

墳頂部と墳丘裾部の二重のハニワ列の他に、主体部上方の被覆礫層の上面より形象ハニワ及び朝形ハニワ、須恵器甗、壺等が出土している。礫層の上面からは円筒ハニワの小片も出土しており、墳頂部ハニワ列のものであるかもしれないが、形象ハニワ及び須恵器類はこの礫層上面でのみ出土しており、本来の位置を示すものと考えてよい。

3. 主体部

イ. 主体部の位置

主体部は、自然丘陵の傾斜に対して直交する方向にある。主体部は墳丘に対して中央にあるのではなく、丘陵高所側墳丘端部より5m、低所側より7m程の位置にあり、丘陵高所側に偏して設けられている。墳丘と主体部の位置から考えて、丘陵低所側に、並列したもう一主体の存在が考えられそうであるが、今回の調査では検出できなかった。

ロ. 構造(図8・9)

墓壇は、前述した第3段階の盛土後に、その盛土を掘削してつくられる。平面的には、上端で、長さ4.4m、幅は南東部で2.8m、北西部で1.72mを計り、不正楕円形を呈している。下端は、長さ4m、幅は南東部で2.04m、北西端部で1.36mで、上端よりやや長方形に近くなる。軸線を取ると、N45度Wとなり、ほぼ木棺の軸線と同じになる。深さは、南西端で36cm、北西端で36cmと同じで、墓壇底面も水平である。

墓壇底には、さらに、棺床となるべき掘り込みがなされる。長さ2.18m、幅は南西端で0.88m、北西端で0.78mとなり、南西側が10cm程広がる。この棺床というべき掘り込みは墓壇底面の北西部に偏して掘削されて

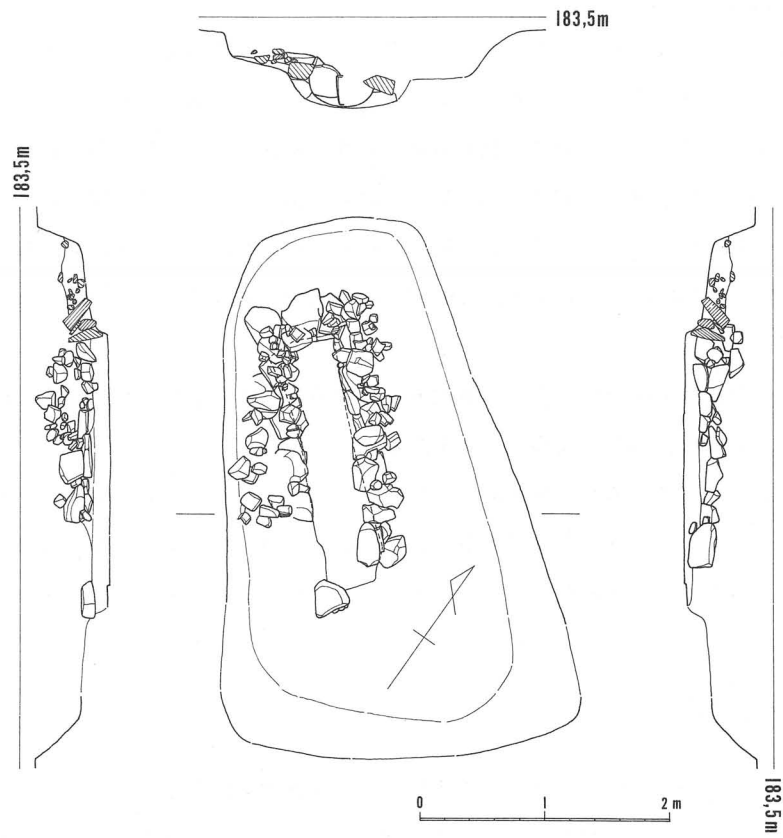


图8 主体部実测图

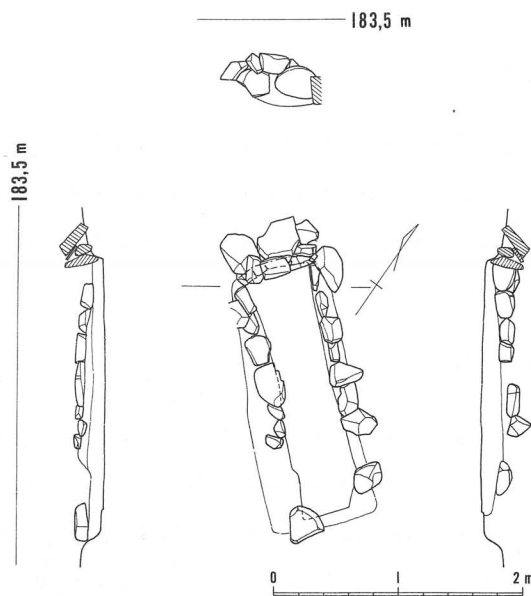


图9 主体部底部実测图

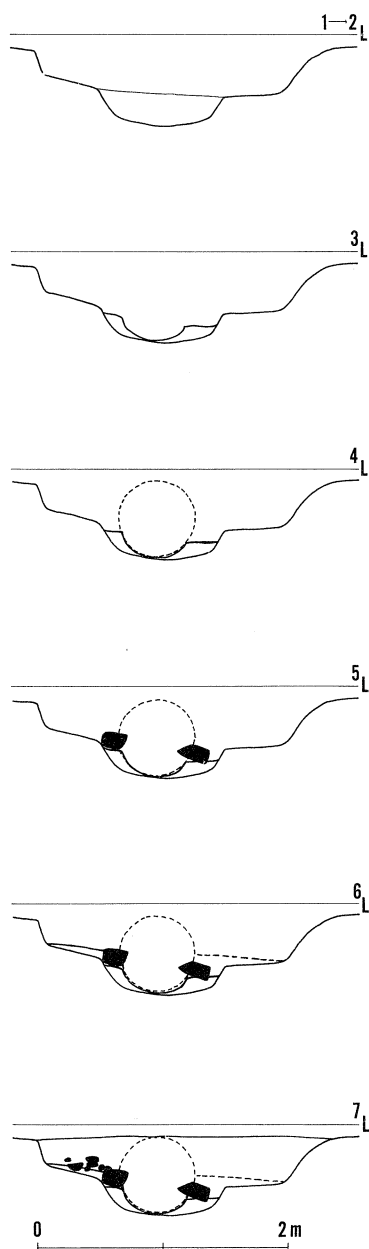


図10 主体部構築工程模式図
(番号は本文参照、L=183.5m)

いる。深さは、墓壇底より26cmで、横断面は皿底状を呈している。

棺は、この棺床の中央部に置かれる。棺の規模及び形状は、棺に朱が塗布されており、その遺存状態により推察することができた。長さは2mで、形状は割竹形である。朱の遺存幅は一律で0.5mを計る。同心円復原すると直径60cm程の規模となる。

棺は、墓壇底直上に置かれる。棺床ともいべき掘り込みは深さ26cmで、棺の復原径の2分の1に及ばないが、幅が78~88cmと広いために、棺を置いて生じる空所に黒色土あるいは黄褐色の粘質土が充填される。これは、棺の外底面に及んでおり、本来の棺床と呼ぶべきものかもしれない。ここまでの過程をまとめると、①墓壇の掘削後、②棺床を設置すべく墓壇底をさらに掘り凹め、③この凹所に黒色土あるいは黄褐色の粘質土を置き、④この後に棺を置くという順序を考慮することができる。ただし、本来の棺床と呼ぶべきものといったものも、いわゆる粘土棺床のように硬質ではなく砂質であり、本来的に棺を固定すべくU字形に構築されたものではなく、棺の自重により、見掛け上棺床を形成したと考えた方が良くもしい。

④までの段階では、墓壇底の凹所内で、高さ20cm程までしか棺が固定されていないが、次いで、墓壇底全体を含めて、黄褐色の粘質土が敷かれる。その厚味は棺の中程まで達しており、かつ硬質であるので、この段階で一応棺の固定が完全になされたのであろう。この黄褐色粘質土層の肩部には、長さ20cm前後、厚さ10cm程のやや扁平な石材が、棺の長軸に並行して一列一重に敷き並べられていた。この石列は、棺幅より狭くなり、両列ともやや内傾した状態にあった。このことは、この石列が棺本体に接して敷き並べられていたことを示すものであろう。また、この石列は棺底より35cm程の高さに達しており、棺の中程よりやや上方に位置することになる。石列後方には、長さにして10cm前後の石材が土砂を混ぜて充填されている。特に規則的な点は認められない。石列レベルより上方及び棺内には、同様の礫石混りの土砂があった。従って、石列上方では、特に壁面を構成することなく、直接棺を被覆していたものと解される。棺底よりおよそ50cm上方には、墓壇上端全体を覆った礫層が認められるが、その下面に10cm程の厚さの黒色の砂質土がある。棺の直径は60cmと推察され、棺の腐朽後の土圧による低下を考えれば、およそ棺全体を礫石混りの土砂で覆った後、墓壇上面で全体に黒色土を敷きつめた後、礫層を形成したことが知れる。

なお、棺の短側辺側は、高さ25~35cm、幅30~35cm、厚さ40cm程の扁平な石材が2枚、縦位置におかれ、短側壁を構成している。この後方には、同様の石材を後方から押えるように立て掛けておかれ、控え積みとして置かれている。この後方及び上方部が、礫石を混ぜた土砂で埋められていることは長側辺側と同様である。

以上から、④段階以降は、⑤棺を固定すべく、黄褐色粘質土を棺と墓壇壁の間に、棺の中程の高さにまで敷

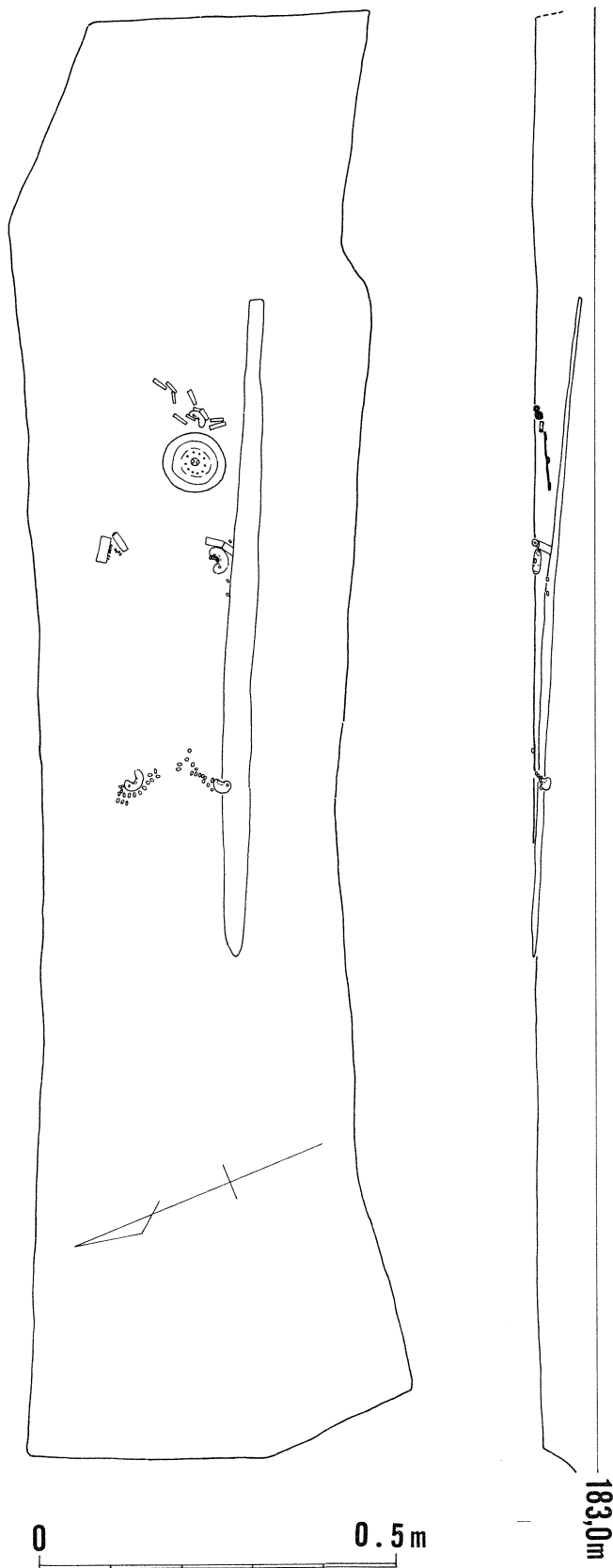


図11 主体部棺内副葬品出土状態実測図(平面図の外ワクは朱の範囲)

きつめる。ただし、棺の短側辺では、偏平石材を縦位に置いて壁とした後、同様の石材でその後方を押えている。次いで、⑥棺に接して、棺の西長側辺に偏平石材を横位置に置き並べる。⑦石列の後方及び棺全体を覆って礫石を混じえた土砂を充填する。棺の埋設が終了すると、ほぼ墓壇全体が埋まるが、さらに、⑧墓壇上面全体を覆って黒色土が敷かれ、その上方に、⑨厚さ40cm程にわたって礫石が積まれる、という順序を知ることができた(図10)。

ハ. 副葬品の配列(図11)

副葬品は、鏡1面、勾玉4点、管玉12点、ガラス玉82点、鉄刀1振、鉄刀子2本である。すべて棺内に納められていた。

鏡は、棺の南東側短側辺より約60cmの位置で、棺の左右長側辺のほぼ中央に、鏡背面を上方に向けて置かれていた。鏡下面には木質部の遺存が認められた。この鏡を中心に、南東側に管玉8点と勾玉1点、北西側には、左右二群に分かれて、西側に勾玉1点、管玉2点、ガラス玉多数、東側に管玉2点、ガラス玉多数があった。管玉は、鏡の南東側のものは、直径にして北西側のものに比べて二分の一程度の細いものであり、ガラス玉は南東側にはなく、北西側の二群のみに集中し、かつ、一列に並ぶものが多かった。これらの配列状況より、胸部に鏡が置かれ、玉類は首飾りとして遺体の首に飾られていたものと思われる。すなわち、鏡の南東部の一群の管玉は、首の背中側に回るものであり、北西側のガラス玉、管

玉、勾玉の一群は胸部側に回っていたものであり、遺体の腐朽とともに左右二群に分かれたものであろう。

玉類は、この首飾りと考えられる一群の他に、鏡より北西側50cm程の位置で、左右二群に分かれて出土している。各群とも勾玉は1点とガラス玉が19点及び20点で群をなしている。ガラス玉は、首飾りのものより大きく、各群とも輪状に列をなして出土している。鏡が胸部の位置にあるとすると、この二群は手首の位置にあたり、左右両手首を飾る腕飾りであったものと思われる。

これら、鏡、首飾り、腕飾りの南西側、棺の長側辺に沿って鉄刀が一本あった。また、鏡より南東側50cm程の位置に、棺の長軸に直交して鉄刀子が出土している。

以上の副葬品の配列から、遺体には首飾りと腕輪がはめられ、胸部に鏡を置き、遺体の左側面で上半身の位置に鉄刀、頭部の後方に鉄刀子を置いていたことが明らかである。また、首飾り、腕輪の位置、出土状態等から、遺体は仰臥伸展であることも明らかである。さらに、遺体の身長についても、これら副葬品の位置から、1.5 m程の比較的小柄な人物であったと考えられる。

III. 遺物

涌出山古墳からの出土遺物は以下の通りである。

副葬品 珠文鏡1、鉄刀1、鉄刀子片2、勾玉4、管玉12、ガラス玉82

主体部上方礫層上面 須恵器甗1、壺片一個体分、杯蓋片一個体分、形象ハニワ片一個体分

外部施設 円筒ハニワ、朝顔形ハニワ

封土中 土師器片1

1. 副葬品(図12・13)

イ. 鏡(図13-23)

いわゆる珠文鏡である。直径 8.1cmを計る。紐は直径 1.6cmで、高さは鏡面より 0.7cm。紐孔は、紐の中心よりずらして直線的に貫通させた2孔と、これに直交し、斜上方から穿孔した1孔の計3孔が穿たれている。紐の周囲に、直径1.8cmと2.2cmの二重の圏線がめぐらされ、この外側に珠文がめぐらされる。珠文は直径 0.5cm、高さは鏡面より0.4cmで、その中央で、径 0.3cm程が中高になっている。珠文には二カ所で鑄くずれが認められる。珠文は各々二重の弧線で結ばれている。珠文帯の外側にはさらに、直径 3.6cmの圏線がめぐり、幅 0.6cmの鋸歯文帯、幅1.5cmの平縁と続く。平縁は厚さ0.2cm程、鋸歯文は幅0.1cm程のクサビ状の刻みである。

なお鏡面は、縁部がやや反りを持つ。

ロ. 鉄製刀子(図13-21・22)

2個体分出土しているが、ともに完品ではない。21は残存長6.7cm、刃部で4.7cmで、茎及び刃部の両端を欠失している。両関で、茎は幅1cm、厚さ0.3cm、刃部は関部で幅1.5cm、背の厚さ0.3cmを計る。茎には木質部が残る。22は残存長4.1cm、刃部で1.4cmの長さを残す。やはり両関である。

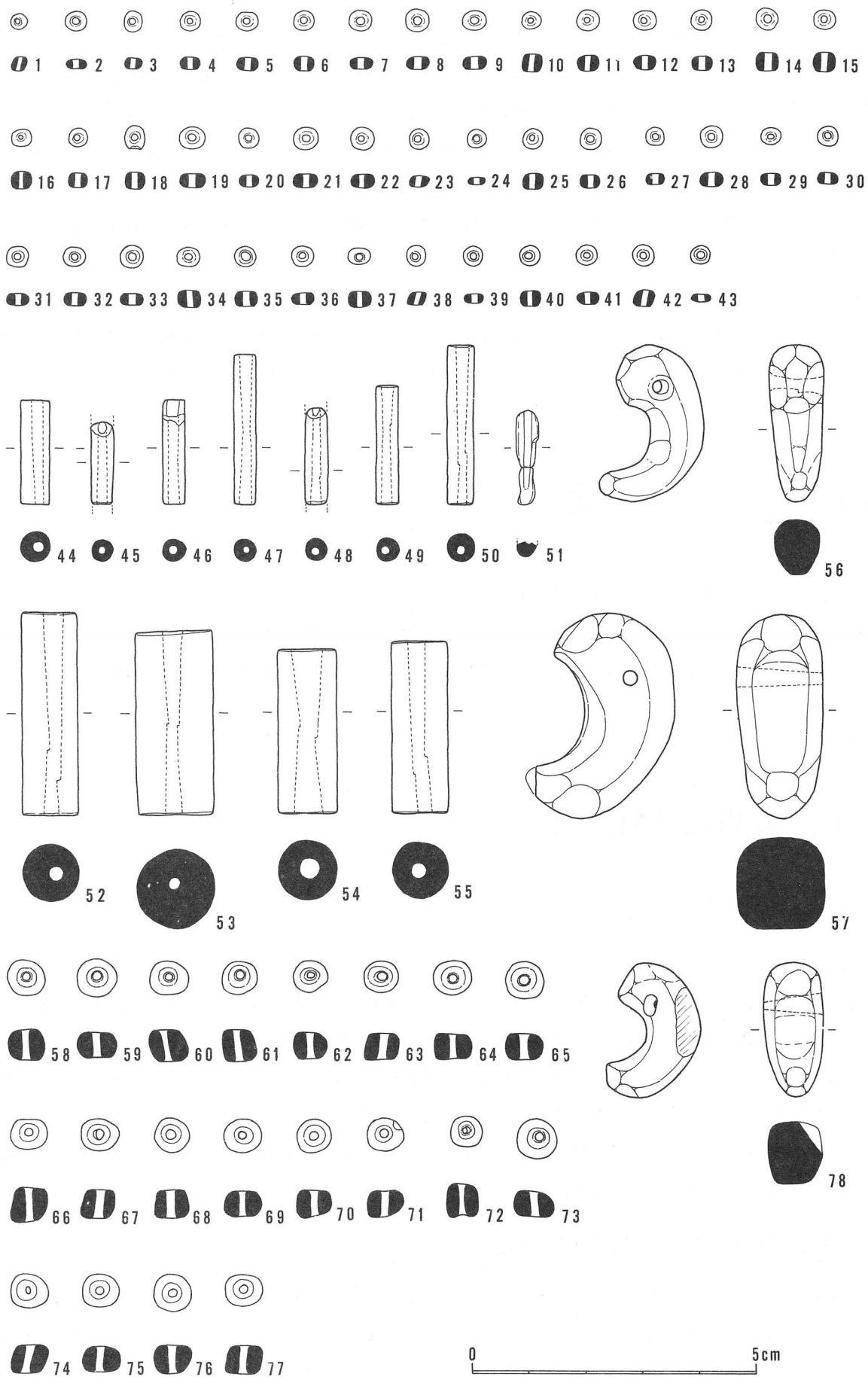


图12 主体部棺内出土首飾(1~57)、左側腕輪(58~77) 実測図(I)

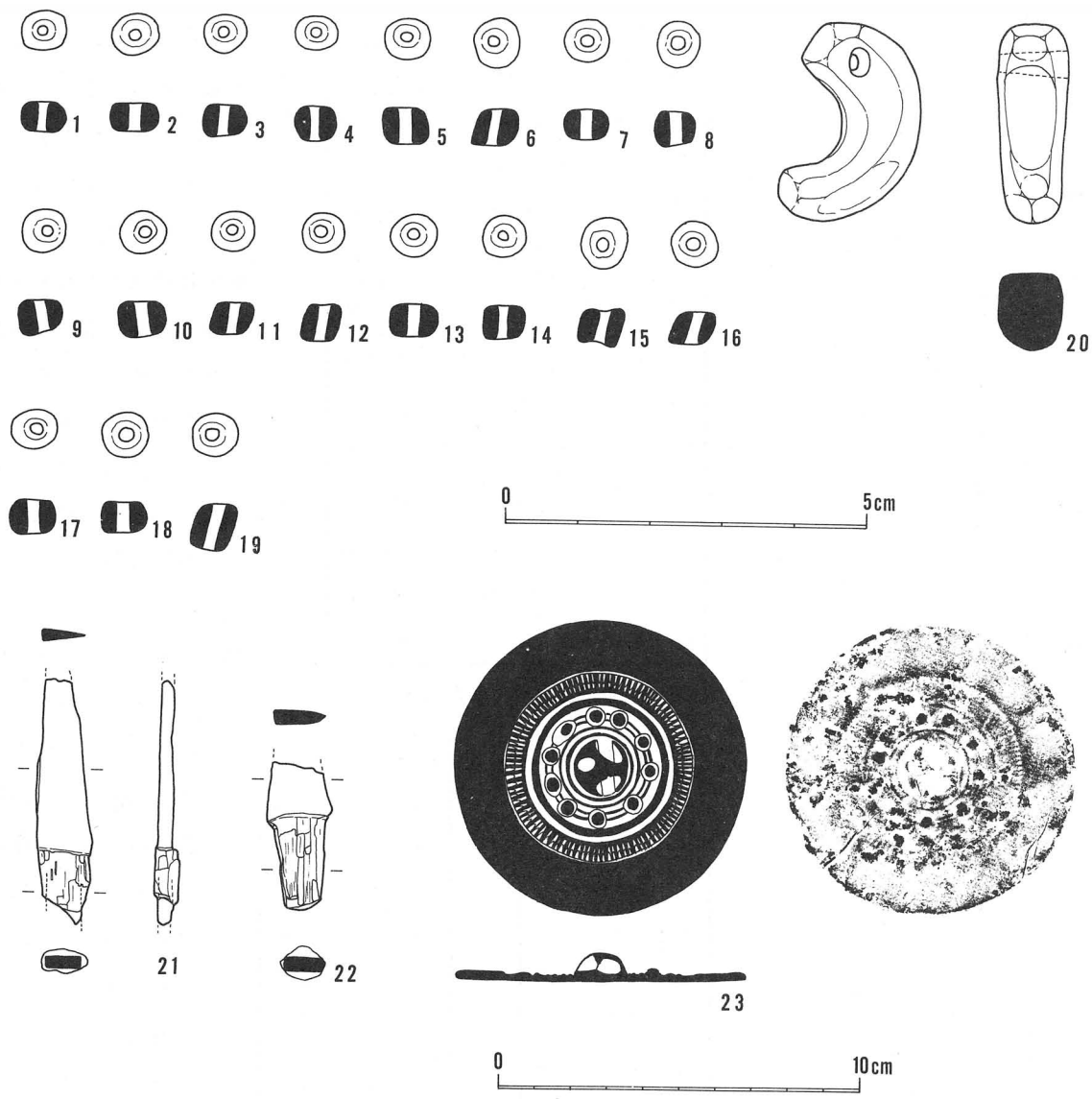


図13 主体部棺内出土 右側腕輪(1~20)、鉄刀子(21, 22)、鏡(23)実測図(II)

ハ. 鉄 刀(図14)

全長93.4cmの直刀である。刃部は長さ73.8cmで、幅は中程で2.8cmを計り、細身である。厚さは、背の部分で0.9cm程である。関がなく、刃部下端より3cmの間を置いて、長さ2.1cm、深さ0.4cmのくり込みが茎の刃部側に見られる。茎は幅2.6cm、厚さは0.9cmである。茎には、下端より3cm及び8.7cm、12.4cmの三カ所の位置に目釘穴が穿孔されている。

ニ. 勾玉(図12-56・57・78、図13-20)

図12-56・57は首飾り、図12-78は左腕、図13-20は右腕の腕飾りの勾玉である。

56は長さ2.8cm、幅、厚味とも頭部が大きく、幅は頭部で1.3cm、尾部で0.6cm、厚さは頭部で0.9cm、尾部で0.6cmを計る。中程の横断面は卵形で、研磨は不明瞭ながら稜を残す。全体的にカンマ形の形態を示し、背の丸味はなだらかである。孔は両面からの穿孔である。材質は瑪瑙製で、緑色を呈す。

57は、長さ3.6cmの大型品である。黄白色を呈し、やはり瑪瑙製品であろう。頭部の幅1.6cm、厚味1.5cm、

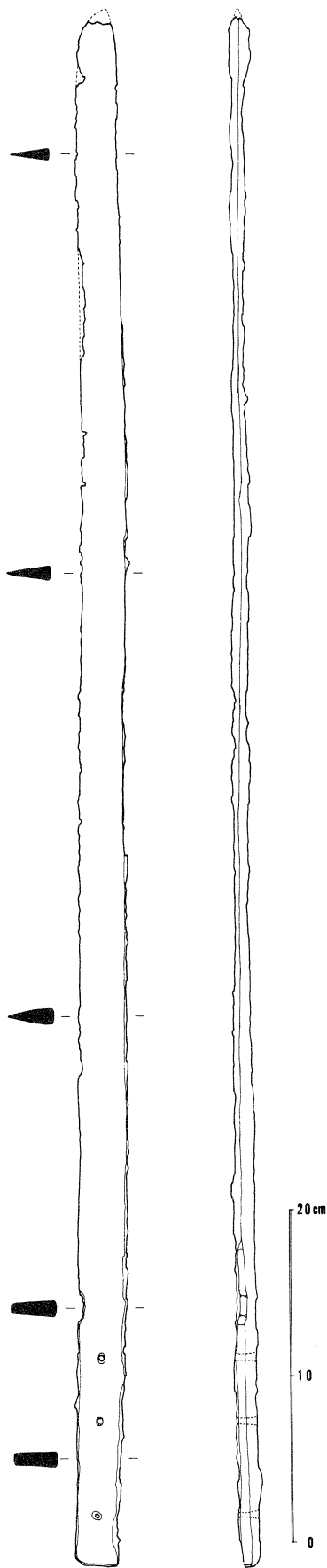


図14 鉄刀実測図

図 No.	長さ	直径	穿孔
44	1.85	0.55	片面
45	1.4 以上	0.4	片面
46	1.85	0.4	両面
47	2.65	0.4	両面
48	1.7 以上	0.4	片面
49	2.05	0.4	両面
50	2.8	0.5	両面
51	1.7 以上	0.4 以上	不明
52	3.55	1.0	両面
53	3.25	1.4	両面
54	2.9	1.05	両面
55	3.0	1.0	両面

表1. 管玉計測値一覧表(単位; cm)

図 No.	直径	厚さ
1	3.5	1.5
2	4.0	3.0
3	4.0	2.0
4	3.5	3.0
5	3.5	1.5
6	3.5	2.5
7	4.0	3.0
8	4.0	2.0
9	4.0	2.5
10	4.0	3.0
11	4.0	2.0
12	4.0	2.5
13	4.0	2.0
14	3.5	2.0
15	3.5	2.0
16	4.0	2.5
17	3.0	2.0
18	3.5	2.5
19	3.5	2.5
20	3.5	1.0
21	3.5	2.0
22	4.0	2.5
23	4.5	2.5
24	3.5	2.0
25	4.5	2.5
26	4.0	3.0
27	3.0	2.5
28	3.5	3.0
29	4.0	3.5
30	4.0	3.0
31	4.0	2.5
32	4.0	2.5
33	4.0	3.0
34	3.5	3.0
35	4.0	2.0
36	4.0	2.0
37	4.0	2.0
38	3.5	2.5
39	4.0	2.5
40	3.5	2.0
41	3.5	2.0
42	3.5	2.0
43	3.0	2.5

表2. 首飾りガラス小玉計測値一覧表(単位; mm)

尾部の幅1.2cm、厚さ1.2cmと幅、厚味、また、頭部と尾部の大きさに差が少なく、いわゆるCの字形の勾玉である。研磨は面を残し、横断面は隅丸の方形を呈す。頭部、尾部ともにその端部が尖り気味になっている。孔は片面穿孔である。

78は、長さ 2.4cm、幅は頭部で 0.9cm、尾部で 0.8cm、厚さは頭部で 1cm、尾部で0.8cmを計る。厚さ、幅に差がなく、頭部と尾部

も大差がない。57と同様Cの字形の勾玉である。研磨も57と同様で、良く稜を残し、横断面も張りのある方形を呈する。頭部、尾部とも尖り気味である。孔は片面からの穿孔で、淡緑色より白味の強い瑪瑙製品である。

20は、長さ 2.9cm、幅は頭部で 1.1cm、尾部で 0.9cm、厚さは頭部で 1cm、尾部で 0.9cmを計り、78とほぼ同規模である。研磨、形態とも78と同様であり、横断面も変四角形を呈していて良く稜を残している。材質も黄白色を呈す瑪瑙製で、穿孔は片面である。

以上の4点の勾玉は、

図No.	直径	厚さ
58	6.5	4.5
59	6.5	4.5
60	6	4.5
61	6	5
62	6	5.5
63	7	5.5
64	7	4.5
65	6.5	5.5
66	7	4.5
67	5.5	6
68	6.5	4.5
69	6	5
70	6.5	4.5
71	6	5
72	6.5	5
73	6.5	6
74	6.5	5
75	6.5	5
76	6.5	4.5
77	6.5	5

表3. 左腕輪部分ガラス小玉(単位; mm)

図No.	直径	厚さ
1	6	5
2	6	4
3	6.5	5
4	6.5	5
5	6	5
6	6	4.5
7	6.5	4
8	6	4
9	6.5	4.5
10	6.5	5
11	6	4.5
12	6.5	4.5
13	6	5
14	6	4.5
15	6.5	5
16	6	5
17	6.5	6.5
18	6.5	4.5
19	6.5	4.5

表4. 右腕輪部分ガラス小玉(単位; mm)

各々大小の差はあるが、57・78・20の3点は色調、材質だけでなく、形態、穿孔方法、研磨方法等全く共通している。これに対し、56は材質がガラス様で緑色を呈し、両面穿孔であり、横断面も卵形を呈していて研磨も丁寧である。形態的にもカンマ形で、他の三点に比べて古式である点注意される。また、57の尾部の端部及び78の背の部分は欠損しているが、これは発掘中の打欠きではなく、欠損面の風化状態から見ても当初よりのもので、被葬者が日常使用していたことを示すものであろう。

ホ. 管玉(図12-44~55)

管玉は12本で、いずれも首飾りに用いられていた。大別して大小二種類がある。各々の計測値は表1に一覧できるようにした。大型の4点(52~55)は胸部側、小型の8点(44~51)は背の側に配列されている。いずれも碧玉製で、淡緑色を呈するが、54のみ濃緑色を呈している。また、45・48・51は非常に軟質で、出土時点で相当風化が進行していた。他のものは硬質であるが、53には光沢がない。44・45・48は片面からの穿孔で、他は両面からの穿孔である。ただし、51は風化が激しく不明である。両面穿孔のもので、46・47・53・54は穿孔が中程で合っているが、49・50・52・55では一方からの穿孔が深く、他方からは浅い穿孔で終わっている。

ヘ. ガラス小玉(図12-1~43, 58~77, 図13-1~19)

ガラス玉は総計82個で、首飾りに43個(図12-1~43)、

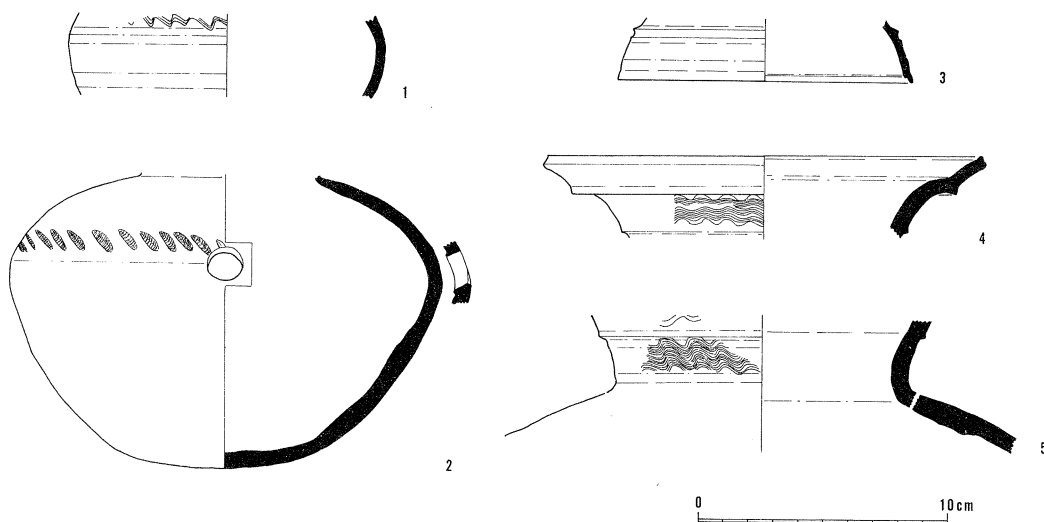


図15 墳頂部積石部分出土須恵器実測図

左腕に20個（図12-58～77）、右腕に19個（図13-1～19）である。いずれも濃紺色を呈する。規模は表2～4に示したが、首飾り部分のものと腕飾りの部分のものとで大きさが異なる。すなわち、首飾りのは、平均で直径3.8mm、厚さ2.4mmであるのに対し、腕輪部分のものは直径が平均6.4mm、厚さが4.8mmであり、腕輪のものが首飾りのものに比べてほぼ2倍に近い大きさである。

2. 主体部上方礫層上面

イ. 須恵器(図15-1～5)

須恵器類は主体部上方の礫層上面からのみ出土している。器種は甗、広口壺、杯蓋で、いずれも破片である。甗が最も良好であるが口頸部を欠いている。

2の甗は、口頸部を欠く。体部のみの高さは11.6cm、胴部最大径は17.3cmで、全体の3分の2程上方にくる。従って、体部はやや扁平で、肩部の張った形態を取っている。孔は胴部の最大径部分に穿孔され、斜上方を向く。胴部最大径部分よりやや上方に、櫛状工具による刺突文をめぐらせている。胴部下半及び外底面にもタタキ痕が残る。胎土は精良で、黒褐色の色調を呈し、非常に硬質である。器壁は非常に薄い。

5は広口壺であろう。茶褐色を呈し、非常に硬質に仕上がっている。肩部は良く張り、頸部は突帯状の隆起を以って段を示す。上下両段とも波状文をめぐらせる。

4は5の広口壺の口縁部で、接合しないが5と同一個体であろう。二条の突帯がめぐり、突帯間に波状文をめぐらせる。口縁部は大きく外反した後内側に屈曲しながら開く。端部は上方にわずかに肥厚し、面を取る。胎土等は5と同じである。

なお、4及び5の広口壺の胴部と思われる破片がある（図版六一下）。茶褐色を呈し、薄手で硬質のもので、外面にタタキ痕が残るが、内面は指ナデにより削っている。

3は小片で、直径、傾き等はやや不正確であるが、同心円復原で口径11.9cmを計る杯蓋である。天井部と口縁部との境界は凹線で区別し、その上端は突帯状に隆起している。口縁端部は内側斜上方に面を取り、凹む。暗灰色を呈し、胎土の細い硬質のものである。

1は甗の体部であろうか。破片の下半は丁寧な篋削りが施され、上端には波状文が施されている。青灰色を呈し、硬質である。

ロ. 形象ハニワ(図16-8～16, 図17-17～20)

墳頂部の石積範囲から出土した10数点の朱を塗布したもの、あるいは線刻のあるもので、円筒ハニワや朝顔型ハニワとは全く異質のものであり、形象ハニワと思われる。家形ハニワの一部と思われるが判然としない。いずれも同一個体であると思われる。

9と15は約110度程の角度をもって屈折させたものである。屈折部の稜は明瞭で、直線的である。表面は、ともに稜に対して並行する刷毛目が残る、裏面は、9ではナデ、15では刷毛目の後ナデている。表面にはともに朱が塗布されており、9には屈折した二面に、稜にほぼ直交する直線と斜方向の直線が陰刻されている。同様の線刻は14にも認められる。14では、表面に刷毛目残り、裏面は刷毛のあとナデている。表面には朱が塗布されている。14の線刻は、幅1.9cmで並行する二本の直線と二本の直線の間に稜杉状の斜線が刻まれる。9

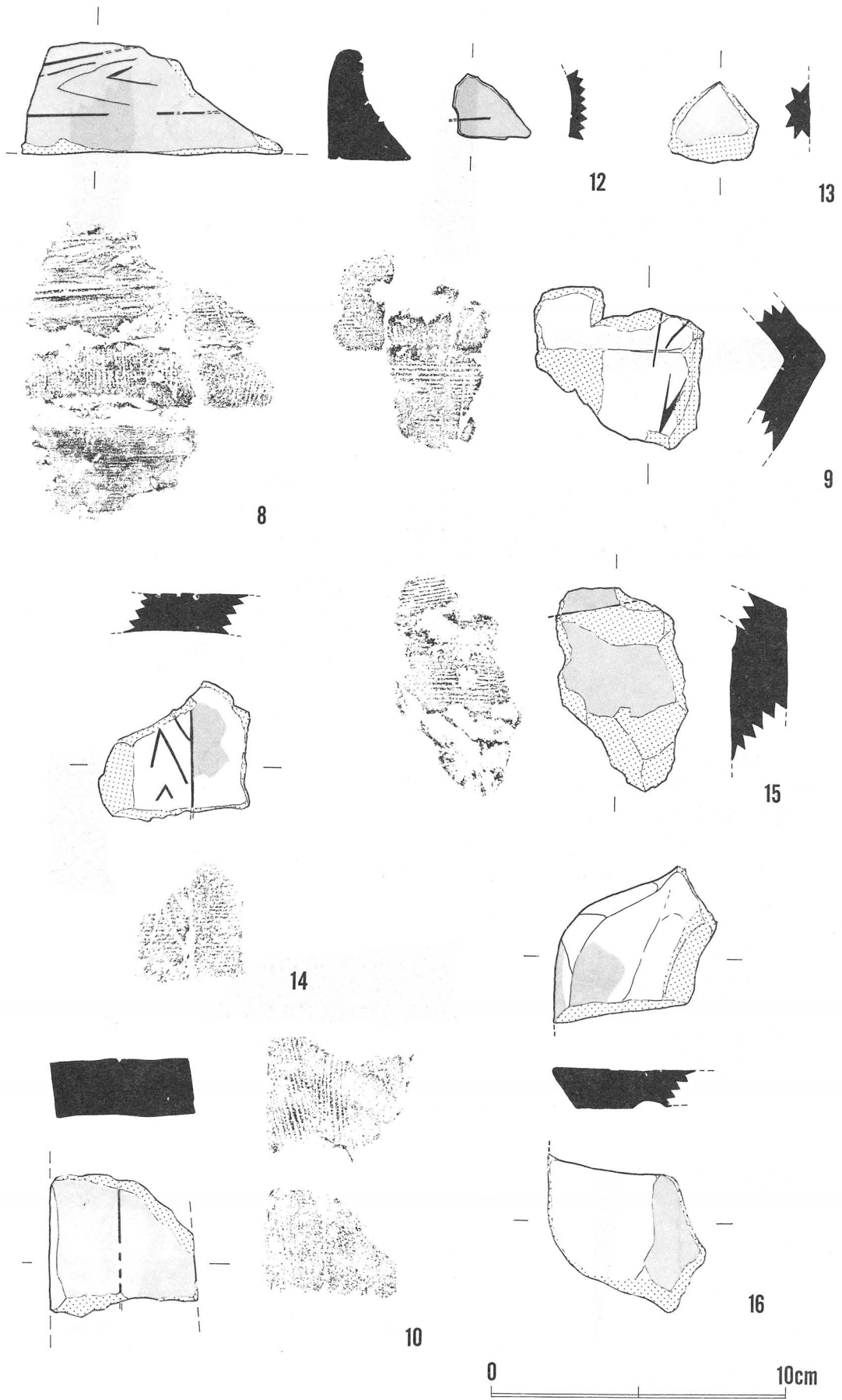
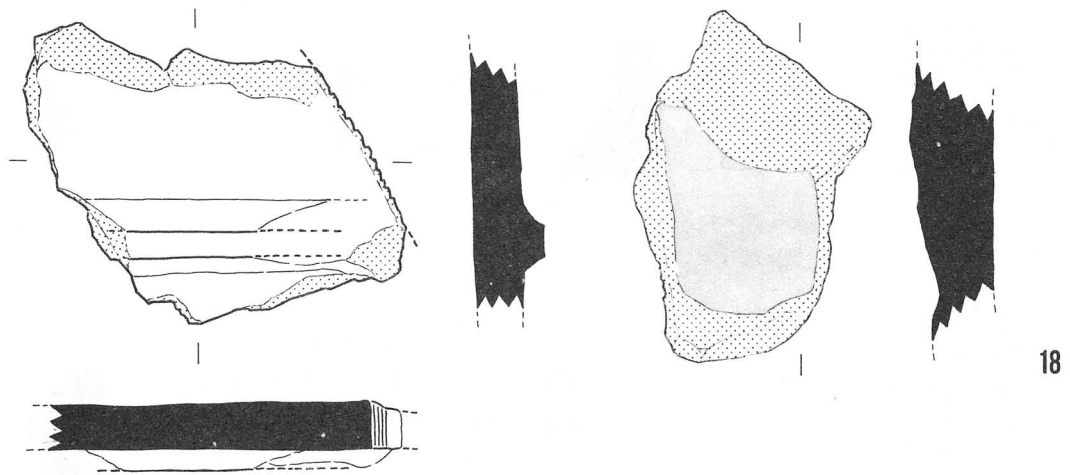


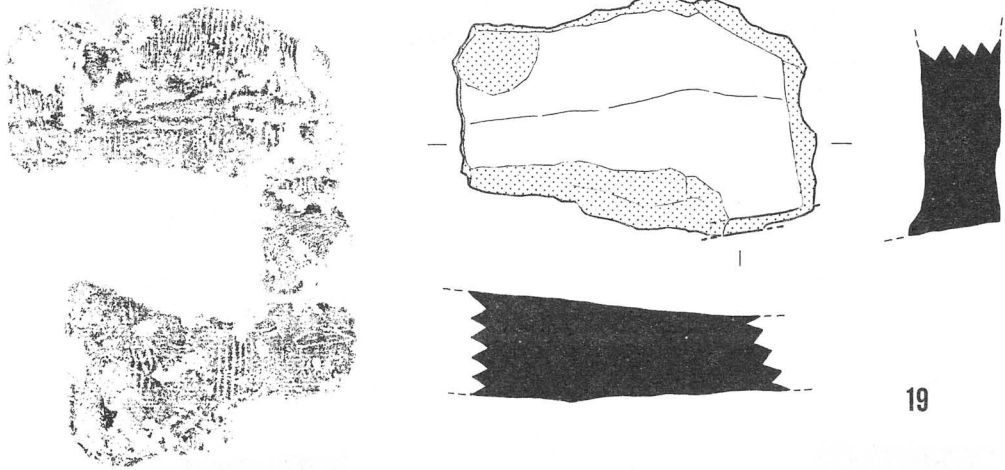
図16 形象ハニワ実測図(I)



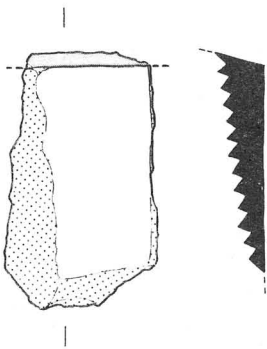
18



17



19



20

0 10cm

図17 形象ハニワ実測図(II)

・14・15は接合しないが、近接した部分の破片と考えてよからう。

31も表面が平板で、線刻が見られる。表面は刷毛目を残した上に朱が塗布され、裏面はナデで整形している。線刻は上記3点と異り、卍状のもので、並行する二直線の間隔は1.7cmである。

10は、長さは不明であるが四面が丁寧に整形されている。幅は4.7cmで、厚さは1.6~1.9cmで漸次薄くなる。側面は丁寧に磨かれ、他の二面には刷毛目が残る。表面に朱が塗布され、その中央に一条の線刻が走る。

20は、表面が剥離しているが、裏面は丁寧に磨いて整形している。側面は一方のみ残っており、篋により切り取った様子がうかがえる。破片上端に切り離しが及んでいない部分があり、この側面は四角形孔の一部を形成していたことが知れる。また、この側面には朱が塗布されている。

10と20はともに平板なもので、側面の遺存するものである。遺存状態から見る限り、10では両側に、20では片側のみに四角形孔があったのではなかろうか。

8は、本体から剥離した突帯状のもので、高さは4.8cm、厚さは基部で2.6cmを計る。表面は湾曲し、朱の塗布が見られる。裏面はナデ調整している。表面には幅1.9cmで並行する2本の直線が陰刻され、その間に綾杉状の刻線が施されている。

12は8と同一部分の破片と思われるものである。

8が接合するかと思われるものが18である。厚さ2~1.7cmで、表面は平坦で、丁寧に磨きあげた後に朱を塗布している。裏面はナデ調整である。この表面に剥離痕があり、8が接合するかと思われるのであるが、明瞭でない。

16は、これまでのものと異り、曲線面を残すものである。曲線面は四つの面取りで曲線を描く。各面とも傾きが異なる。また一面のみに刷毛目残り、また、朱が塗布されている。表裏両面とも朱が残る。また、両面とも接合痕残り、一面では曲線側面側に、他面はその反対側で、円弧状に残る。

17は朱の塗布が認められないが、異形ハニワである。17は板状で、厚さ1.3cm、内外両面とも刷毛目が残る。一面に、幅2cm、高さ0.6cmの直線的な突帯（円筒ハニワのタガと同様のもの）が貼り付けられている。この突帯と55度の角度で切断される一側面がある。面に対して直交する方向で刻み目が施されているが、接合痕か否か不明である。

19も朱の塗布が認められない。円筒ハニワの基底部に近似するが、表面はほぼ平坦である。厚さは2.2cmで、外底面を一部に残している。この部分は内側に肥厚している。この外底面の直上に幅2.2cmの接合痕が残る。形象ハニワの基底部をなすものであろうか。

以上12点が墳頂部から出土した形象ハニワの破片である。形象ハニワであることには間違いのないと思われるが、数量が少ないので判然としない。鳥獣や武器、武具、その他器材ハニワとするには、表面が平坦で、角度があつて稜をなすものがあつて首肯しがたい。四角形孔の存在の推定できるもの等があり、家形のハニワではないかと考えているが、各破片がどの部分にくるのか判然としない。

3. 外部施設

イ. 朝顔型ハニワ(図18~35)

墳丘を二重に圍繞したハニワ列の中に、朝顔型のものが、4・15・19・26・31・34、42・43・48・65・69・

74・76・89・96号ハニワ部分及び墳頂部で採取できた。採取できたというのは、いずれも原位置を確認できたのではなく、各号ハニワ出土地点で採取し、後、復元整理した段階で、円筒基底部と同一個体のもものと別個体のももの、また、基底部と同一であるか否か判然としないものがあるからである。このうち、基底部から朝顔部分の一部まで復元し得たものは74号ハニワのみである。また、65号ハニワでは、円筒ハニワが全形復元できたのかかわらず、朝顔型ハニワもあり、明らかに65号ハニワの位置には朝顔型ハニワがなかったのであり、隣接するいずれかのものであろう。このように、朝顔ハニワの場合、円筒部分までわかる場合が少なく、また、原位置を求めることが困難であるため、とりあえず採取地点の号数で呼称するとともに、以下の説明は朝顔部分のみに限ることとした。

朝顔型ハニワの朝顔部分が取り付く筒部の形状は、74号ハニワでは通常の円筒ハニワと同様で、タガは三段までめぐる。三段目のタガまでの規模も他の円筒ハニワと変りがない。三段目タガより内側に外弯しながらカーブして肩部をつくり、頸部に至る。従って、朝顔形ハニワは、通常の円筒ハニワの口縁部（三段目タガより上部）のかわりに朝顔形のものを取り付いた形と考えればよい。

朝顔部分の規模は、19号及び26号で復元し得たが、口縁部径が56.2cm及び56cm、頸部が突帯を除いた径で15.4cm及び14.6cm、頸部以上の高さが29cm及び27.2cmを計る。口縁部径に限ると、4号が58.2cm、65号が57.2cm、96号が50cmと破片から同心円復元した数値が得られており、ほぼ、55cm前後の規模であったことが知れる。頸部径についても、4号が16.6cm、15号が17.8cm、89号が14.6cmで、やはり15cm前後の数値を得ている。従って、およそ、19号及び26号で復元された規模が信頼するに足る規模であることが知れる。円筒ハニワで三段目タガ下端の直径の知れるものではおよそ25cm前後の規模であり、74号においても29.2cmを計ることができ、朝顔部分の口縁部は筒部の2倍に近い開きを持つことになる。また、頸部は筒部の2分の1近くまで収束することになる。

朝顔ハニワの形態的な特徴は、19号では、「く」の字形に屈曲する頸部から直線的に開き、いったん内方へ屈折して再び開き、口縁部附近で外反させている。口縁部中程の屈曲はさほど大きいものではなく、むしろ、直線的である。この部分には、幅2.2cm、高さ2.3cmの太い突帯を貼り付け、さらに頸部にも同様の突帯が貼り付けられている。口縁端部は面を取り、その面を外側に向けている。他の小片についても、およそこの19号及び26号と同形態であると考えられるが、口縁端部の形状に関して、4号では端部より下方5～6cmあたりから外反するが、26号では3.5cmから外反する等若干の相違があるが、特記する程の形態差とは考えられない。また、42号で、端部面がつまみ出したように下方へ垂下させているものもあるが、例外的である。

製作手法の特徴についても、いずれも共通したものを見出す。口縁部の外面はすべてタテ刷毛調整し、端部附近、厳密に言えば大きく外反する部分のみ、さらにヨコナデを加えて調整している。頸部下方、すなわち肩部については、断続的にヨコ刷毛調整して丸味を持たせている。内面は、口縁部が断続的なヨコ刷毛、端部附近のみヨコナデを加えている。肩部はナデ削りで調整している。接合方法は、口縁部中程の屈曲部で擬似口縁をつくり、その端部附近で幅2cm程を大きく外反させ、この外反部分に上方部の口縁部をのせて貼り付けている。突帯は擬似口縁の外端面から上方口縁部外面にかけて貼り付けられており、この接合を補強する形になっている。頸部の屈曲部分は、肩部と口縁部との粘土帯を通常通り接合させるだけであり、屈曲部に突帯をはめ込む方法を取っている。こうした調整方法、接合方法等はいずれの破片においても認められたところであるが、ただ、例外的なものが墳頂部から出土している。頸部の屈曲部より上方が遺存し、口縁端部を欠いているが、その外面の調整方法において、通有のタテ刷毛ではなく、斜方向の指ナデにより調整しているのである。朱の塗

布は認められなかったが、形象ハニワとともに出土しており、注意すべきであろう。

胎土、焼成等については、およそ、いずれも砂粒を含んだ胎土であり、灰白色からやや黄土色がかった色調を呈するものが大半である。また、焼成は、須恵質のものではなく、いずれも土師質である。比較的硬質の仕上りを示している。

以上のように、朝顔形ハニワは、墳頂部出土の一例を除いて、いずれも、形態、規模、手法等の特徴に共通した点を持っている。

ロ．円筒ハニワ(図18～35)

a．成形の特徴

まず、幅4cm程の粘土帯をつくり、これをたてて円形にめぐらせる。大半が時計回りの方向で、後端を先端の外側に重ねている。51号、70号は例外的で、時計逆回りに回している。先後端の重ね方は同じである。また、6号では、一本の帯では足りず、残る4分の1程の長さのものを継ぎ足し、一周させている。基部をつくり終えた後、その上に同様の粘土帯をまき上げていくが、その傾きは内面に低く、外面を高くしている。基部直上のものは、ほぼ基部粘土帯の内側全面に粘土をナデ下している。基部の外面はナデ調整した上に、さらに粘土帯が貼り付けられる。この貼り付けは、少くとも、基部直上に粘土帯が巻き上げられた後に行われている。すなわち、基部直上の粘土帯にこの貼り付け粘土が及ぶからである。基部より上方の粘土帯はおよそ幅2.5cm前後のもので、指により内面をナデ下している。

b．調整の特徴

粘土帯を巻き上げて形をつくと、次に、内外面の調整がなされる。内面は、若干の例外を除いて、口縁端部まで知れるものについても、すべてナデによる調整である。およそ、右下りの斜め方向にナデている。口縁端部附近のみヨコナデである。例外的なものとしては7号がある。口縁部の破片が出土しているが、その内面は、端部より7cmの幅で断続的なヨコナデ調整がなされている。朝顔形ハニワの口縁部に見る手法である。

外面は、口縁端部附近を除いて、各段とも、いわゆる連続ヨコハケの手法によって調整されている。刷毛工具はタガ間幅より狭く、特に二段目、三段目は各段の下半分、次いで重複させて上半分を連続ヨコハケしている。この刷毛調整はタガの貼り付け部分には及んでおらず、従って、タガ貼り付け後の二次調整であることが知れる。刷毛調整に先行する調整としては、器壁が凹んだ部分で刷毛工具が接地していない部分があり、この部分の観察で、タテナデであることが知れる。タガ部分に関しては、タガが剥離したものについてみると、多くはヨコナデされており、一～三条の沈線のめぐるものもある。このことから、器壁の外面は、一次調整としてタテナデを施し、タガ貼り付け部分をさらにヨコナデする。タガ貼り付け後の二次調整として、連続ヨコハケを施していることが知れる。口縁部に関しては、断続的なヨコハケ調整を施しているものもある。口縁端部附近はヨコナデ調整しているが、これは、刷毛調整後に実施しているものである。

c．底部調整

底部は、成形のある段階で倒立させて、内面に指を当て、外側へ押圧を加えて粘土の張り出しを押えている。従って、底部は下端附近が外反するものが多く、また、内面に指押えによる凹凸を残すものがある。内面は、

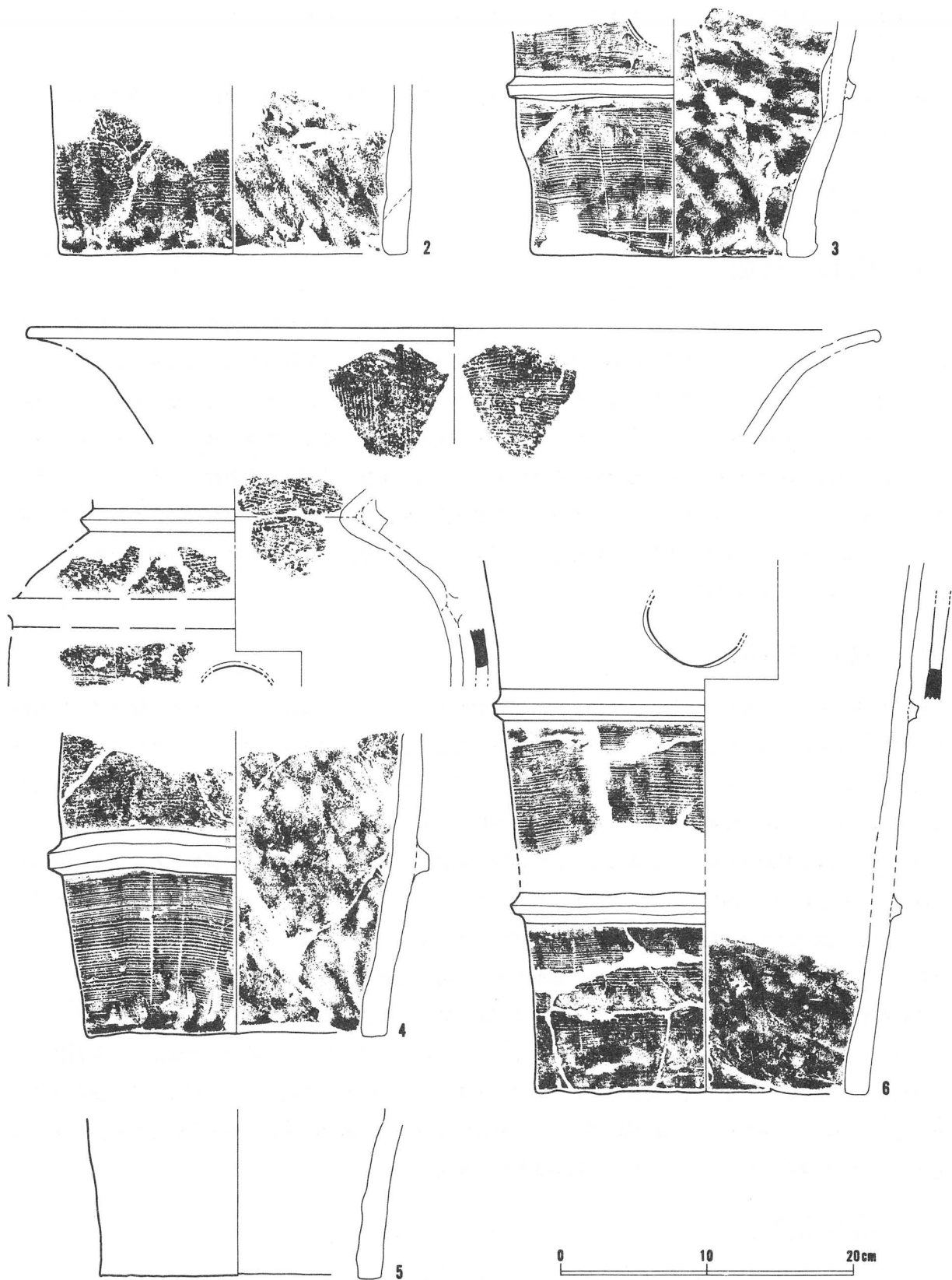


図18 ハニワ実測図(I)

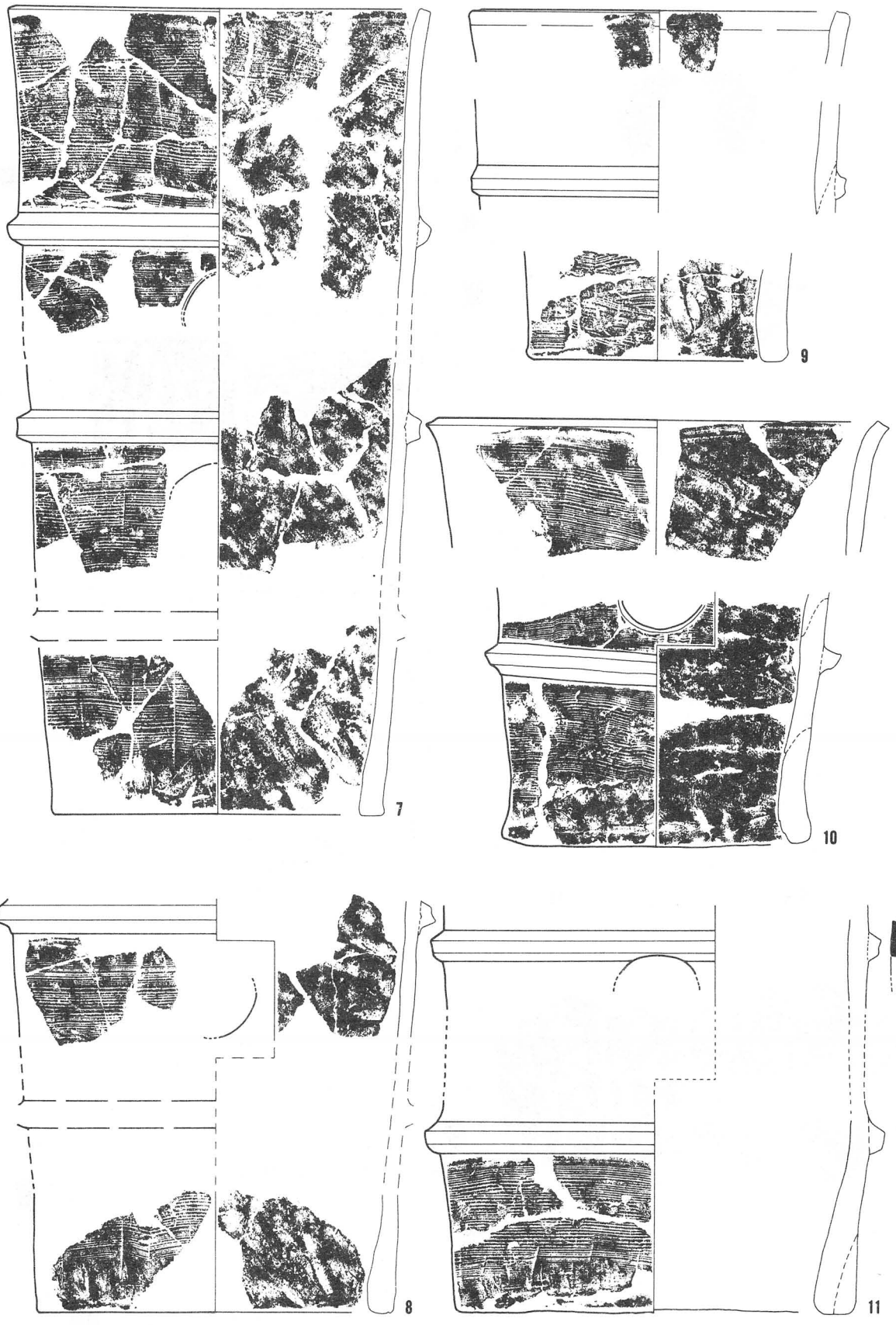


図19 ハニワ実測図(II)

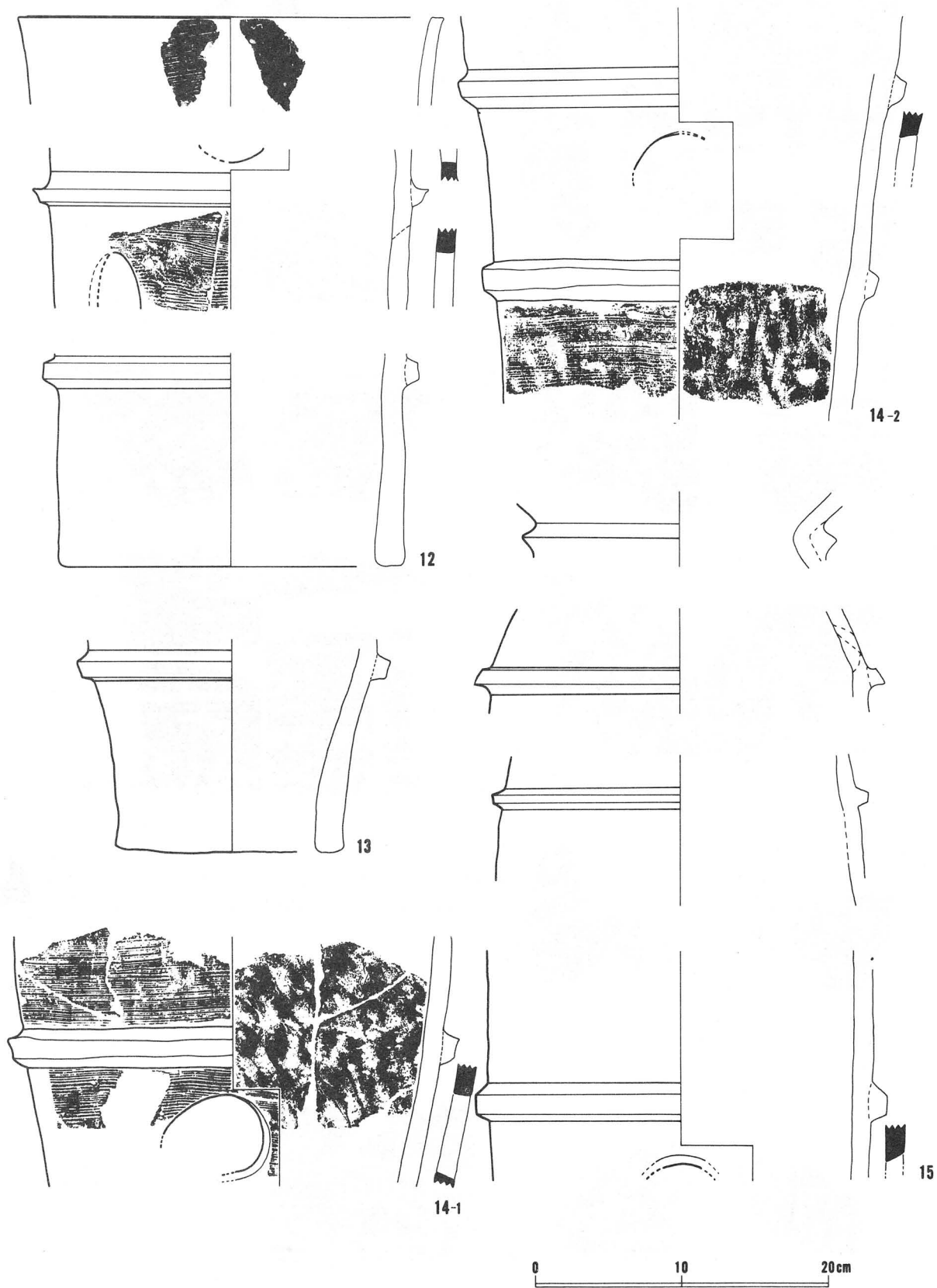


図20 ハニワ実測図(Ⅲ)

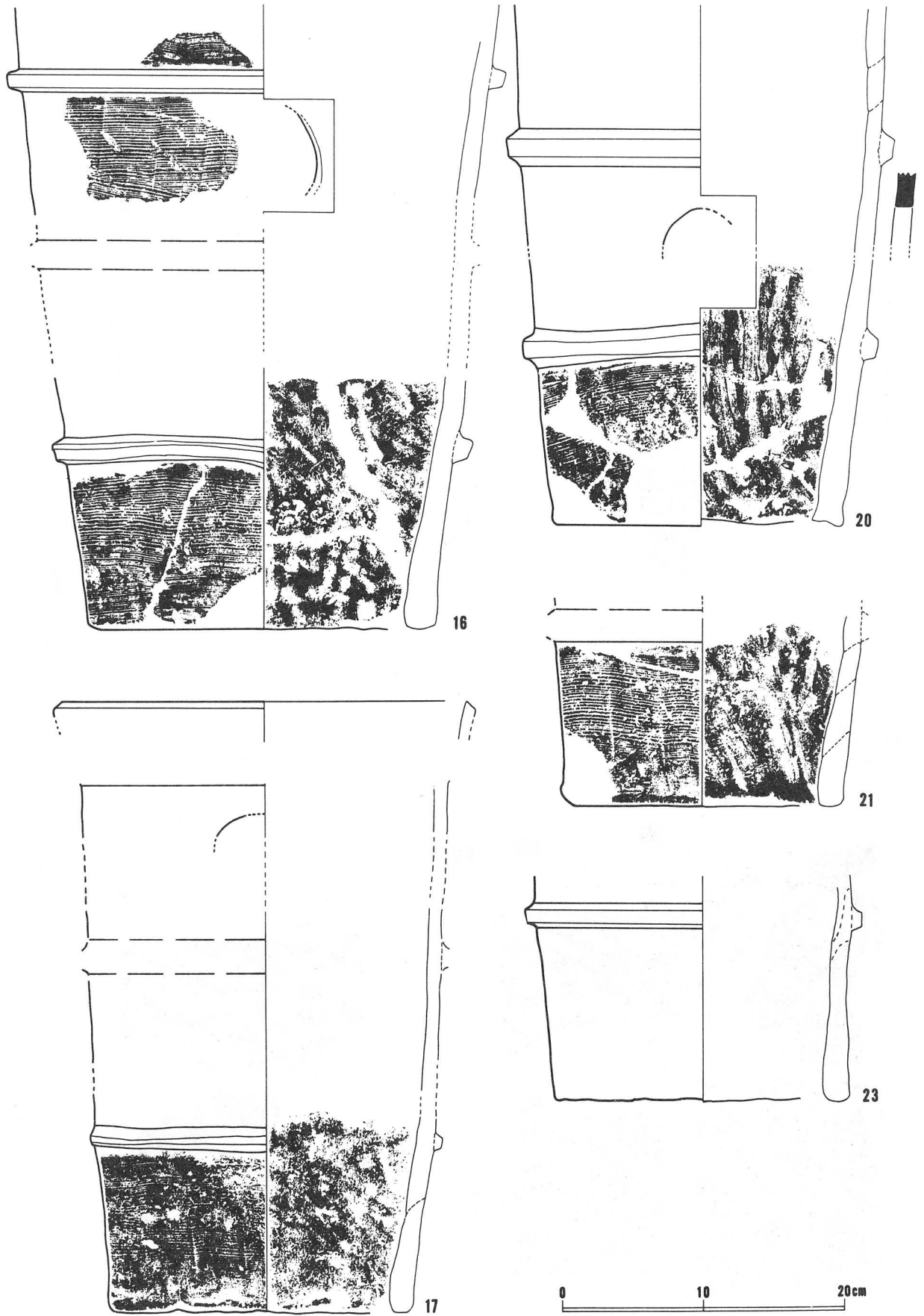


図21 ハニワ実測図(Ⅳ)

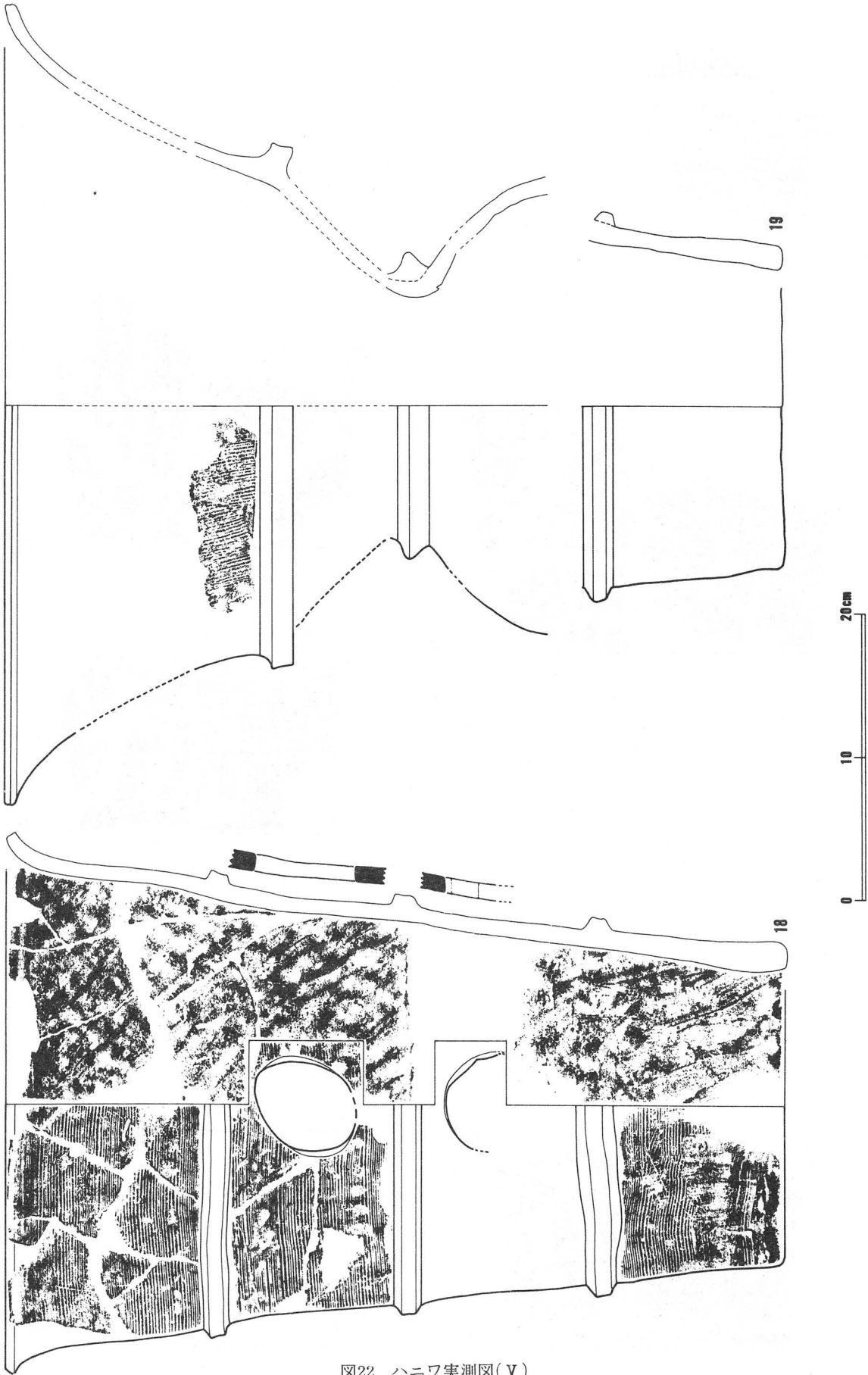
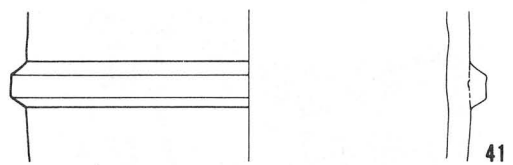
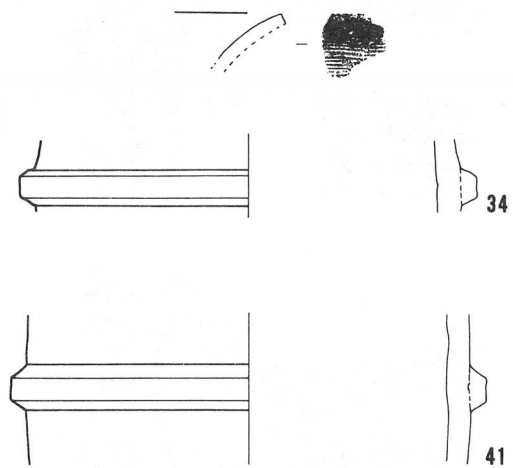
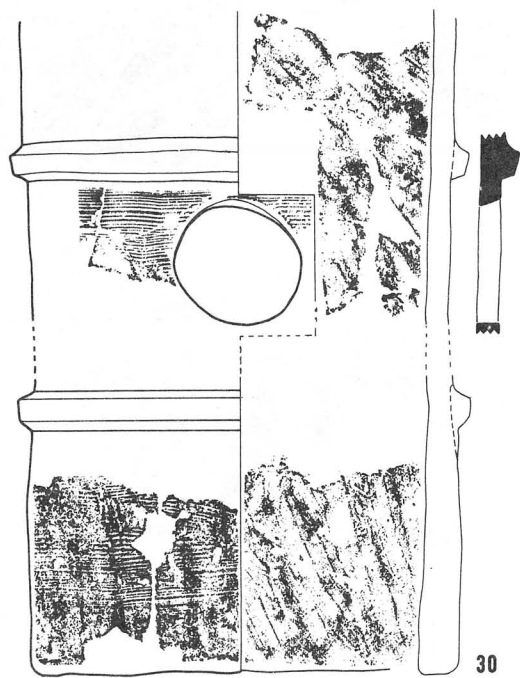
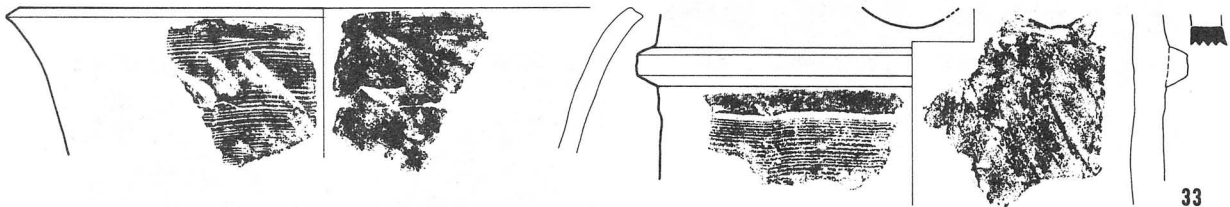
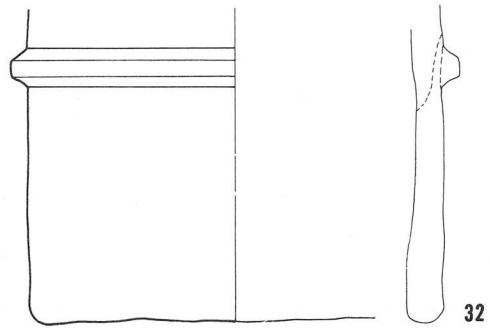
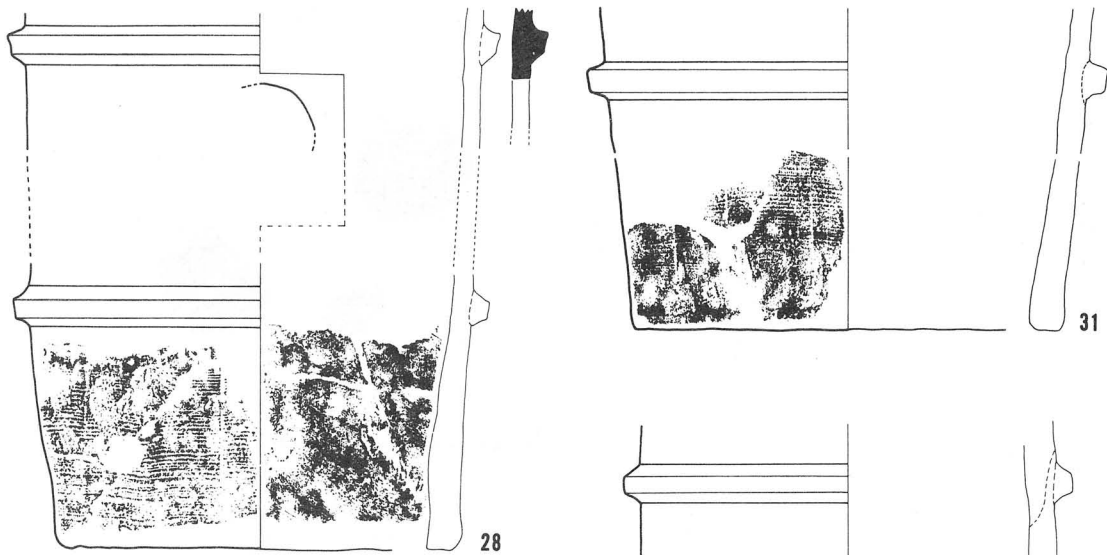


図22 ハニワ実測図(V)

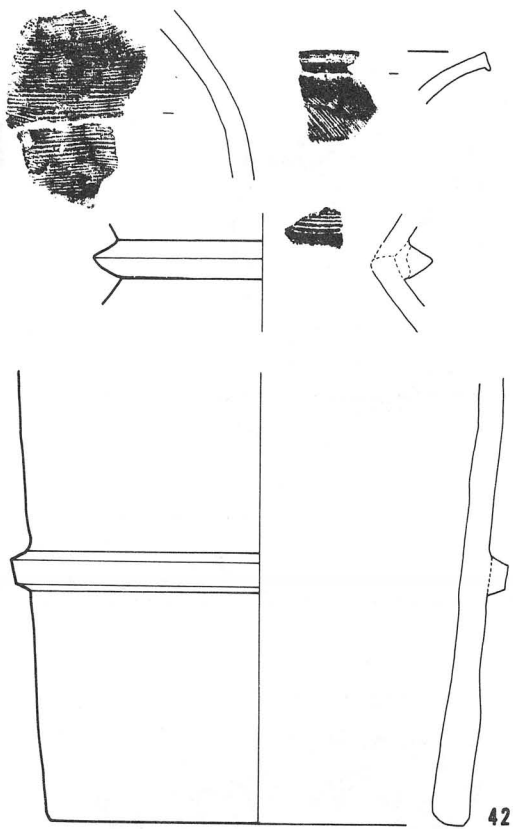


図23 ハニワ実測図(VI)

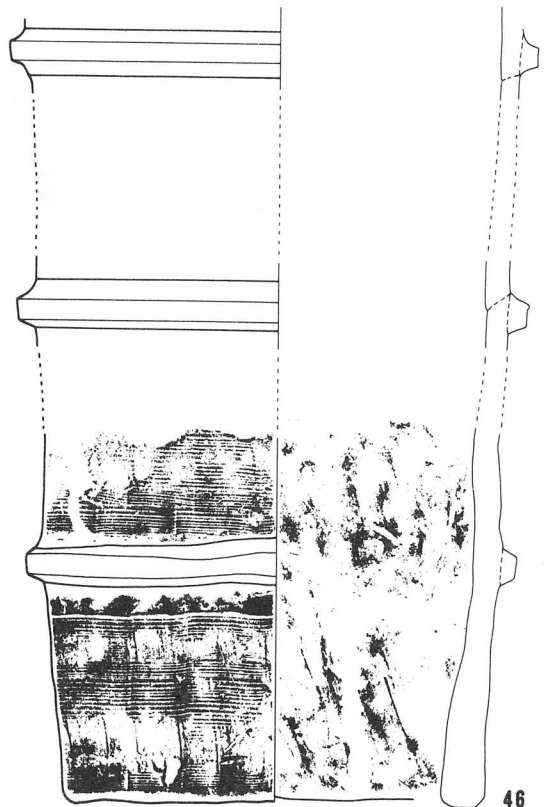


0 10 20cm

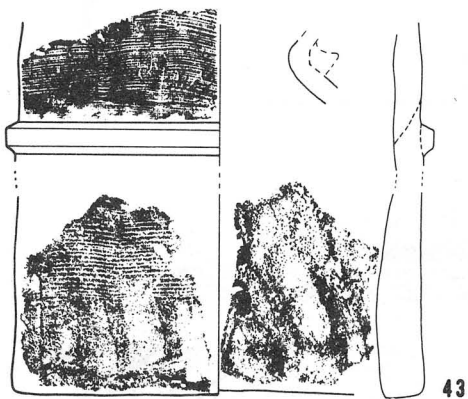
図24 ハニワ実測図(VII)



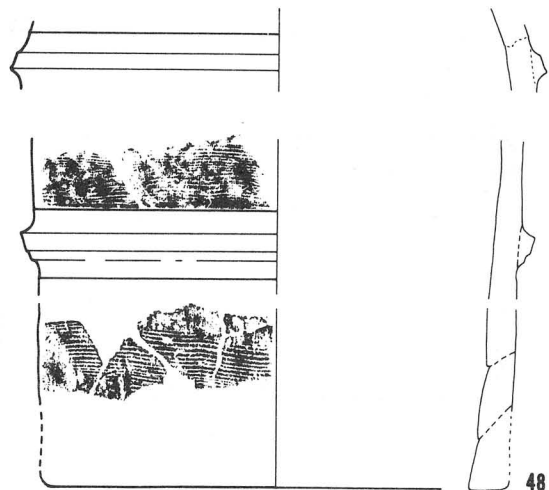
42



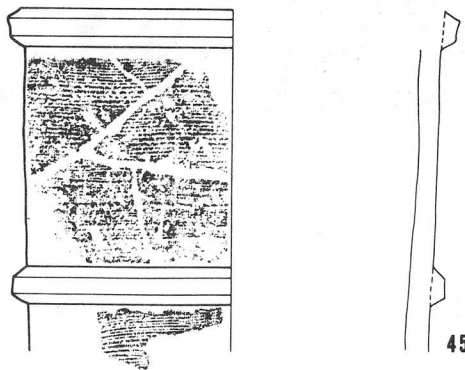
46



43



48



45

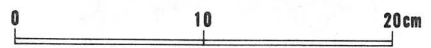


図25 ハニワ実測図(VIII)

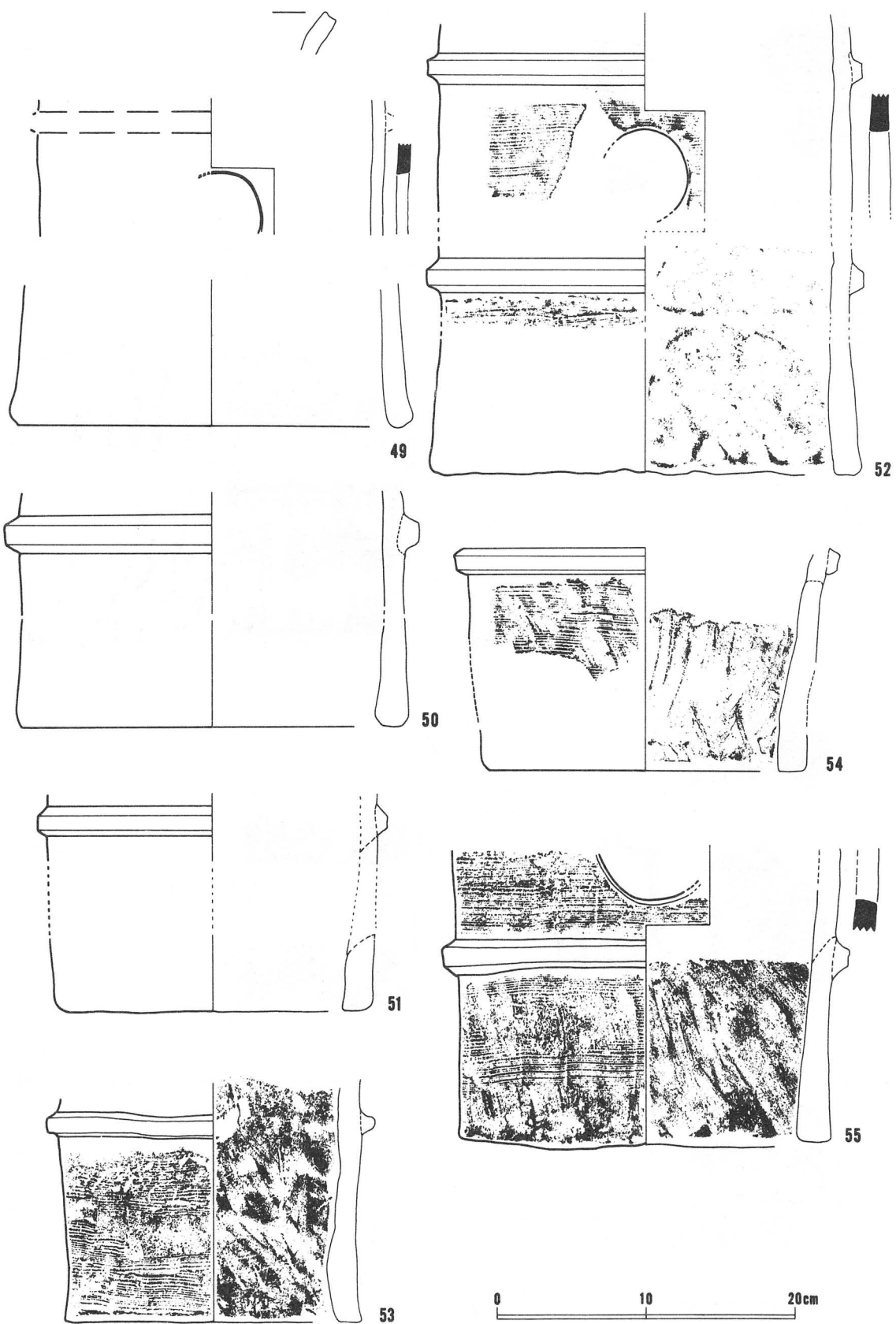


図26 ハニワ実測図(IX)



図27 ハニワ実測図(X)

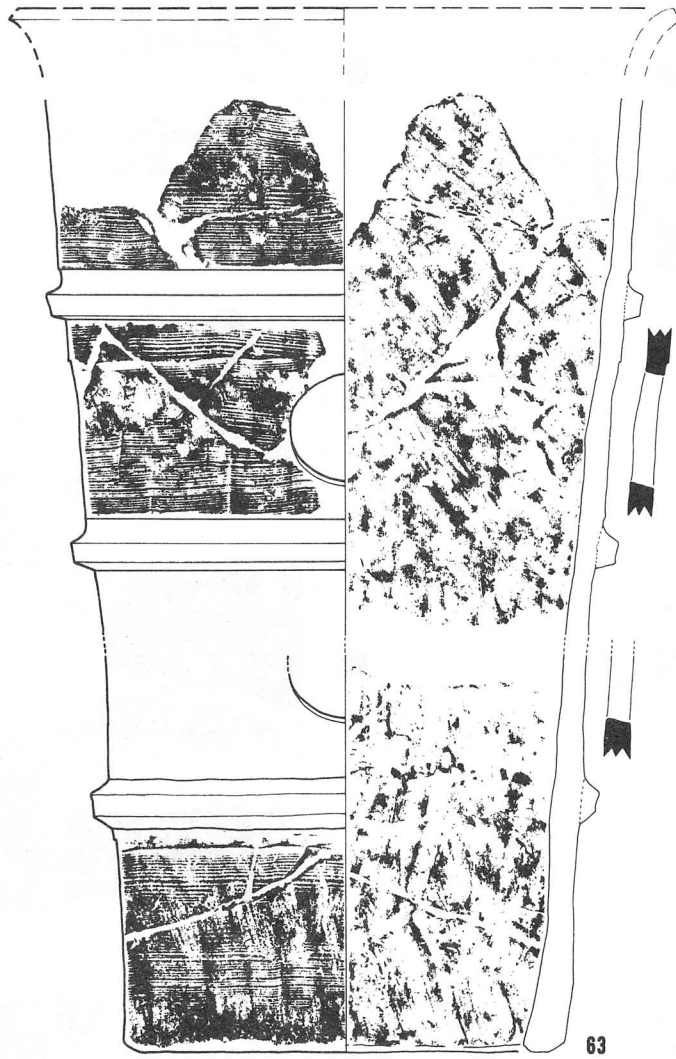
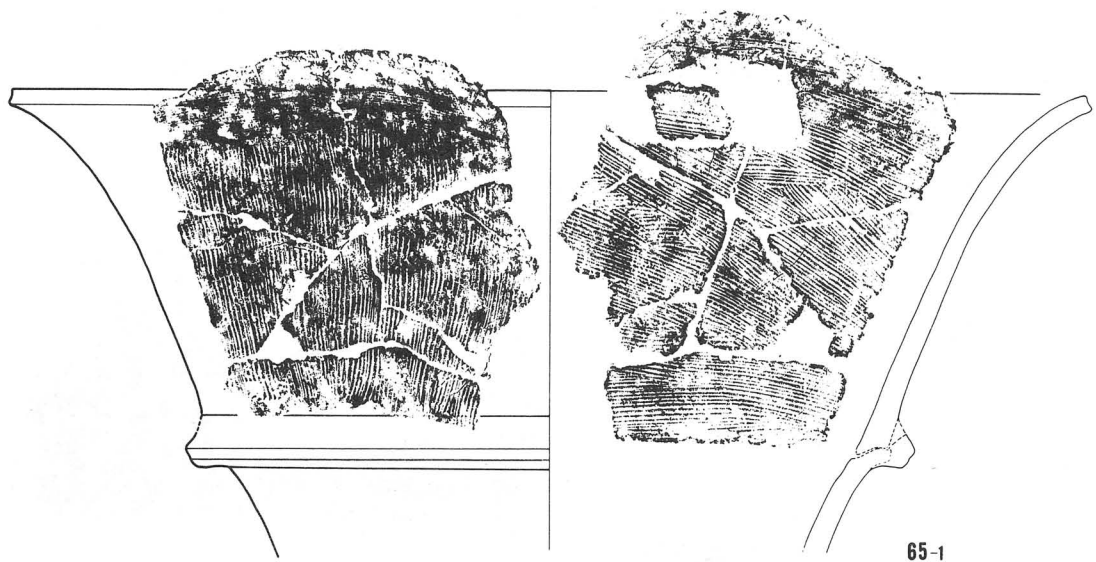
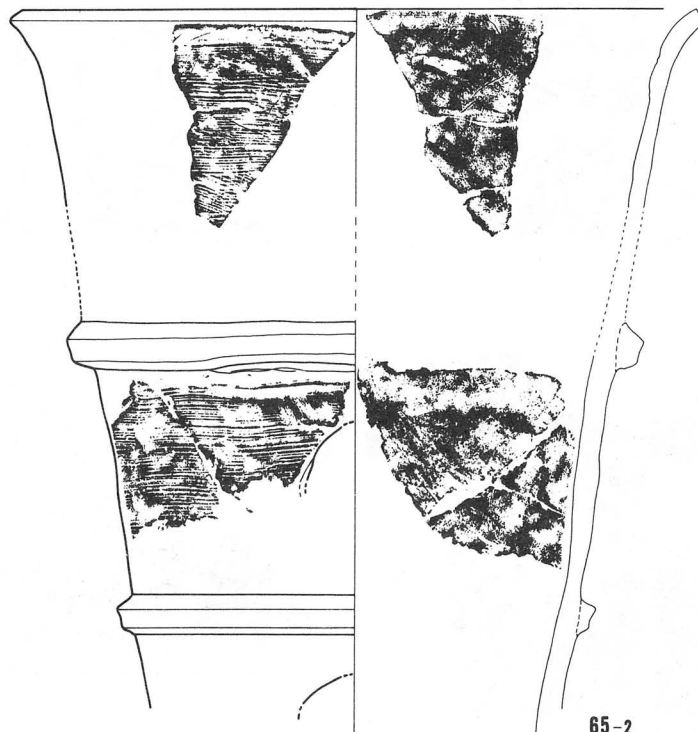


図28 ハニワ実測図(XI)



65-1



65-2

0 10 20cm

図29 ハニワ実測図(XII)

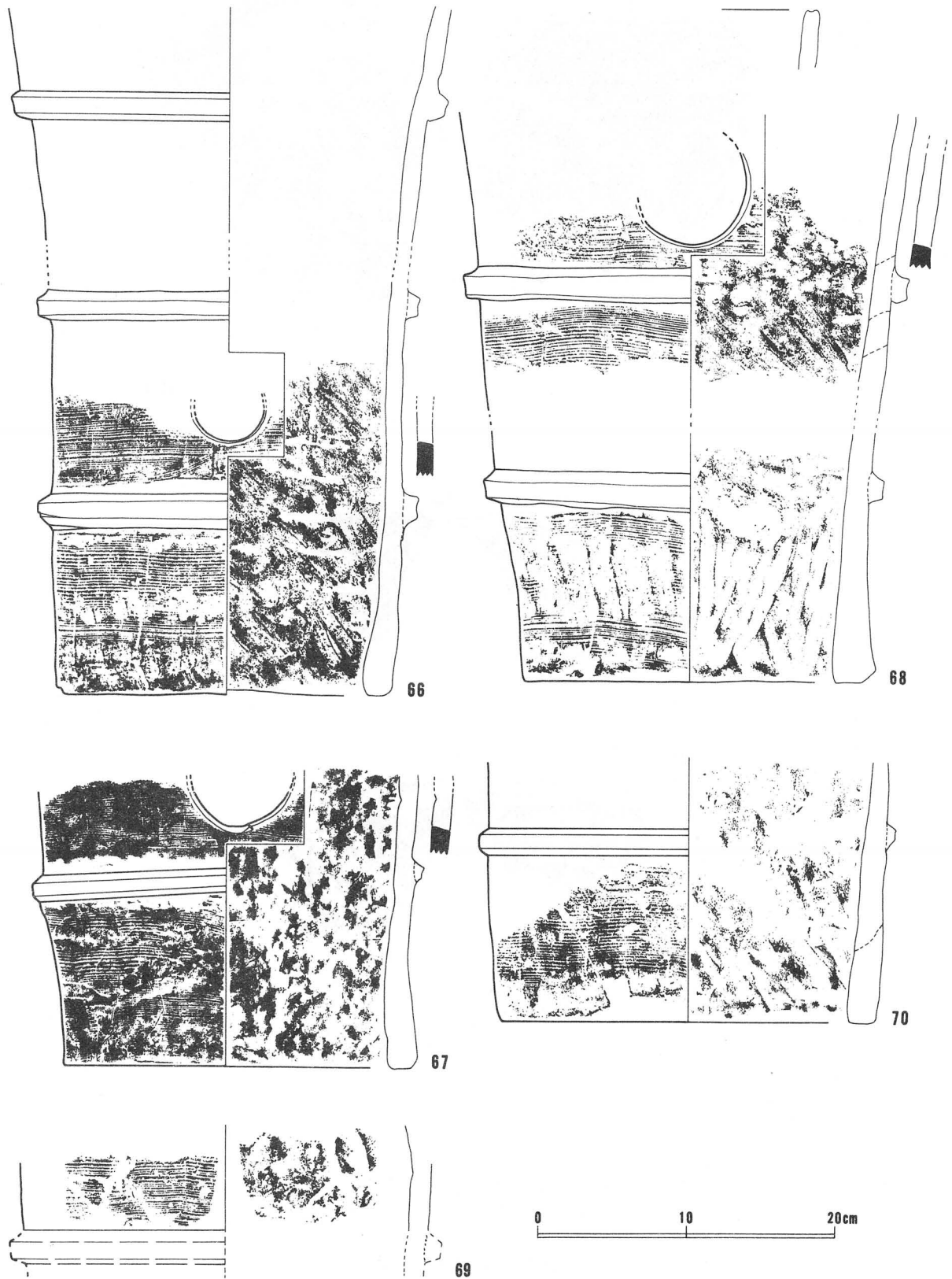


図30 ハニワ実測図(XIII)

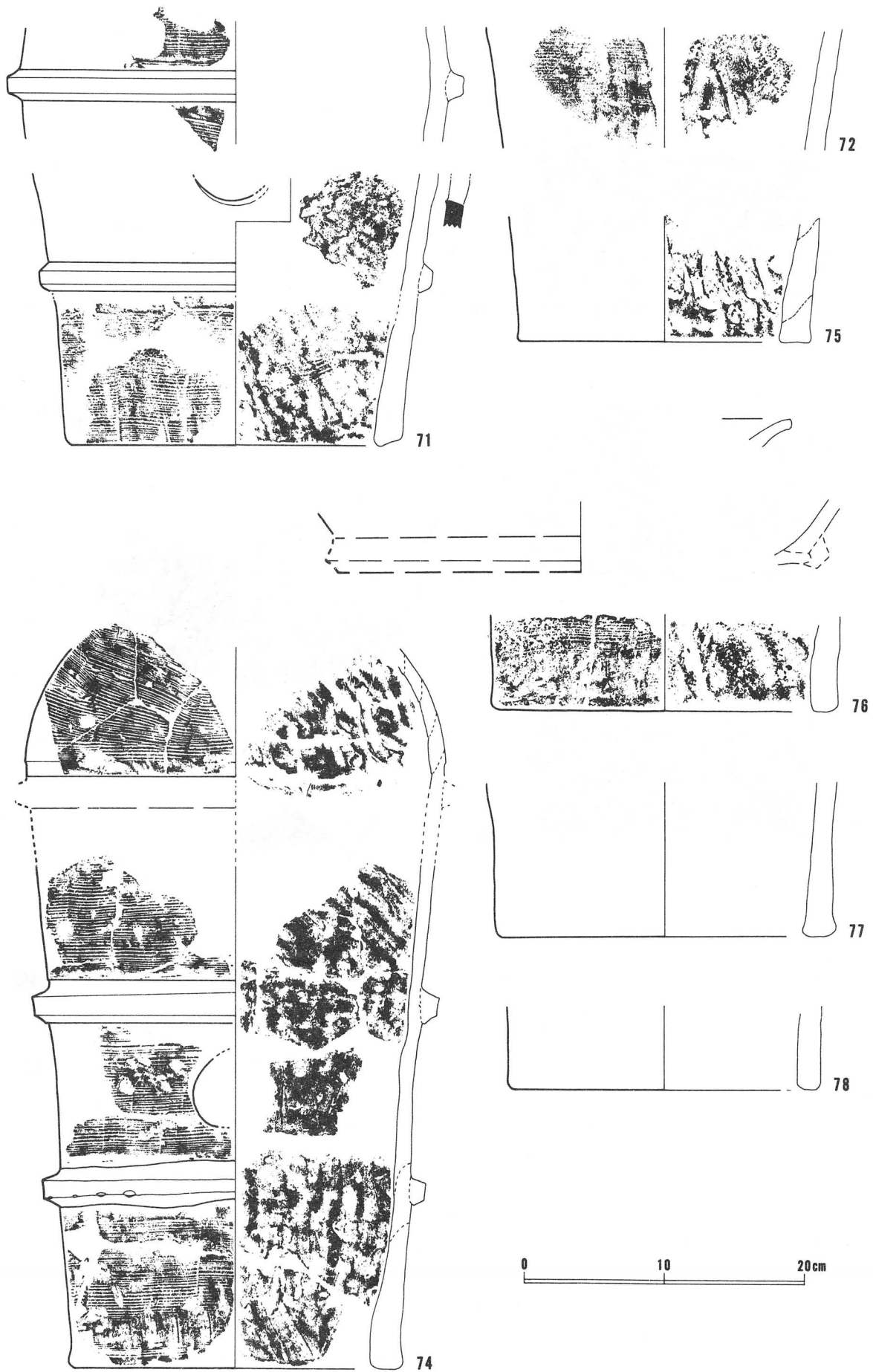
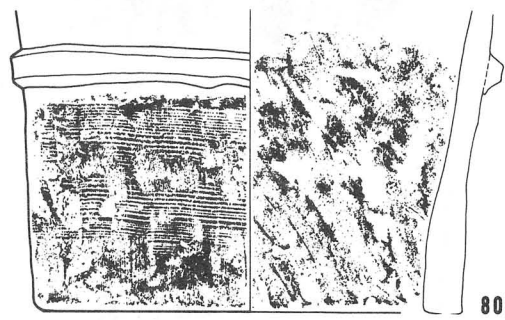
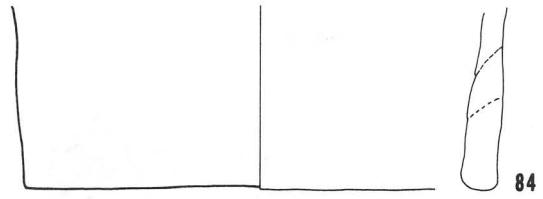


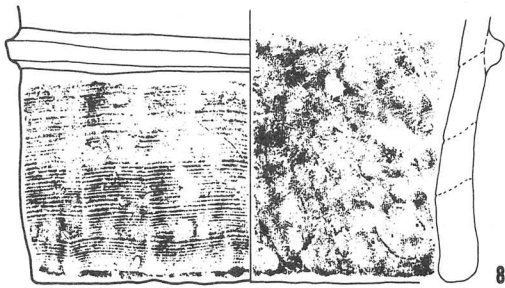
図31 ハニワ実測図(XIV)



80



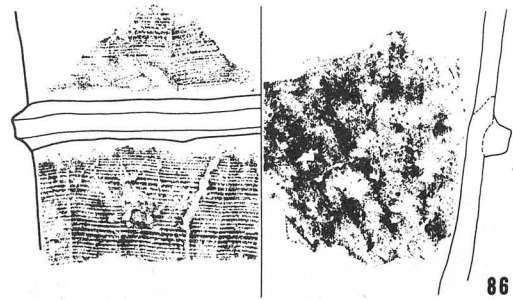
84



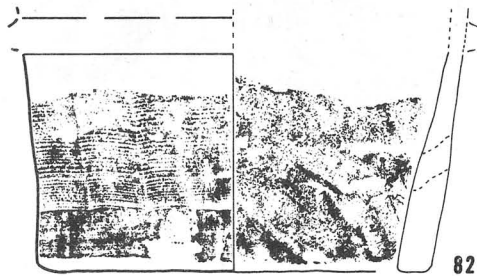
81



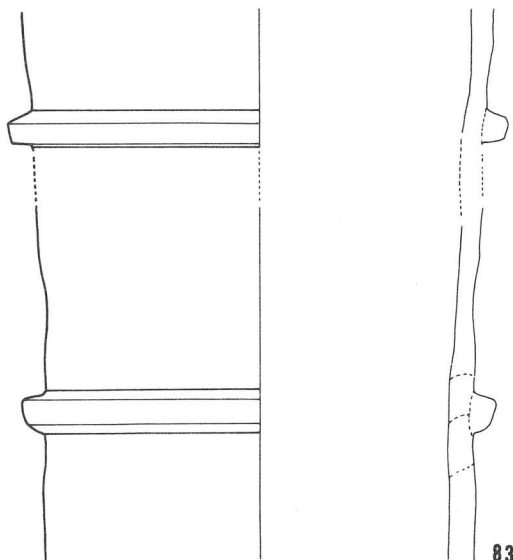
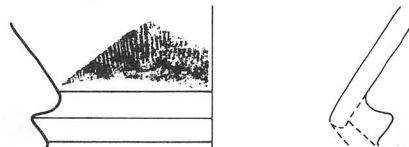
85



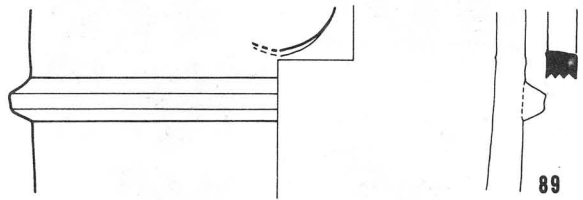
86



82



83



89

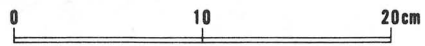


図32 ハニワ実測図(XV)

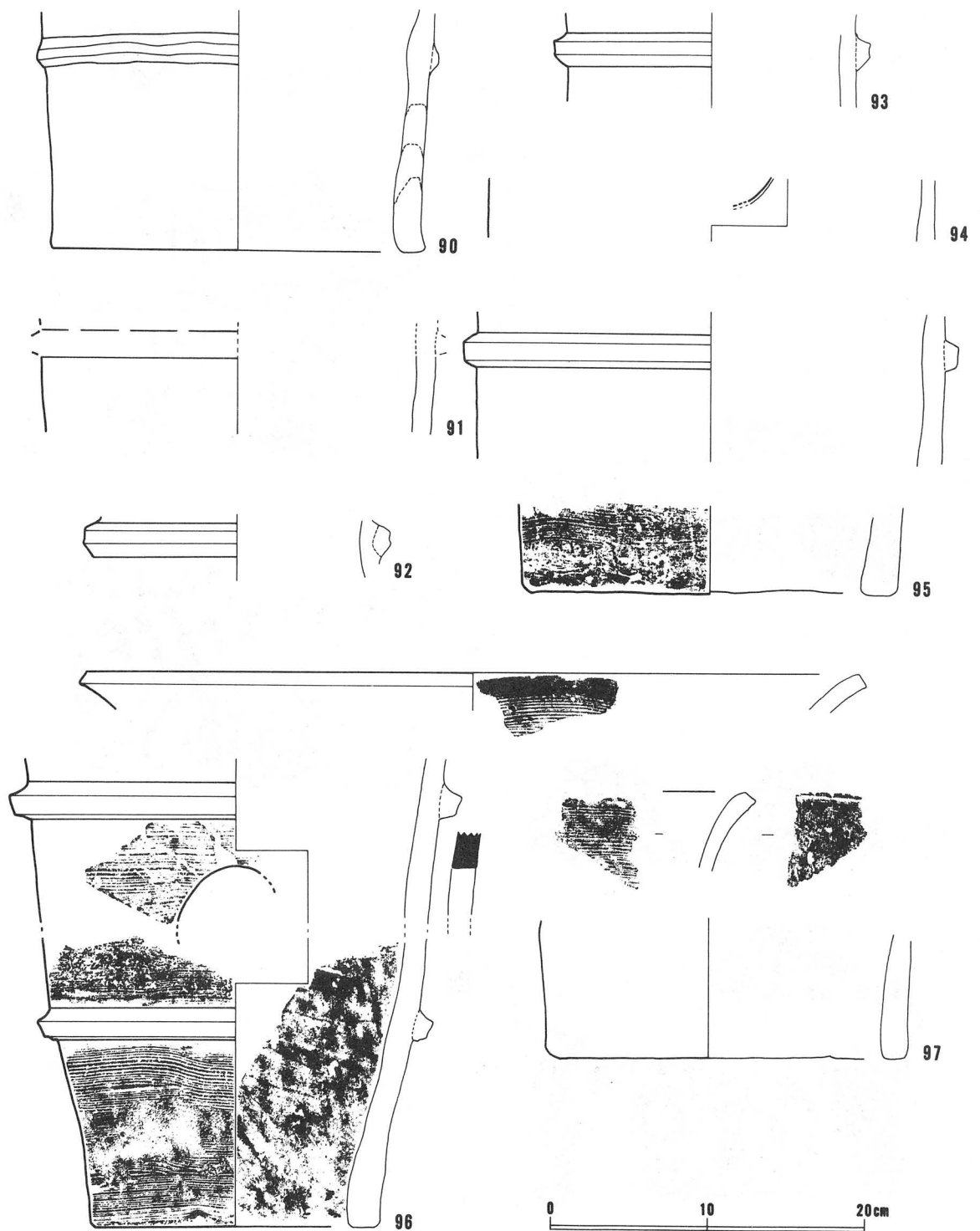


図33 ハニワ実測図(XVI)

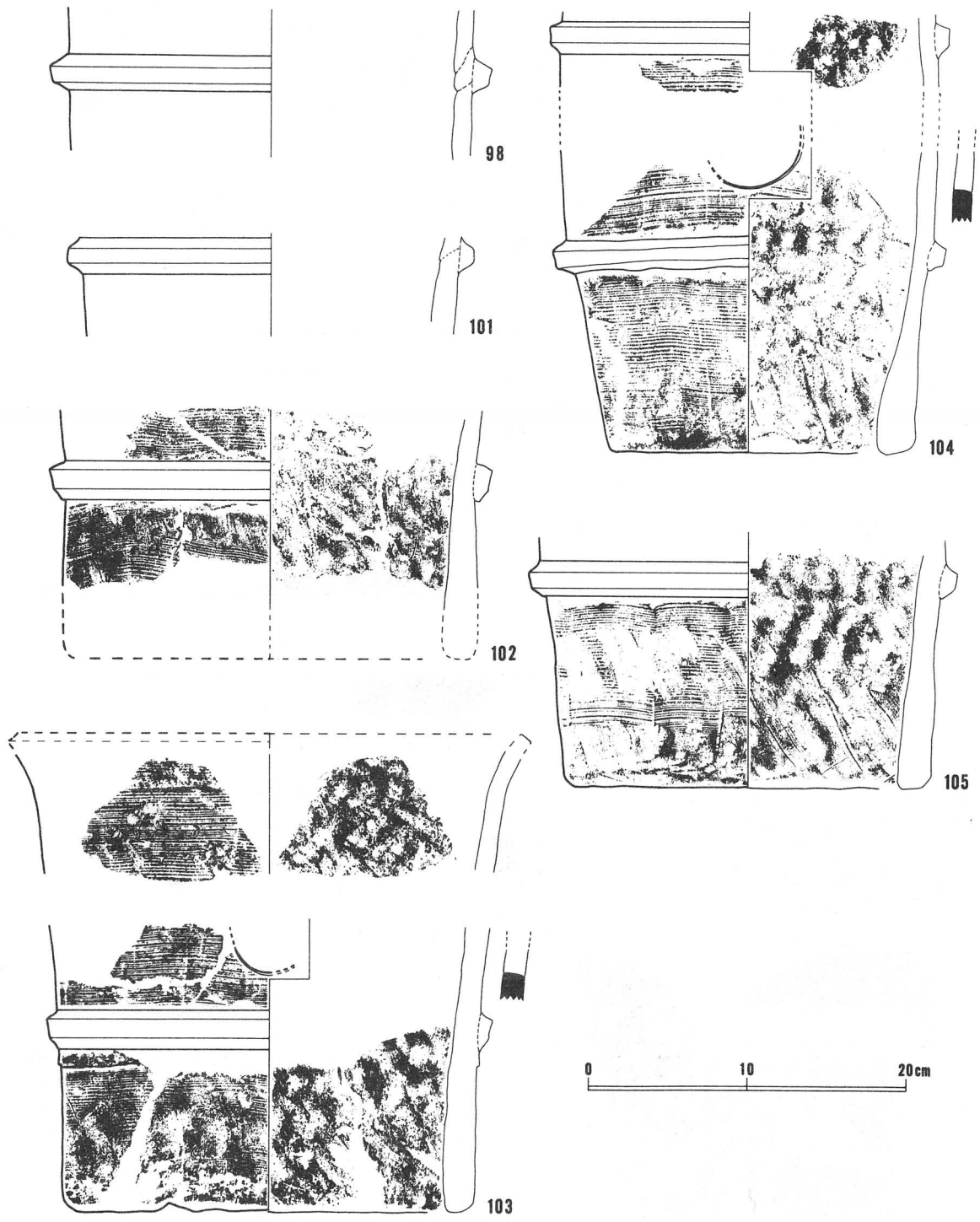


図34 ハニワ実測図(XVII)

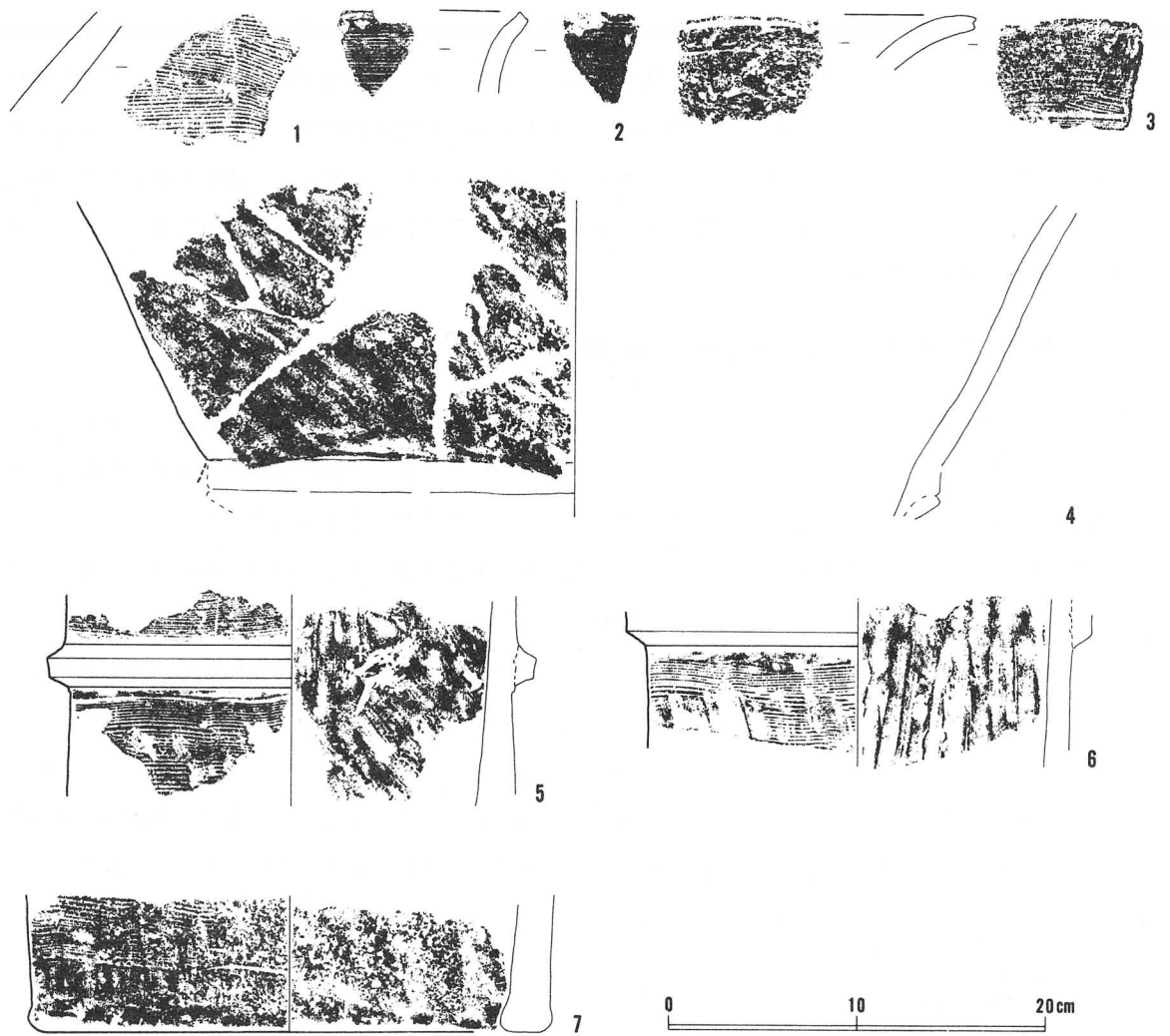


図35 ハニワ実測図(XVIII)

この後に上から下へナデ削り風に調整するが、下端まで及ばないものもある。外面にも押圧による凹凸が残るが、この場合も上から下へナデで調整している。外面は、さらに連続ヨコハケで調整するが、刷毛が下端数cmを残して未調整のものと、下端にまで及ぼし、調整するものがあるが、下端は押圧による凹凸が大きいため、刷毛工具が接地しない場合が多く、未調整で残るものが大半である。外底面は篋状工具によりナデで調整するが粗雑なものが多い。また、外底面には、細い棒状の圧痕が不定方向に多数残っている。これは大半のものに認められるところであり、また、ワラ状の圧痕の見られるものもある。3号では、底部下端で外方へ張り出した粘土を篋状工具で削り落している。下端の角部分を部分的に篋削り調整しているものも見られるが、大半は未調整であり、押圧痕を残している。

d. タガ及び貼り付け部分の調整

タガの貼り付け部分は、ヨコナデされる。このために、貼り付け部分が凹面を呈するものがある。また、一～三条の沈線をめぐらせるものがある。タガは、すべてヨコナデによって調整される。タガの調整は、器壁の二次調整後に実施される。このことは、タガ貼り付け部分に二次調整の刷毛目の及ぶものがないこと、刷毛目がタガのナデ調整により消えるものが見られること、刷毛目がタガ下端より1cm程の間隔をおいて施されているものがあること等により明らかである。タガの調整は外面、次いで、上下をはさみ込んでヨコナデされる。この場合外面が凹む。三面同時に調整されるもの、上下の調整に次いで外面が調整されるもの等も若干見られる。

e. スカシ孔

すべて円形で、底部と口縁部にはなく、二段目と三段目に限られる。各段とも二孔で、対面の位置関係にある。各段の二孔を結ぶ線分が直交する位置にある。スカシは二次調整の刷毛目を施した後に、鋭利な工具（鉄製刀子か？）で切り取られており、その削除面はシャープである。

f. 焼成法

すべて無黒斑である。概して白っぽい色調を呈し、やや軟質である。3号、30号、104号、105号等は褐色を呈していて非常に硬質であるが、例外的である。

g. 製作工程の復原

上記のことから、円筒ハニワの製作工程を復原すると以下の通りである。

- ①内側を下にして粘土帯を巻き上げる。
- ②倒立して底部の押圧調整と外底面を篋調整する。
- ③器壁の内外面をナデ調整（一次調整）し、タガ貼り付け部分をヨコナデする。
- ④タガを貼り付ける。
- ⑤器壁外面を連続ヨコハケ調整（二次調整）する。
- ⑥タガのヨコナデ調整及び口縁端部附近内外面のヨコナデ調整を実施する。
- ⑦スカシ孔を切り取る。

h. 形態的特徴(図36～39)

円筒ハニワの遺存状態は、朝顔形ハニワの筒部も含めても、図上復原できるものを加えて、低部から口縁部までわかるものはわずか2点であり、三段目タガまで知れるものでも3点と全容を知れるものは非常に少い。

まず、全容を復原できた18号ハニワについて見ると、全高52.5cm、低部径22.7cm、口縁部径38cmの規模を持ち、逆円錐台形を呈する。タガは三段に配され、円孔が2個一対で、二段目と三段目に穿孔される。

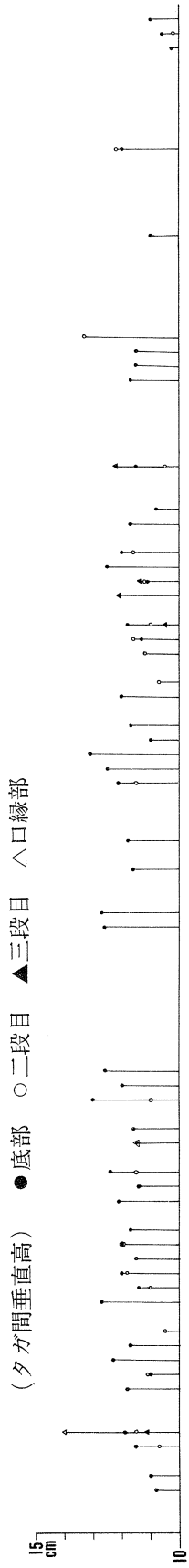
7号ハニワは図上で復原できたものであるが、全高54.4cm、低部径22.7cm、口縁部径28.9cmの規模に復原でき、18号ハニワと大差のない大きさのものである。タガの本数、円孔の個数、位置も同じである。

他の円筒ハニワは、全容を知ることができないが、基本的には18号あるいは7号ハニワと同じ形態的特徴を持っているものと考えられる。以下では、表5に示した円筒ハニワの各部分の計測値の主なものを図36にグラフ化したので、この図をもとに、形態的特徴を略述していくことにする。

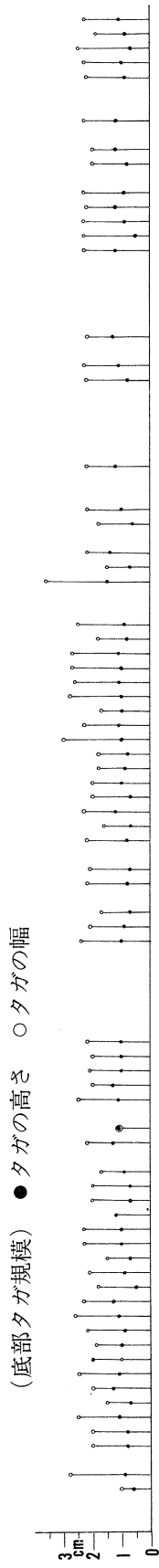
まず、円筒ハニワの高さは、上述のように、18号で52.5cm、7号で54.4cmと復原できた。他のものについては不明であるが、タガ間の高さに関しては、18号で、低部より12.0cm、10.8cm、10.5cm、14cmで、二段目及び三段目がほぼ同規模で、低部と口縁部を高くしていることが知れる。三段目まで知れる63号では、低部より11.8cm、11.0cm、10.5cmと計測でき、やはり低部が最も高く、各段の高さもさほど差がない。また、最も多量に計測できた低部の高さについて見ると、30号、54号が最も高く13cm、103号が最も低く10.3cmで、その差わずかに2.7cmである。従って、いずれのハニワも、18号あるいは7号で復原した計測値に近似した全高を持つものと考えてよからう。

さて、次に直径規模であるが、図37に、低部下端径を横軸に、底部タガ下端径を縦軸にしたもの、これに、底部タガ下端径を横軸に、二段目タガ下端径を縦軸にしたグラフを作成した。また、図38に、底部の上下端径の差を横軸、二段目の上下端径の差を縦軸にしたグラフを作成した。これらのグラフをもとに形態的特徴を述べることにするが、図38では、45度の線分に対し、左側に位置するものは低部の開きより二段目の開きが大きいものであり、右側に位置するものはその逆の関係にあることを示す。このグラフから、45度の線分に近い位置にあるグループ(B群)、左側へ大きく離れるグループ(A群)、右側へ大きく離れるグループ(C群)の三群に大別することができる。すなわち、A群は、低部の開きより二段目の開きが大きい一群であり、C群は低部の開きより二段目の開きが小さい一群である。B群は、低部、二段目とも同じ角度で開くことを示す。この各群を図37の中でグルーピングしてみた。図37は低部上下端径の規模及び開き具合を示すが、Cとした一群はA・B両群に対して45度の線分(器壁が垂直であることを示す)より遠距離に位置する。A・B両群はC群より45度線分に近く、両者を区別できるほど明瞭に分布しない。このことは、C群の低部の開きがA・B両群に比べて大きく、A・B両群はC群より小さく、かつ、両群が近似した開きをもつことを示している。さらに、図37に二段目の上下端の径をグラフ化したのが、ここではC群が45度線分に近く、A群が遠距離に位置するという逆の分布を示す。B群は低部の場合と同様バラつきが大きいのが、低部、二段目とも同様の角度で開くことを示している。このように、二段目及び低部の器壁の外傾の状況を三群に区別できるが、これらの直径規模を図37で見ると、低部については、A群は24.5cm以上、28.6cmまでの間、C群は24.4cm以上、29.4cmまでの間に分布する。これに対し、B群は25.7cm以下の中に納まる。二段目においても、A群は26.5cm以上、27.7cm以下の間、C群は25cm以上、29.4cmまでの間に分布するのに対し、B群は23.6cm以上、27.5cm以下の間に分布する。すなわち、A・C両群は、その直径規模が比較的大きく、B群は小さいということを示す。

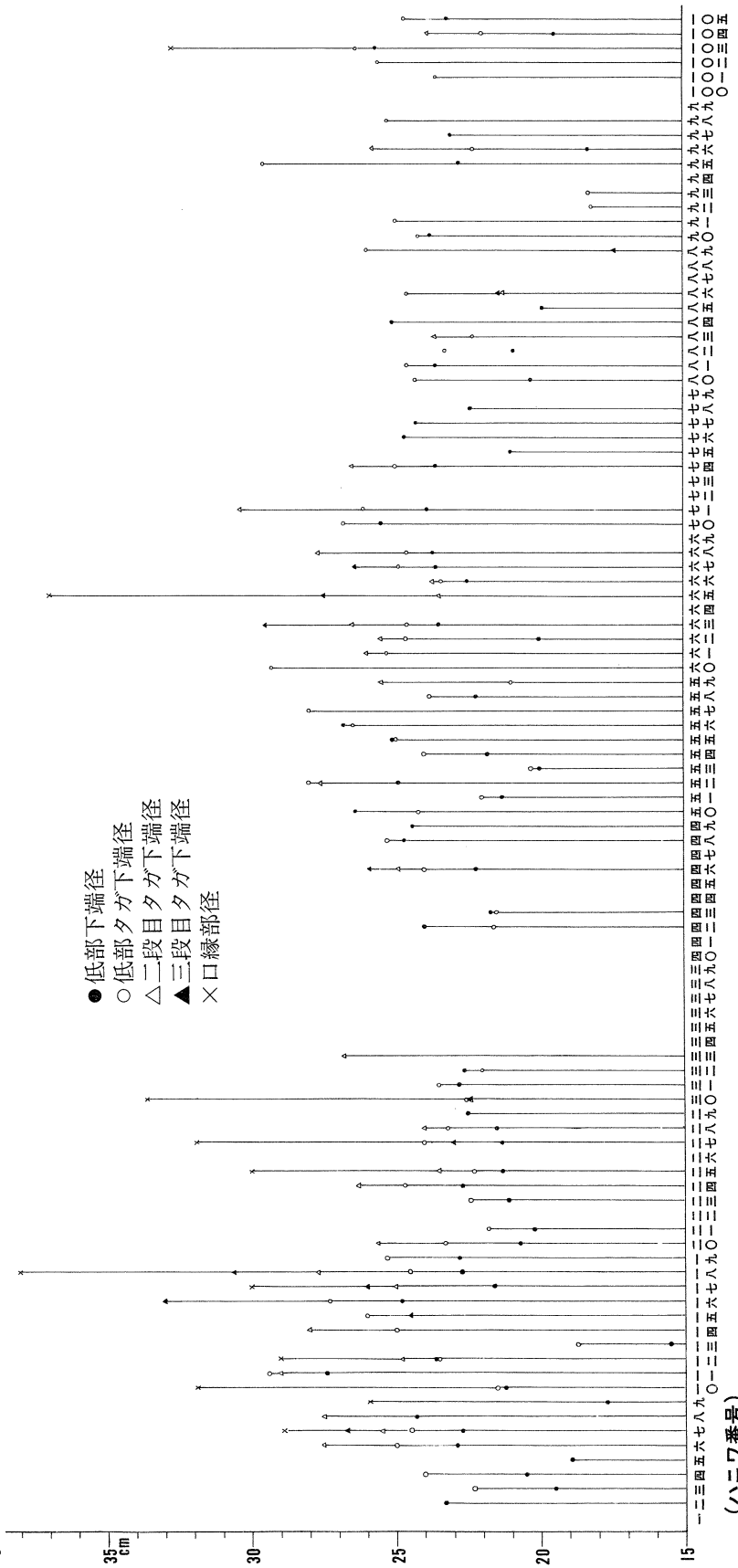
(タガ間垂直高)



(底部タガ規模)



- 底部下端径
- 底部タガ下端径
- △ 二段目タガ下端径
- ▲ 三段目タガ下端径
- × 口縁部径



(ハニワ番号)

図36 円筒ハニワ計測値グラフ(朝顔形ハニワ筒部も含む)

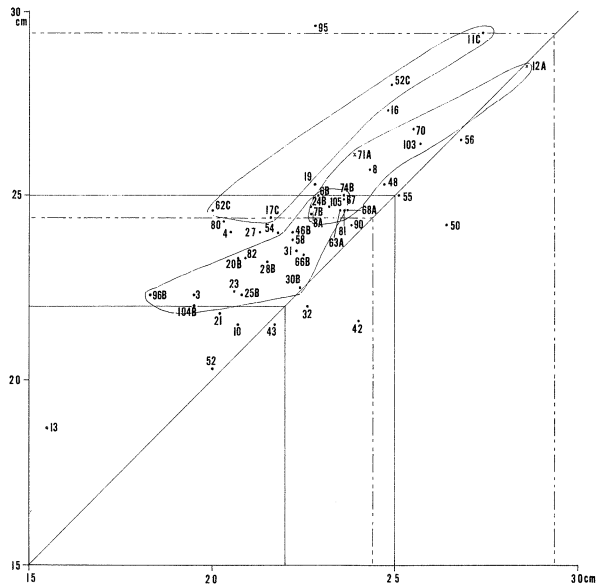
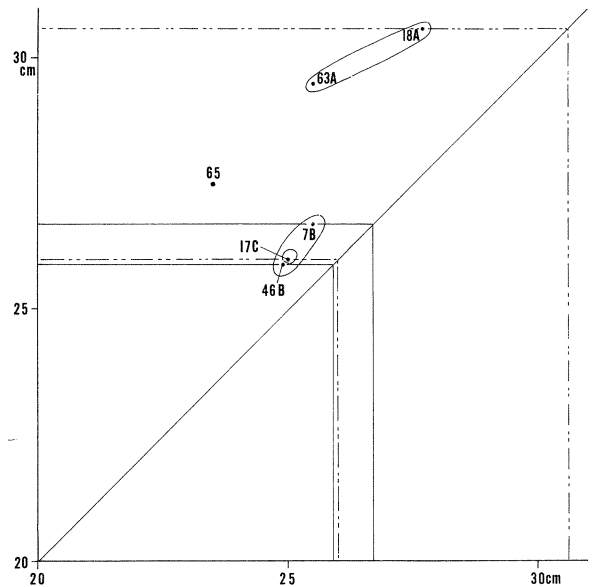


図37 ハニワ直径規模(低部)
(A, B, Cは図39によるグループ)



三段目以上について見ると、三段目まで計測できたものはわずか5点であるが、低部、二段目と同様のグラフを図38に作成した。二段目と三段目の器壁の外傾度を見ると、A群の63号がやや大きく三段目が外傾するが、A～C三群とも大差がない。規模の上では、A群が大きく、B・C両群は同一規模となっている。

口縁部まで復元したものはわずか2点であるが、B群の7号は口縁端部の外反が小さく、A群の18号は大きく外反している。

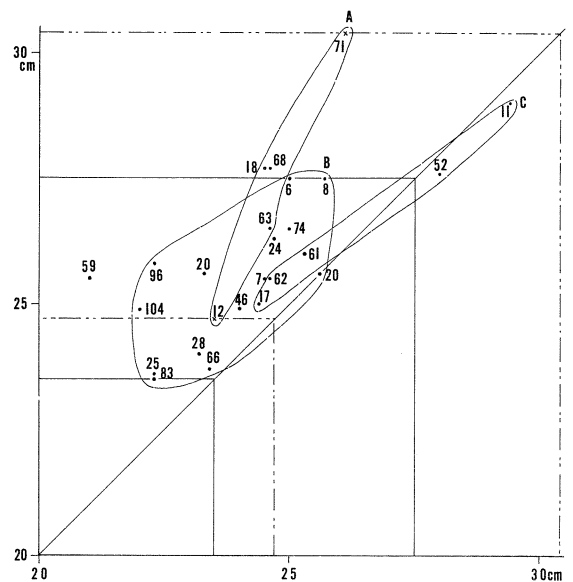


図38 ハニワ直径規模(下; 二段目、上; 三段目)
(A, B, Cは図39によるグループ)

以上、円筒ハニワの形態を各部分の計測値をグラフ化して説明してきたが、特に器壁の外傾度に三群が見られ、規模(各段の直径規模)にも差のあることが知れる。しかし、数量的には、A群は3点、C群は4点であり、大半がB群に入る。低部規模のみを見ても、大半がB群の範囲内に入る。二段目まで復元できるものの傾向が全体に適用できるとすると、およそ、円筒ハニワの大半がB群としたものの形態及び規模をもつものである。A・C両群は1割程度であり、むしろ例外的であるといえる。

タガの形態は、一般的に上端を高く、下端を低くした変台形状の横断面を呈している。ナデ調整が外面、次いで上下両面をはさみ込んで行われるため、外面が凹むが、概して浅い。外面を再度ナデるため、三角形に近い横断面に変形したもの、正台形を呈するもの等が若干見られる。最下段タガの規模を図36にグラフ化した

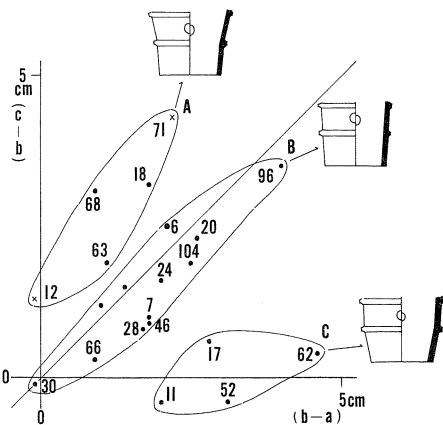
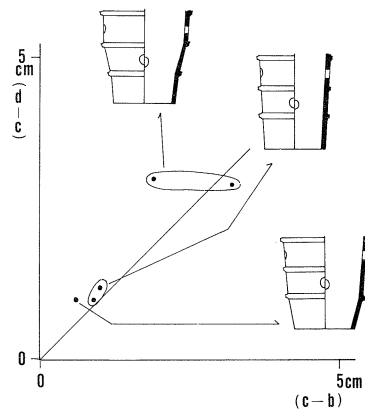
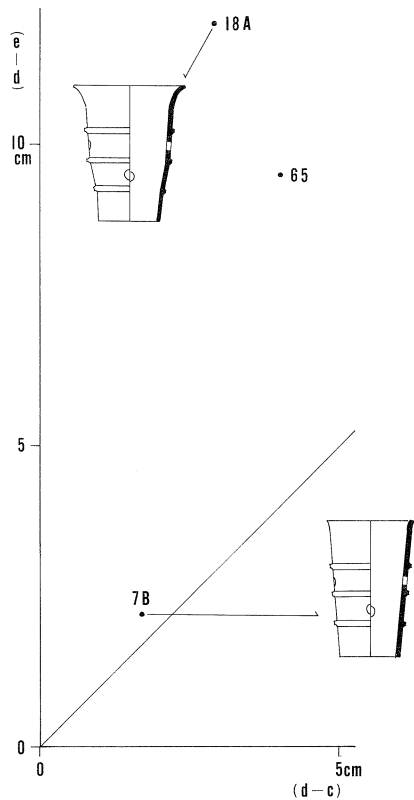


図39 ハニワ器壁外傾度 (a; 底部下端径, b; 底部タガ下端径, c; 二段目タガ下端径, d; 三段目タガ下端径, e; 口縁部径)

幅が1~2.5cm、高さが0.5~2cmの間にあり、概して幅が高さより大きい。12号では、高さが幅の2倍になった高いものとなっている。また、28号では幅、高さとも同じであるが、例外的である。タガの規模は筒部の規模等に特に関係がない。

最後に、口縁端部の形態は、端部をナデて面取りした後、内外面からはさみ込んでナデるため、端面が浅く凹む。朝顔形ハニワの口縁端部と同じ特徴を示している。

以上、円筒ハニワの形態的特徴を述べてきたが、若干の相違が見られたものの、図上復原過程、焼け歪み等を考慮すれば、特記すべき程の形態的な差異がないことが知れる。製作手法にもほとんど差異がなく、工人集団の相違を指摘できるものではない。

ハ. 刻線文ハニワ(図40・41)

口縁部外面で、端部附近に線刻で文様を施すものがある。

7号ハニワでは、口縁端部より3.2cm下方に文様が刻まれている。下方の二本の直線と上方二本の曲線で面長な頭部を表現し、やや長めの頸部とくびれのある背部を描き、鳩胸様の胸部を描いている。胸部前面には二本の直線で前脚を表現している。

7号と同じ表現は92号で見られる。92号の1点は頭部として三本の並行する直線を用い、これに直交して二本の並行線を刻むことによって頸部を表出している。他の1点はその尻部を描くもので、背部の曲線を尻部下方に延長させて尾を表現し、尾と腹部の付け根から二本の直線を刻んで後脚部を描いている。

17号は7号と表現が若干異なる。頭部は砲弾状で、その中に大きな目を描いている。頭部後方にハの字を横にした刻線があり、耳あるいは角を表現している。頸部は7号に比べて倍程の長さがあり、前方に傾けている。17号ではもう1点刻線文様がある破片がある。尻部を表出するものであるが、92号と同様に丸味のある胴部と二本の並行する直線で後脚部を表現している。尾は脚の付け根から上方にはね上げて表現しており、92号とは異なる。

4号の破片も尻部を表出したもので、4号や12号と同

表5 円筒ハニワ計測値一覧表

番号	底 部					第 2 段				第 3 段				口 縁 部		朝 顔	文 様
	下端径	底部高	タガ 下端径	タガ高	タガ幅	タガ間高	タガ 下端径	タガ高	タガ幅	タガ 間高	タガ 下端径	タガ高	タガ幅	高さ	径		
1																	
2	23.3																
3	19.5	10.8	22.3	0.6	1.0												
4	20.5	11.0	24.0	0.9	2.8												○ ○
5	18.5																
6	22.9	11.5	25.0	0.8	2.0	10.7	27.5	0.6	1.7								○
7	22.7	11.9	24.5			11.5	25.5	0.8	1.8	11.2	26.7	0.8	2.0	14.0	28.9		○
8	24.3						(27.5)	(1.0)	(2.4)								
9	17.7						(24.0)	(0.7)	(1.5)						25.9		
10	21.2	11.8	21.5	1.3	2.0										31.9		
11	27.4	11.6	29.4	1.1	2.5	(11.1)	(29.0)	(0.8)	(1.0)								
12	23.6	12.3	23.5	1.0	2.0		(24.8)	(1.1)	(2.1)						29.0		
13	15.5	11.7	18.7	1.0	1.9												
14-1							(28.1)	(1.1)	(2.5)								
14-2			(25.0)	(0.9)	(2.2)	(10.5)	(28.0)	(0.9)	(2.9)								
15							(26.0)	(1.1)	(2.6)								○
16	24.8	12.7	27.3	1.3	2.3		(33.0)	1.1	1.6								
17	21.6	11.4	24.4	0.5	1.8	11.0	25.0		2.3		(26.0)				30.0		○
18	22.7	12.0	24.5	0.9	2.1	10.8	27.7	0.8	2.1	10.5	30.6	0.8	1.7	14.0	38.0		
19	22.8	11.5	25.3	0.7	1.5												○
20	20.7	12.0	23.3	1.0	2.3	12.0	25.6	1.1	2.4								
21	20.2	11.7	21.8		2.3												
22																	
23	21.1	12.1	22.4	0.7	2.0												
24	22.7	11.4	24.7	0.7	2.0		(26.3)	(0.9)	(1.9)								
25	21.3	12.4	22.3	0.9	1.7	11.5	23.5	1.0	2.0						30.0		○
26																	○
27	21.3	11.5	24.0	1.3	2.2						23.0	1.3	2.5	11.5	31.9		○
28	21.5	11.6	23.2	1.1	1.1		(24.0)	(1.0)	(2.2)								
29	22.5																
30	22.4	13.0	22.5	1.1	2.5	11.0	22.4	0.8	2.0						33.6		
31	22.8	12.0	23.5	1.3	2.0												○ ○
32	22.6	12.6	22.0	1.0	2.1												
33							(26.8)	(0.7)	(1.8)								
34							(22.6)	(0.8)	(2.0)								○ ○
35																	○
36																	

番号	底 部				第 2 段				第 3 段				口 縁 部		朝 顔	文 様
	下端径	底部高	タガ 下端径	タガ高	タガ幅	タガ間高	タガ 下端径	タガ高	タガ幅	タガ 間高	タガ 下端径	タガ高	タガ幅	高さ		
37																
38																
39																
40																○
41			(23.5)	1.0	2.4											
42	24.0	12.6	21.6	0.9	2.1											○
43	21.7	12.7	21.5	0.7	1.7											○
44																
45							(21.3)	(0.8)	(2.2)	(11.4)	(22.0)	(0.9)	(2.2)			
46	22.2	11.6	24.0	0.7	2.1		(24.9)	(1.1)	(2.2)		(25.9)	(1.0)	(2.2)			○
47																
48	24.8	11.8	25.3	0.8	2.2											○
49	24.4						(23.2)		(1.6)							
50	26.4		24.2	1.2	2.3											○
51	21.3	11.7	22.0	0.7	2.0											
52	24.9	12.1	28.0	1.0	2.0	11.5	27.6	0.7	2.2							
53	20.0	12.5	20.3	0.9	1.8											
54	21.8	13.1	24.0	0.8	1.8											
55	25.1	11.0	25.0	1.0	3.0											
56	26.8	11.7	26.5	1.1	2.3											
57							(28.0)	(1.0)	(2.8)							
58	22.2	12.0	23.8	1.0	2.8											
59			(21.0)	(1.1)	(2.6)	(10.7)	(25.5)	(0.7)								
60							(29.3)	(0.0)	(2.7)							
61			25.3	1.1	1.7	11.2	28.0	1.0	2.5							
62	20.0	11.3	24.6	0.8	1.8	11.6	25.0	0.8	2.2							○
63	23.5	11.8	24.6	0.9	2.5	11.0	26.5	1.0	2.2	10.5	29.5	0.9	2.2			
64																
65-1																○
65-2							23.5	0.8	2.0	12.1	27.5	1.2	3.3			
66	22.5	11.1	23.4	1.5	3.6	11.2	23.7	0.9	2.2	11.4	26.4	1.0	2.5	37.0		
67	23.6	12.5	24.9	0.7	1.5											
68	23.7	12.0	24.6	1.4	2.2	11.6	27.7	1.3	2.5							
69																○
70	25.5	11.7	26.8	0.6	1.8											
71	23.9	10.8	26.1	1.0	2.2		30.4	1.3	2.2							
72																
73																
74	23.6	11.5	25.0	1.2	2.2	10.5	26.5	1.3	2.6							○

番号	底 部					第 2 段				第 3 段				口 縁 部		朝 顔	文 様
	下端径	底部高	タガ 下端径	タガ高	タガ幅	タガ間高	タガ 下端径	タガ高	タガ幅	タガ 間高	タガ 下端径	タガ高	タガ幅	高さ	径		
75	21.0																
76	24.7																○
77	24.3																
78	22.4																
79																	
80	20.3	11.7	24.3	0.8	2.2												
81	23.6	11.5	24.6	1.1	2.3												
82	20.9	11.5	23.3		1.7												
83							22.3	1.3	2.2	13.3	23.6	1.3	2.0				
84	25.1																
85	19.9																
86							23.7	1.1	2.2								
87																	
88																	
89							(26.0)	(1.2)	(2.3)								○
90	23.8	11.0	24.2	0.5	2.3												
91							(25.0)		(2.3)								
92							(18.2)	(1.2)	(2.2)								○
93							(18.3)	(0.9)	(2.3)								
94																	
95	22.8						(29.6)	(0.8)	(2.0)								
96	18.3	12.0	22.3	1.2	2.0	12.2	25.8	1.3	2.2								○
97	23.1																
98							(25.3)	(1.2)	(2.3)								○
99																	
100																	
101							(23.6)	(0.9)	(2.2)								
102			25.6	1.0	2.3												
103	25.7	10.3	26.4	0.7	2.5									32.8			
104	19.5	10.6	22.0	0.9	1.9	10.2	23.9	0.9	2.2								
105	23.2	12.0	24.7	1.1	2.3												

{ ()は正確な部分の不明なもの}

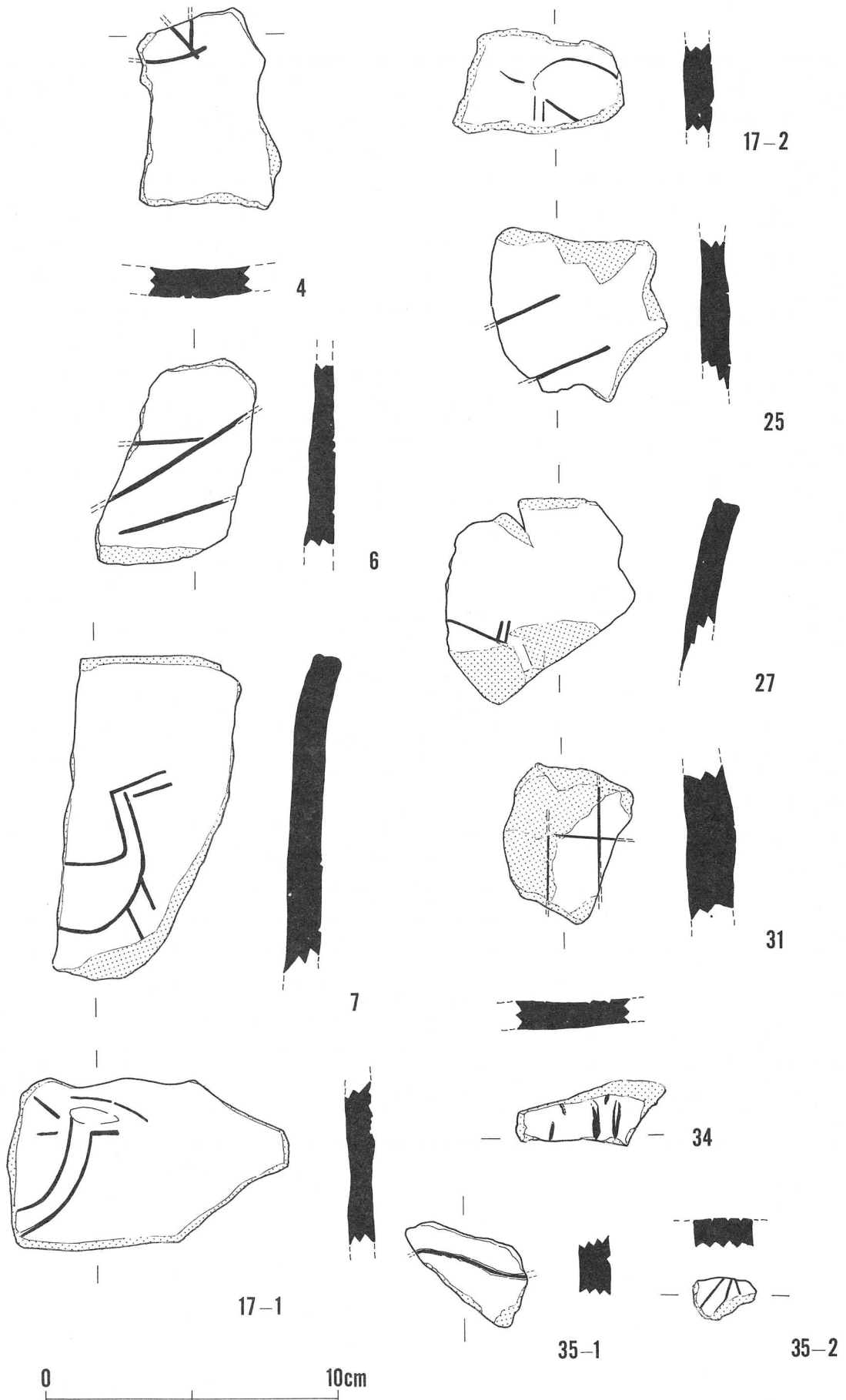


図40 ハニワ刻線文様実測図(I)

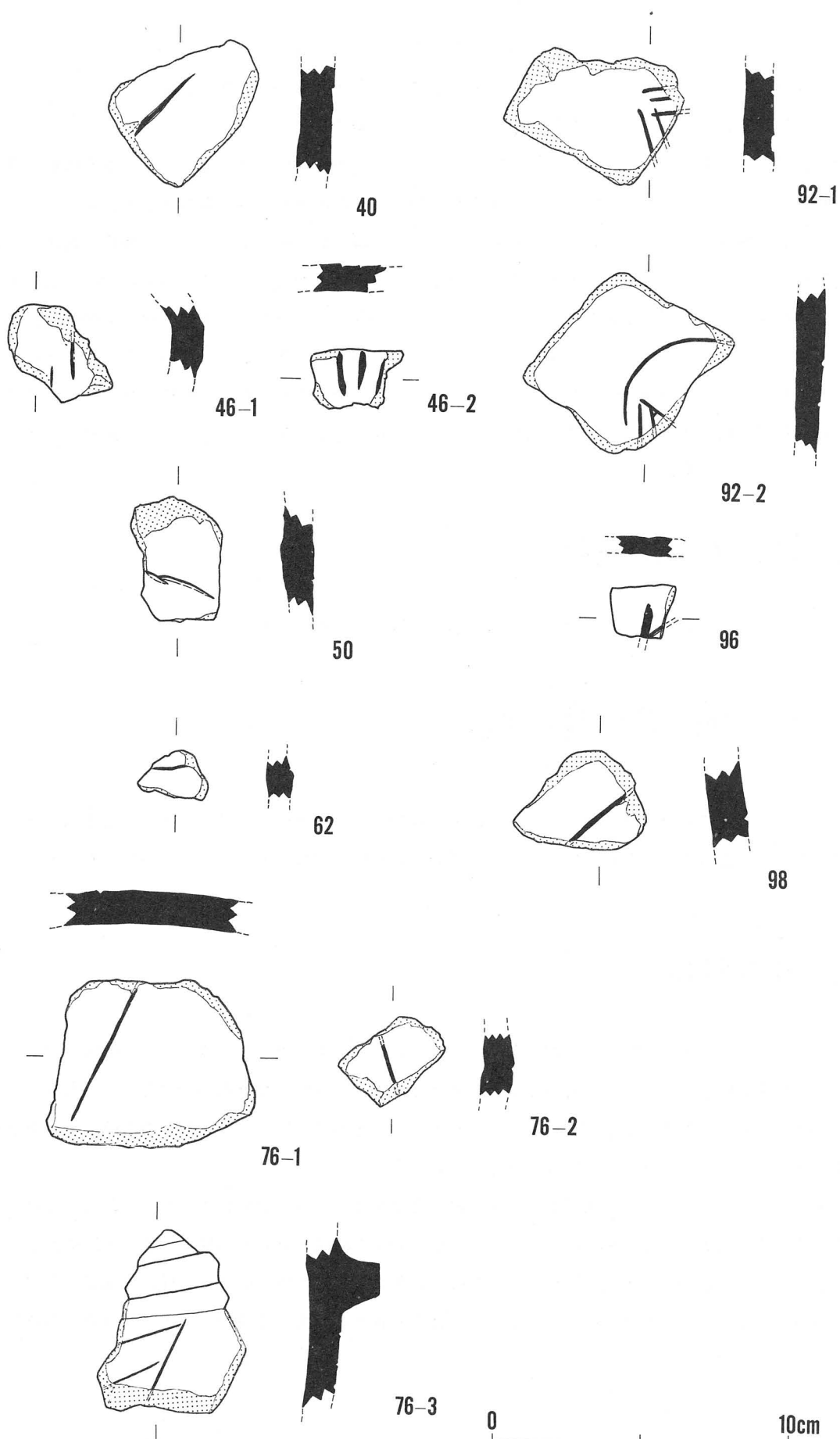


図41 ハニワ刻線文様実測図(II)

じ表現であるが、尾の表現は92号と同じで、背部の曲線を下方に延長させたものである。

35号の1点は、ゆるやかな横S字形のカーブを描くもので、上記のものの背部を表現するものであろう。他の1点は、三本の刻線を見るが、小片で何を表現しているか明瞭でない。

27号では斜方向に一本とこれに直交する短い並行線、さらに、斜行線が鈍角に並行する二本の直線が見える。口縁部を垂直にした時、7号に見る頭部に近似するが、頸部に当る部分が一本の直線となり、異なる。

以上は、四足の動物を表現していることは明らかであろう。頭部から頸部にかけては二種類の表現が見られるが、後胴から尻部にかけて、また、脚の表現は共通している。尾の表現は、たれ下るものとはね上るものがある。いずれにしても、面長な頭部と長い頸部、横S字形のゆるやかなカーブを描く背、鳩胸様の胸部と丸味のある腹部、長い前後脚を持つという特徴を持っている。全体的には馬を表現しているように思える。

以上の他に幾何学的な刻線を持つものがある。6号は、序々に接近する二本の斜行線と水平線、25号は並行する二本の斜行線、40号は一本の斜行線、48号も一条の斜行線を見る。76号からは3片の刻線を持つ破片がある。同一個体かどうかは明らかでない。

4. 封土中出土遺物

封土中より、土師器の破片が1点出土している。小片で器形は不明である。

IV. 古墳の年代

当古墳の年代を決定する資料としては、主体部構造、副葬品、外部施設としてのハニワ、主体部上方の積石上面から出土した須恵器類等が有効であろう。以下で個々の資料に検討を加え、古墳の年代を考えることとする。

1. 須恵器類

須恵器類は、甗と広口壺、杯蓋等で、棺を埋納した後、その上方を充填したと考えられる礫層上面より出土したもので、埋葬時期を決定する上で有効な資料と考える。周辺の近時した時期のものとして、余呉町長山古墳群^①や浅井町雲雀山古墳群^②等があるが、いずれも、棺上部で須恵器類が出土しており、当古墳出土の須恵器類が埋棺後供献されたものであることを傍証するものといえる。

さて、甗についてみると、一点は大型品で、胴部最大径が胴部の上位に位置しており、口頸部が細いという特徴を持っている。大阪府陶邑古窯跡^③においては、I型式の第3段階とされる時期に大型の甗は消滅していく傾向にあるといわれ、この段階では口頸部が太くなるといわれる。当古墳の甗は、文様帯は刺突列点文であり、全体的な特徴は第3段階より古式といえる。広口壺、杯蓋も甗と並行する時期のものとして大過ない特徴を持っている。

2. ハニワ

ハニワの特色については再述しないが、すべて無黒斑であること、底部が未調整であること等を加えて、川西宏幸のいう第Ⅳ期の特徴を有している^④。ただ、外面調整において、1次調整として刷毛目を見ないことは、2次調整としての刷毛工具が接地しない部分の観察から明らかなことであり、刷毛調整に限っては、第Ⅴ期とされるものに見る2次調整の欠除現象に似て、一度の刷毛調整で終る。また、内面調整においても、すべてナデ調整であるが、7号ハニワで、口縁部内面にヨコハケ調整が加えられており、やはり、Ⅴ期に見る特徴といわれる。総じてハニワの特徴はⅣ期のものであるが、第Ⅴ期に見る新しい特徴がわずかながら加わっており、第Ⅳ期の中でも新しい位置に置くべきであろう。

3. 副葬品

副葬品のうち首飾りは、ガラス小玉43個、勾玉2個、管玉12個で構成されるが、材質はガラス、瑪瑙、碧玉であり、バラエティに富んでいる。勾玉はC字形のものがあり、管玉も直径1cmを越す大型のものが4点ある等、明らかに中期以降の特色を持つ。

腕輪は、左右とも勾玉1点、左腕でガラス小玉が20点、右腕で19点で構成される。勾玉はともにC字形のものである。

鏡は、小型の倣製鏡で、いわゆる珠文鏡といわれるものである。中期以降、後期に多く見出されるといわれるものである^⑤。

4. 主体部構造

棺は、棺底面の痕跡より、いわゆる割竹型の木棺であろう。主体部構造は竪穴式石室の類に分類できるが、いわゆる石室構造を持たず、礫石を混じえた土砂で埋めた状況にあり、最下底のみ石材を並べ、棺の小口を押えるように石材を置いたものであり、非常に簡略化した竪穴式石室構造を持つといえる。湖北地方における横穴式石室の導入は、湖北町四郷崎古墳^⑥において初現するものであり、6世紀前葉の時期である。それ以前にあっては、類例が少ないが、木棺が直葬されるものとして長山古墳群、簡略化しながらも竪穴式石室の構造を伝統的に踏襲するものとして雲雀山古墳群等がある。石室を模倣するものとしては湖北地方においては二例目であるが、ともに古式の須恵器を出土し、横穴式石室採用以前のものであるという共通点がある。こうした簡略化した竪穴式石室構造を持つものの編年的位置付けは現段階ではなし得ないが、少なくとも横穴式石室採用の時期まで下るものではなく、その直前までに採用されていた構築法とすることができよう。

5. 古墳の年代

以上の検討から、当古墳は、古墳時代中期末、5世紀の末頃に年代比定できるのではないかと考えている。須恵器類に関していえば、湖北地方においては、長山古墳群や雲雀山古墳群等に近似する時期であり、主体部

構造からは雲雀山古墳群に近似するものであろう。

おわりに

当古墳は昭和53年度に発掘調査を実施したものであり、すでに3年に近い歳月が流れている。この間、他の発掘調査に従事しなければならず、整理作業は遅々として進まず、調査の合い間をぬって実施するという状況であった。こうした状況にあって、京都産業大学考古学研究会の会員である藤井益夫、井塚哲夫、北脇泰久君等の絶大な協力を得るところがあって、ようやく報告書を取りまとめることができた。ここに記して謝意を表する次第である。

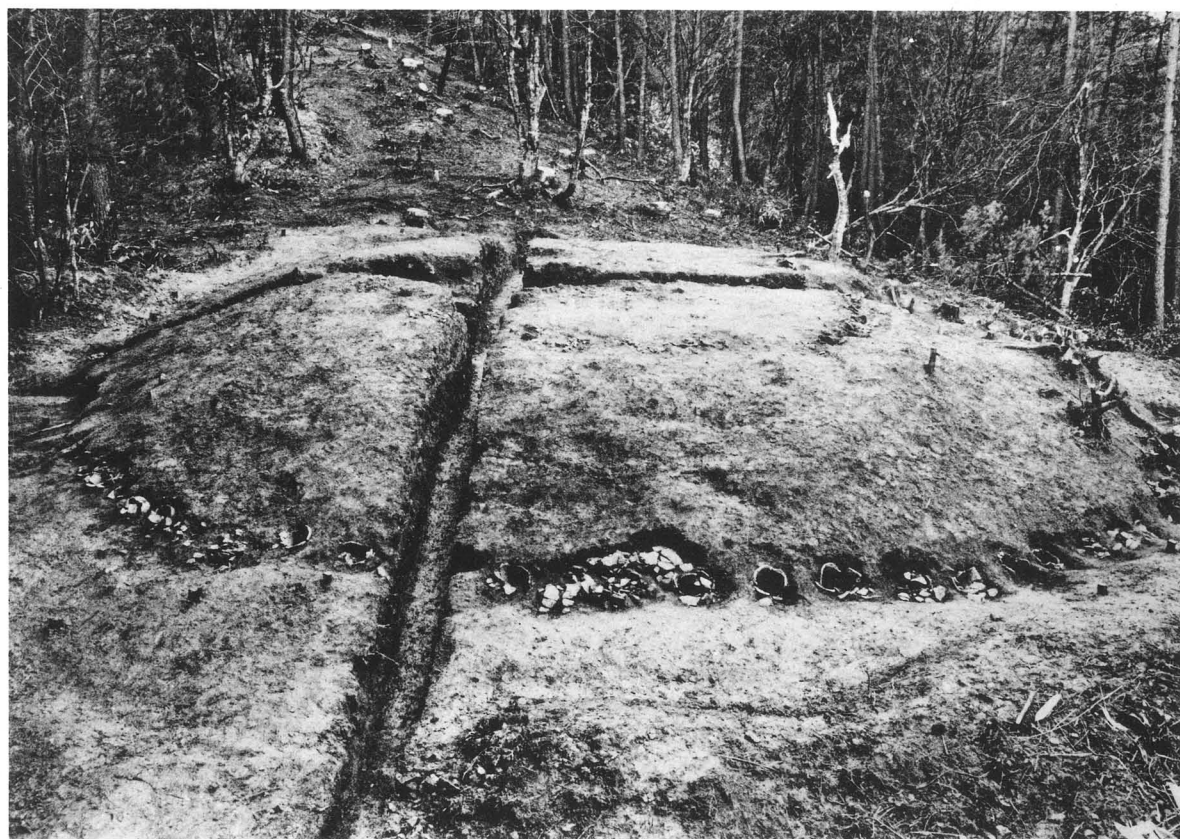
注

- ①昭和52・53年度に滋賀県教育委員会が調査した。
- ②直木孝次郎他「滋賀県東浅井郡湯田村雲雀山古墳群調査報告」(『大阪市立大学文学部歴史学教室紀要』第1冊、昭和28年)
- ③田辺昭三『陶邑古窯跡群』I (平安学園創立九十周年記念研究論集第10号、昭和41年)
- ④川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号、昭和53年)
- ⑤『世界考古学大系』3 日本Ⅲ(昭和34年)、齊藤忠『古代の装身具』(昭和38年)
- ⑥鬼柳彰他「四郷崎古墳」(『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅱ、昭和51年)

圖 版



全景（西より）



全景（東より）



全景（西より）



墳頂部ハニワ列（東より）



墳頂部ハニワ列（南東より）



墳頂部ハニワ列（南東より）



墳丘裾部ハニワ列（北東部，東より）



墳丘裾部ハニワ列（南東部，東より）



墳丘裾部ハニワ列（北西部，西より）



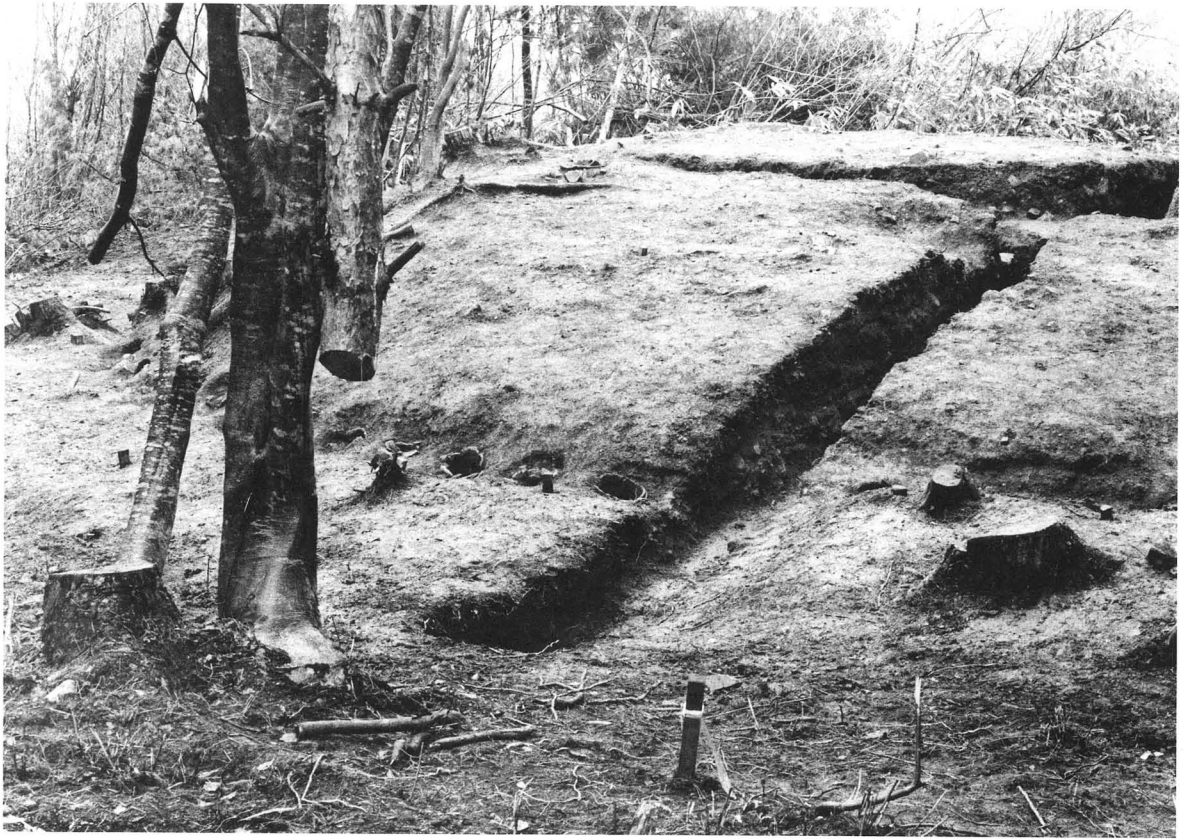
墳丘裾部ハニワ列（南西部，西より）



ハニワ列 (北東部, 南東より)



ハニワ列 (南東部, 東より)



ハニワ列 (南西部, 南西より)



ハニワ列 (南東部, 南西より)



墳丘裾部ハニワ列近景（北東部，東より）



墳丘裾部ハニワ列近景（南東部，東より）



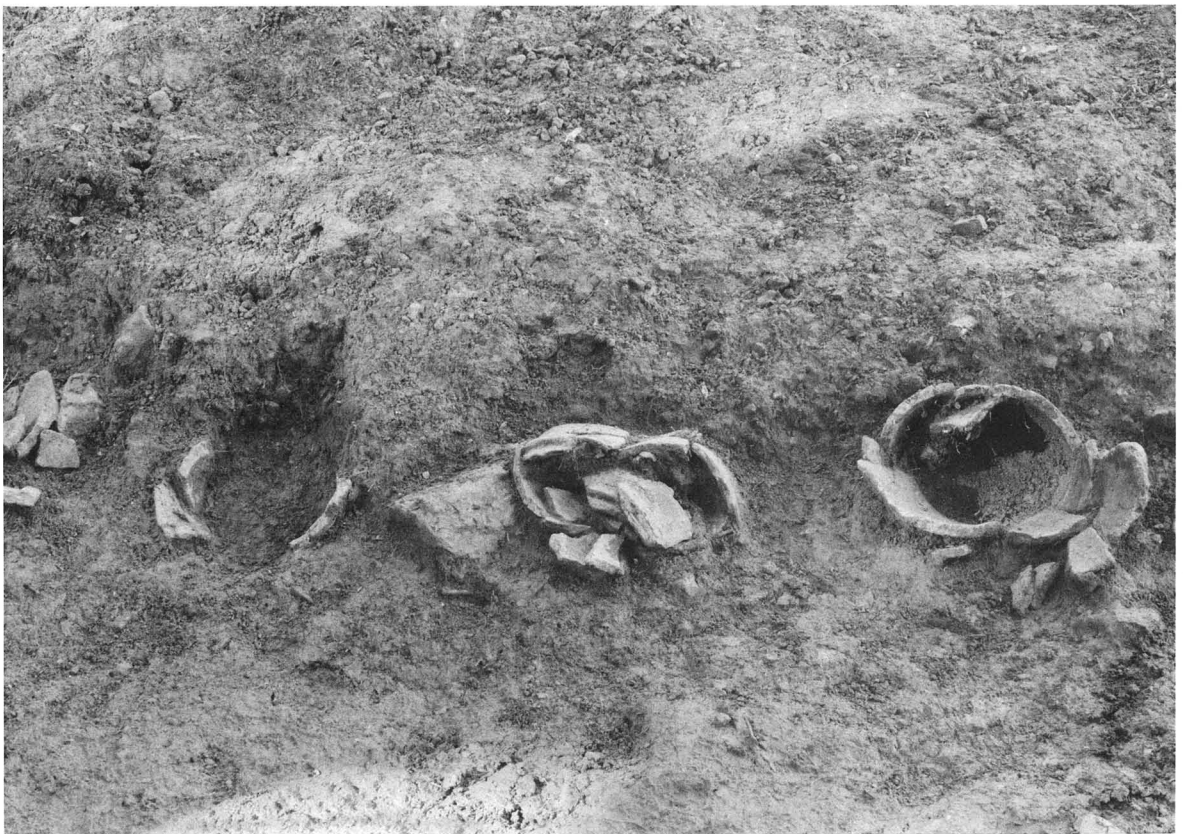
墳丘裾部ハニワ列近景（南西部，南西より）



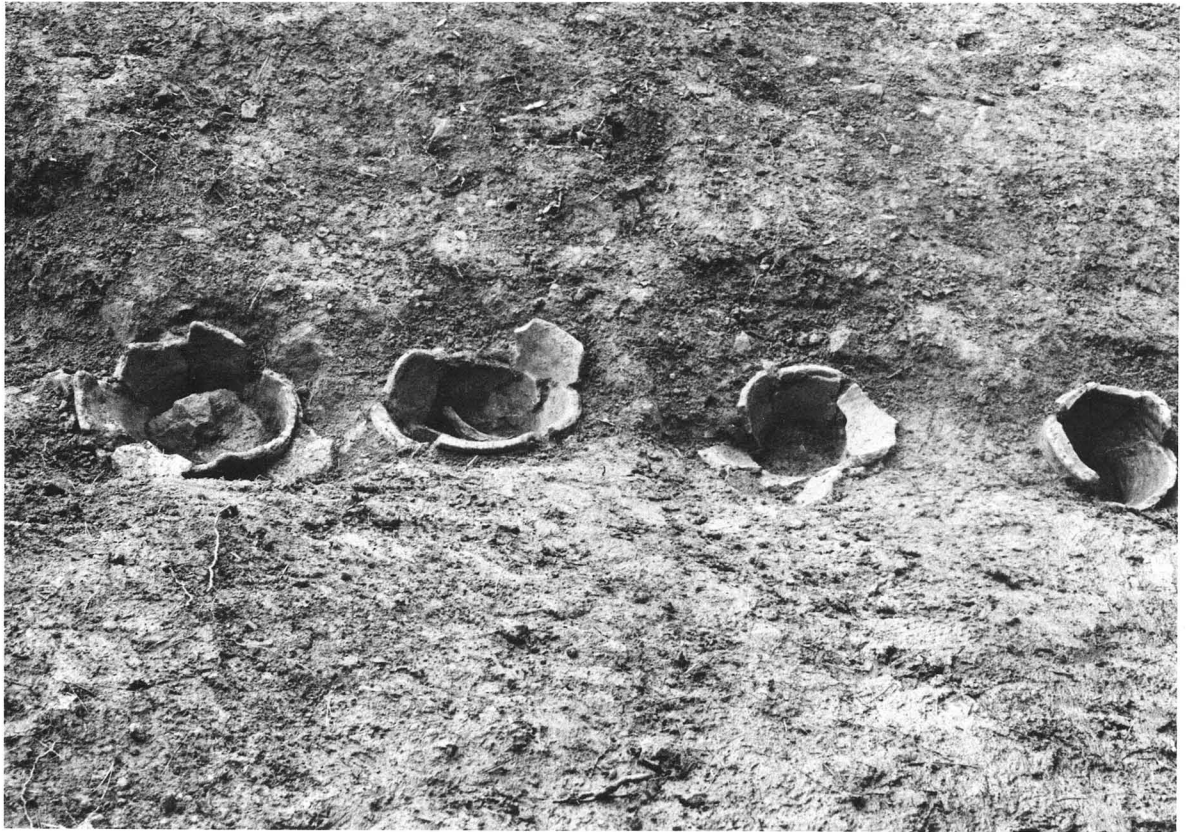
墳丘裾部ハニワ列近景（北西部，北西より）



16～21号 ハニワ



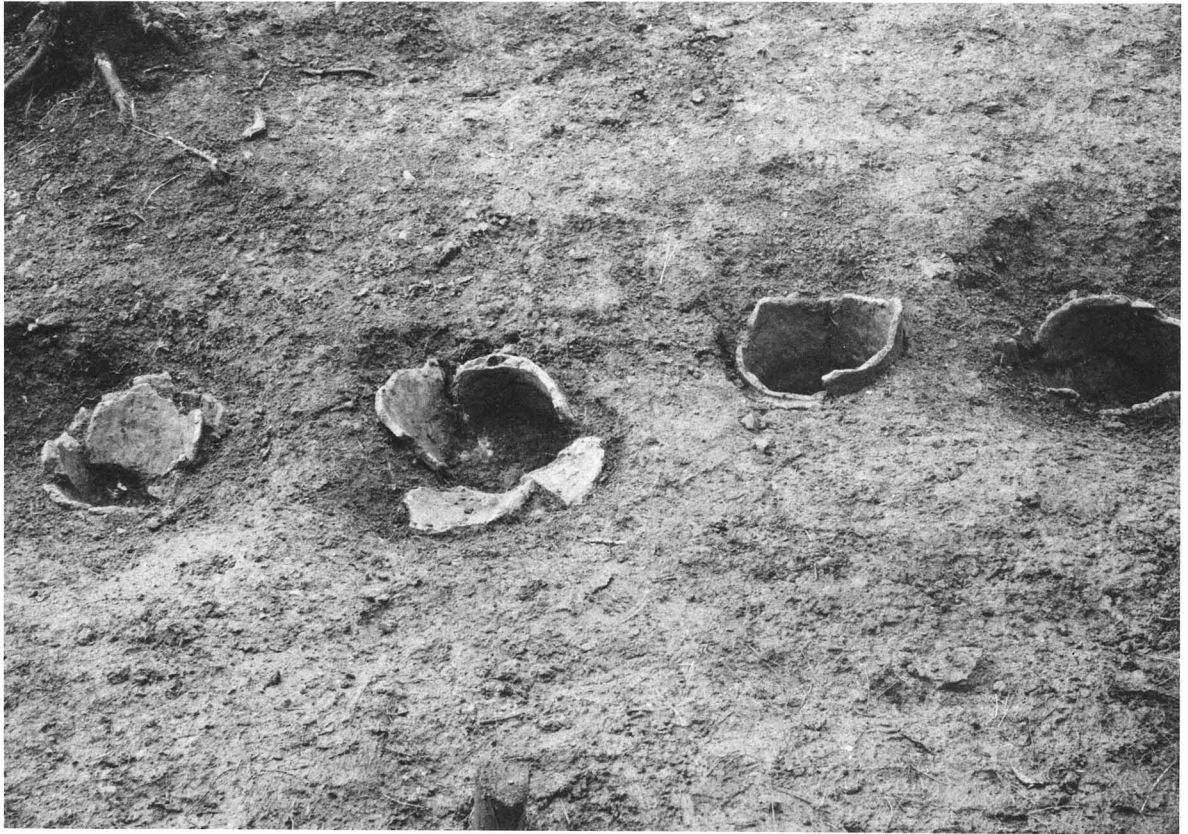
27～29号 ハニワ



53～56号 ハニワ



61～64号 ハニワ



65~68号 ハニワ



69~72号 ハニワ



80号 ハニワ



79号 ハニワ



104号 ハニワ



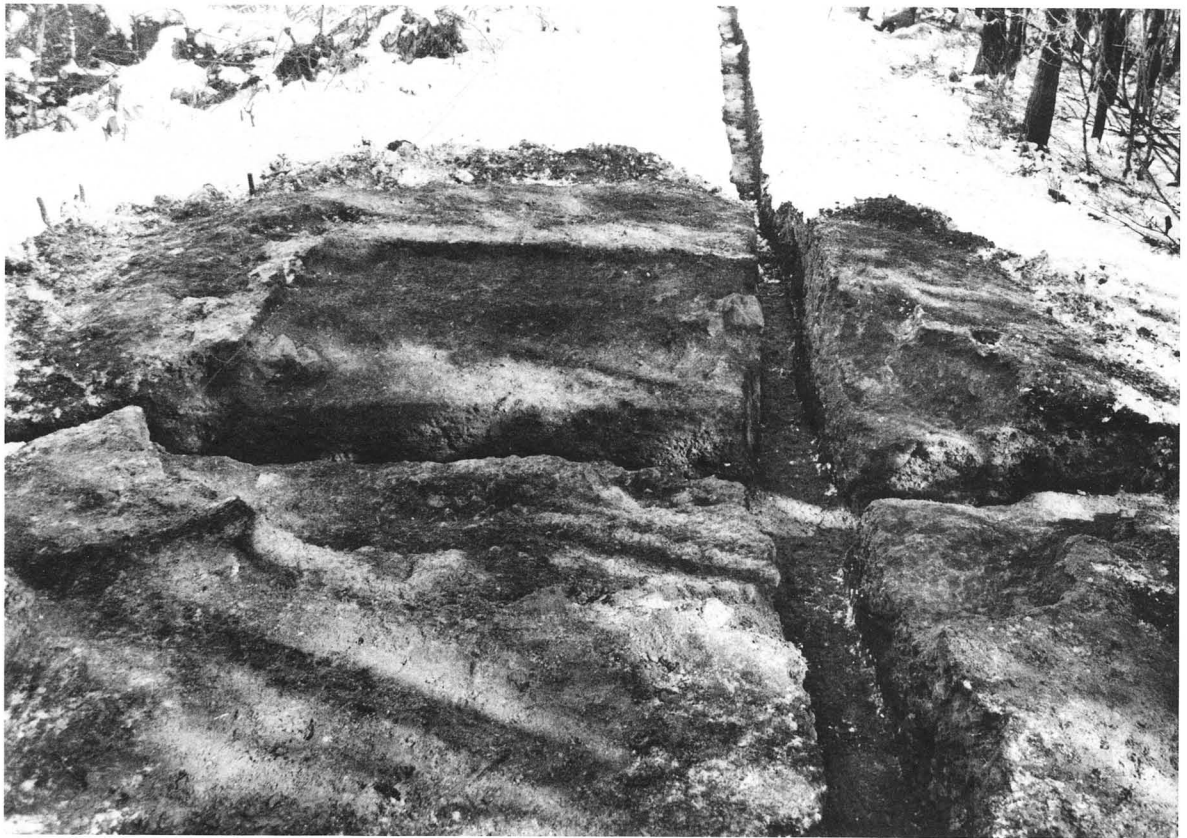
82号 ハニワ



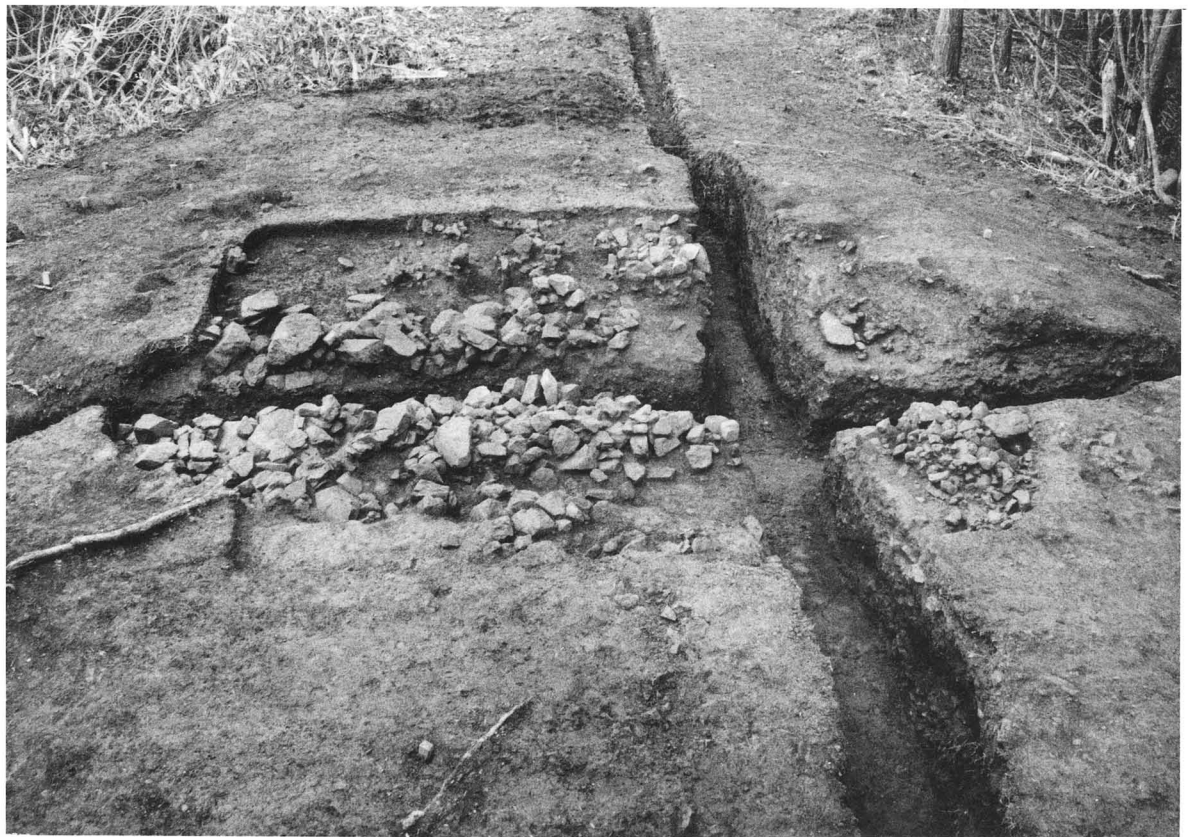
66号 ハニワ埋設状態



105号 ハニワ埋設状態



主体部全景（発掘前西より）



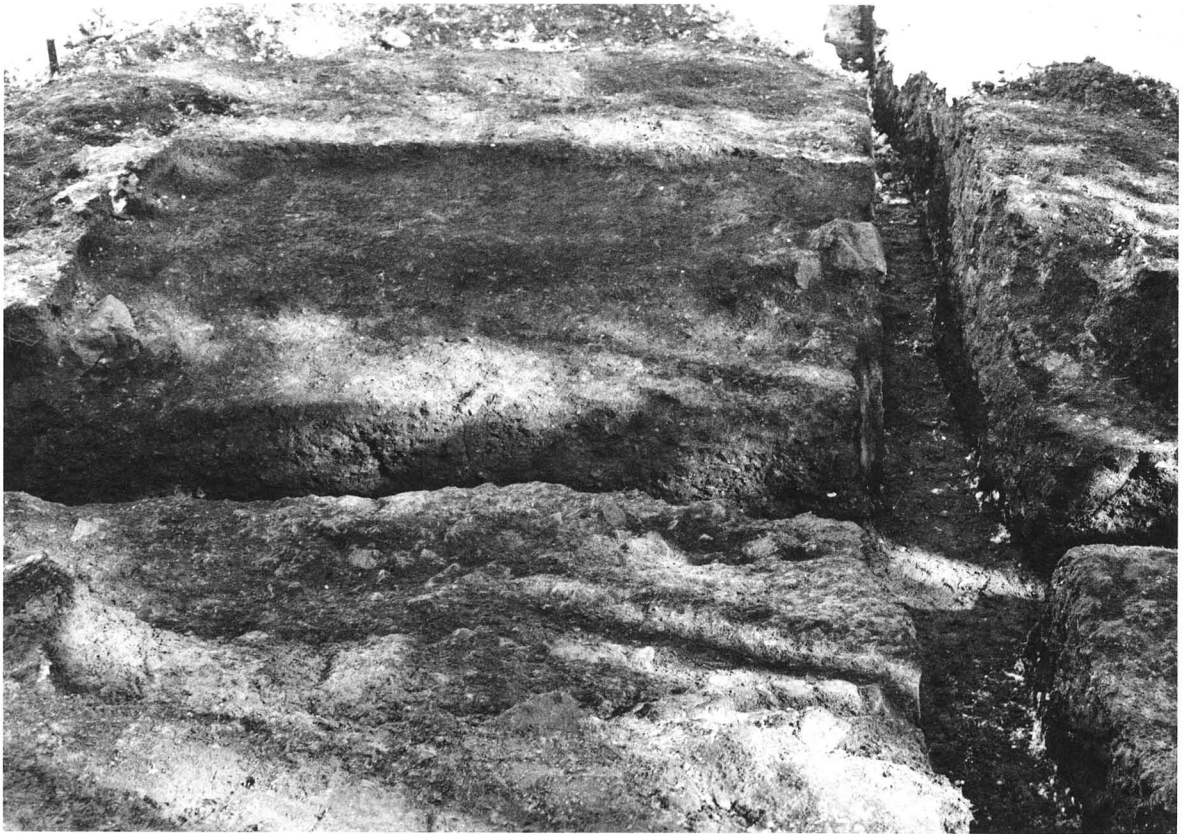
主体部上方積石（西より）



主体部積石（東より）



主体部積石（北より）



主体部発掘前近景（西より）



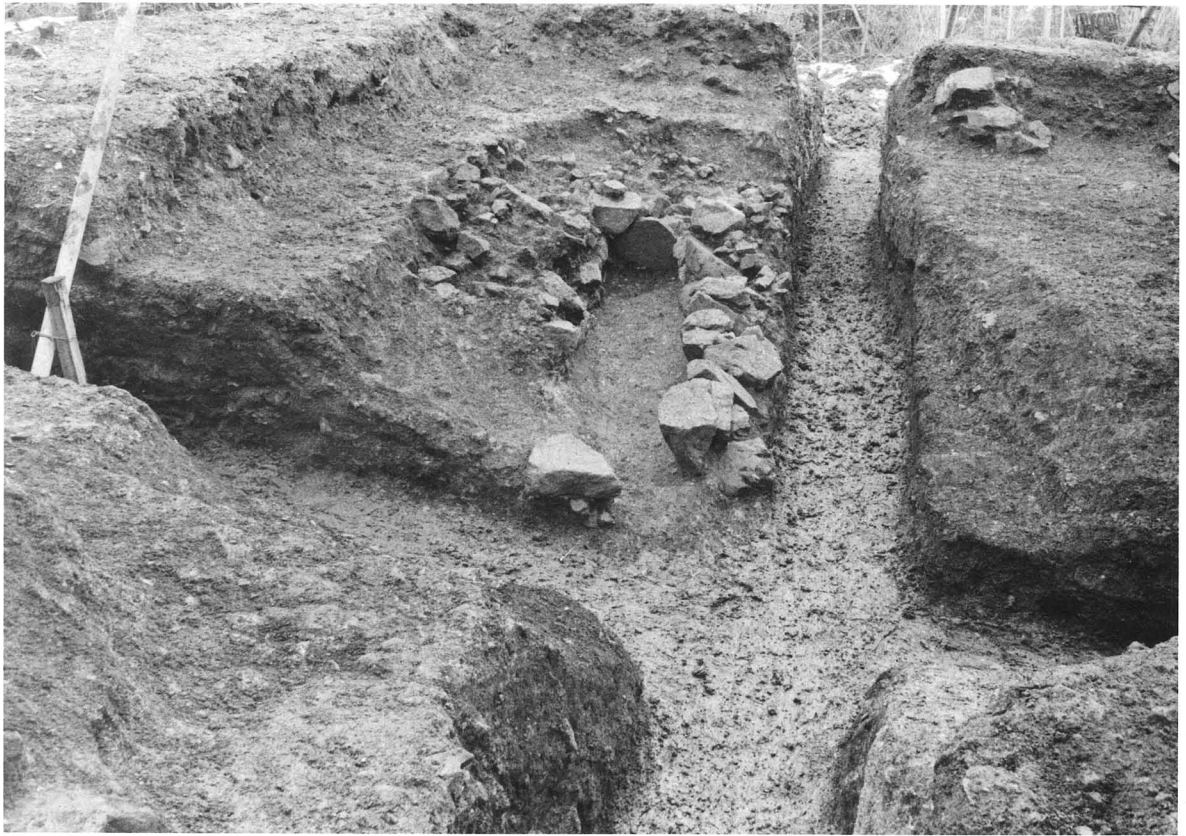
主体部上積石近景（西より）



主体部上方積石近景（東より）



主体部上方積石近景（北より）



竪穴式石室全景（南より）



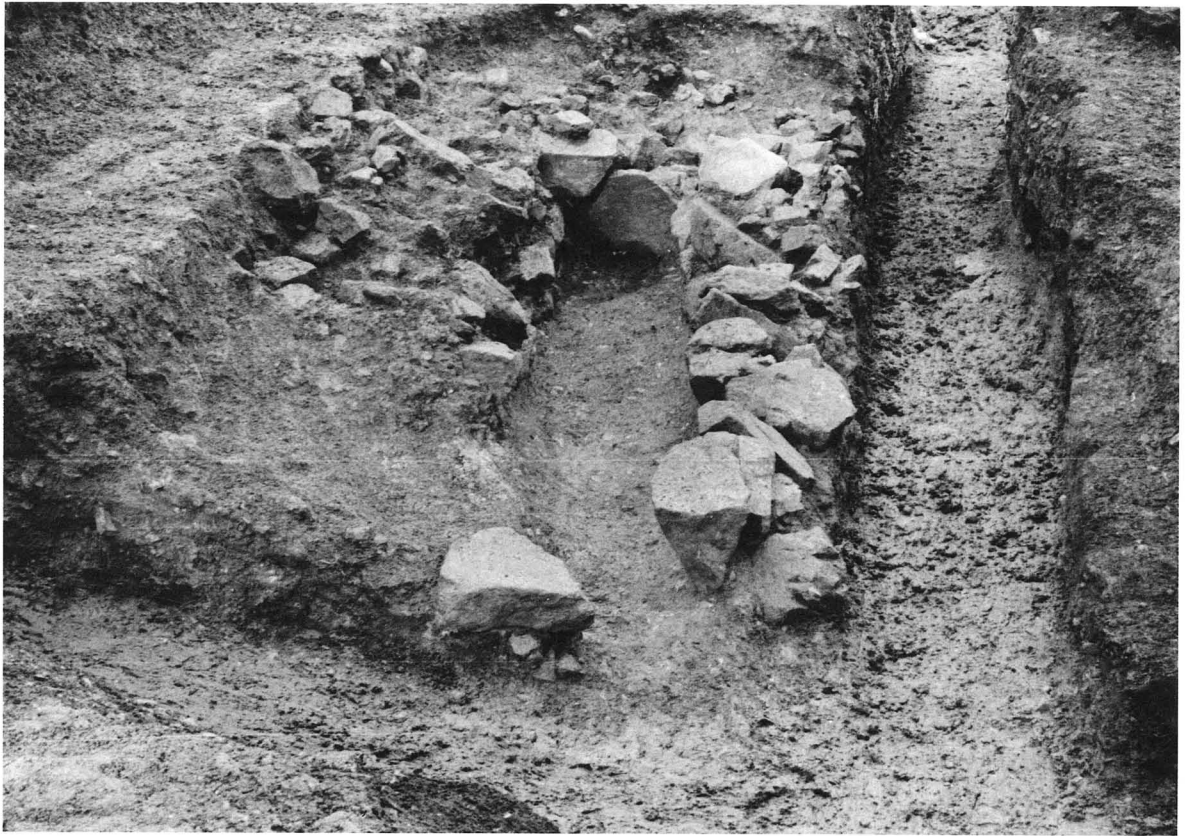
竪穴式石室全景（北より）



竪穴式石室全景（東より）



竪穴式石室全景（西より）



竪穴式石室近景（南より）



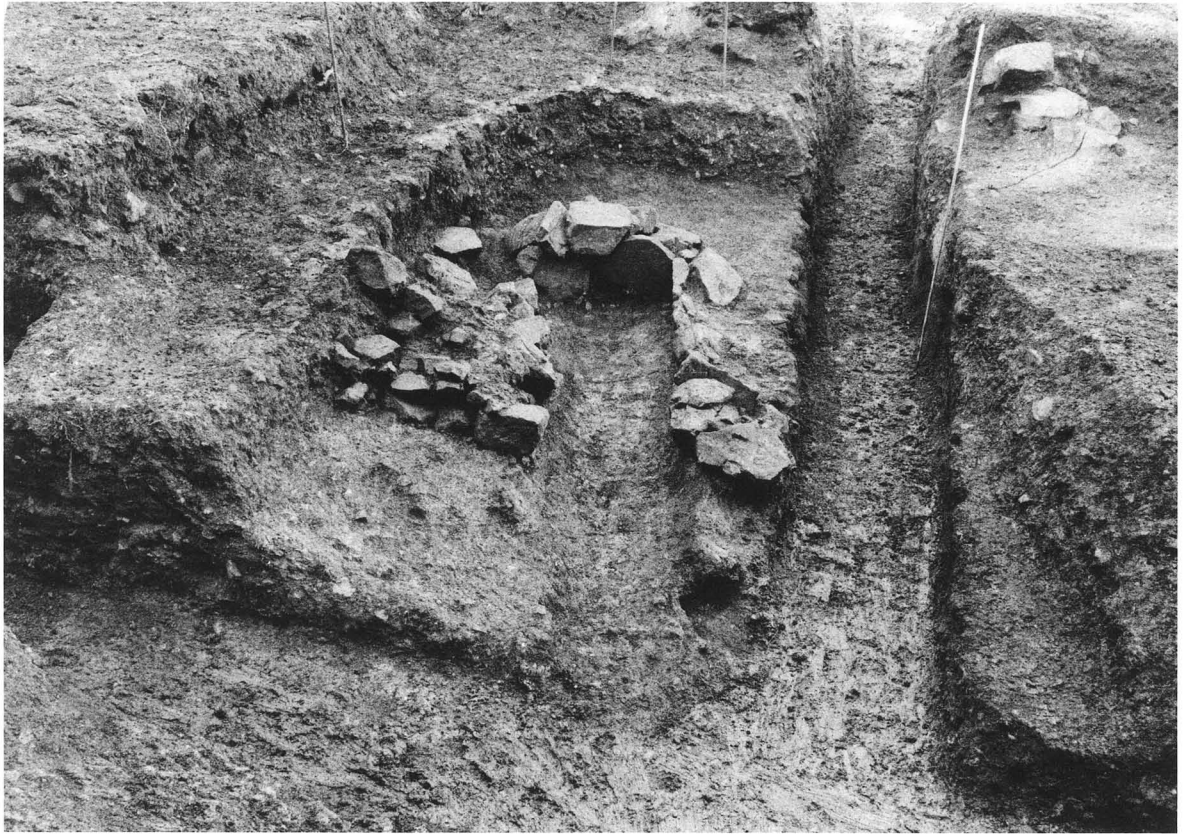
竪穴式石室近景（北より）



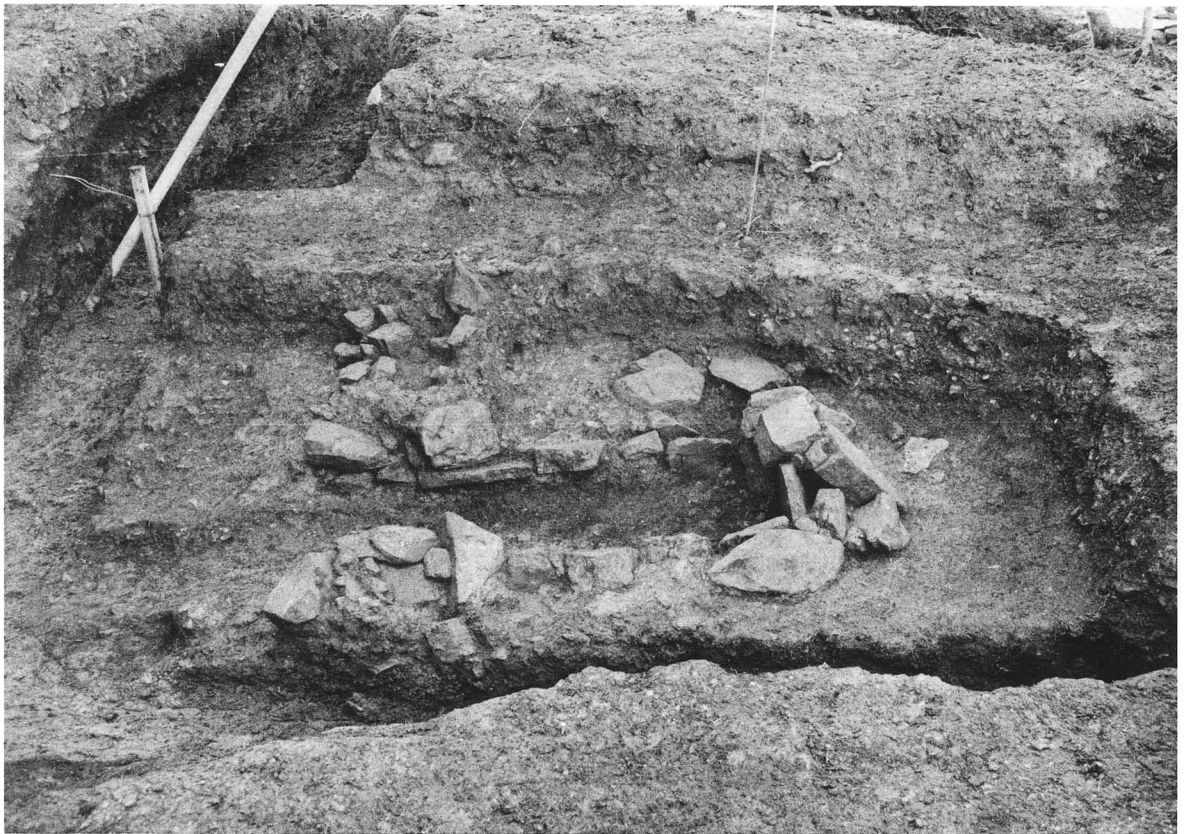
竪穴式石室近景（東より）



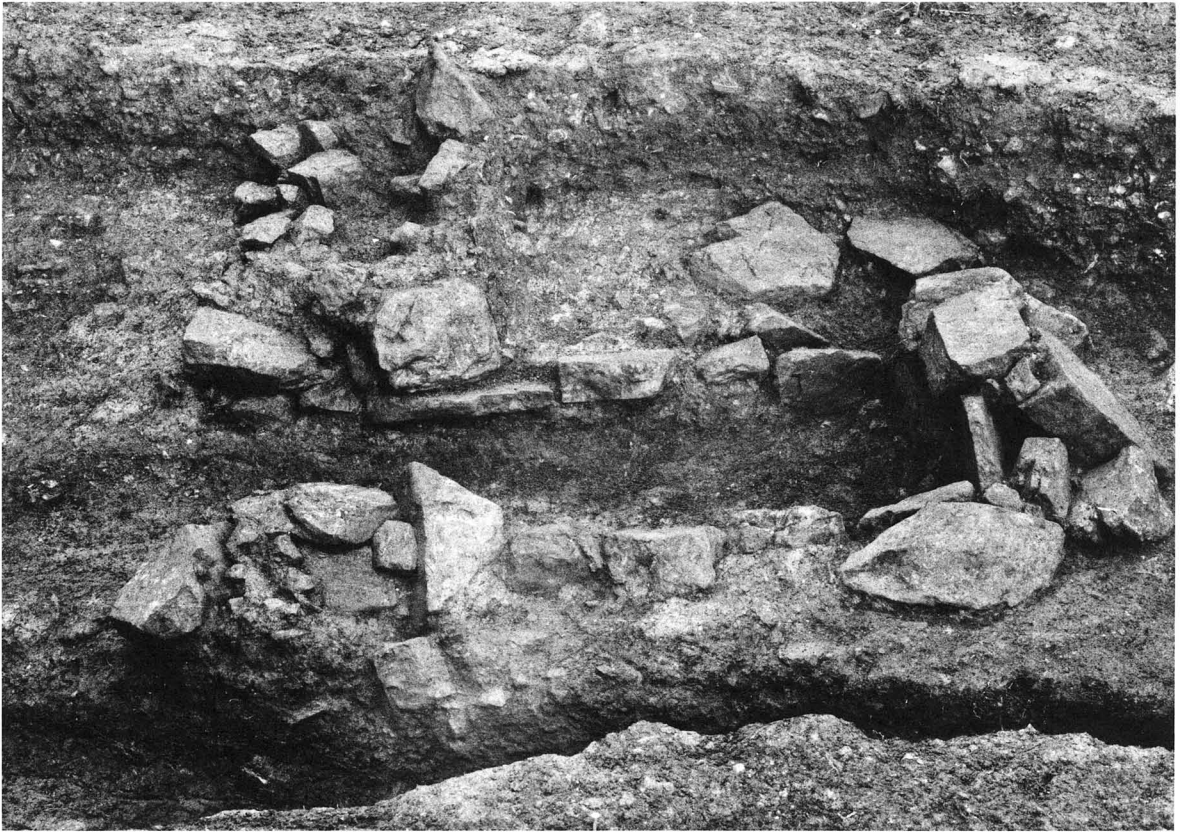
竪穴式石室近景（西より）



竪穴式石室基底部（南より）



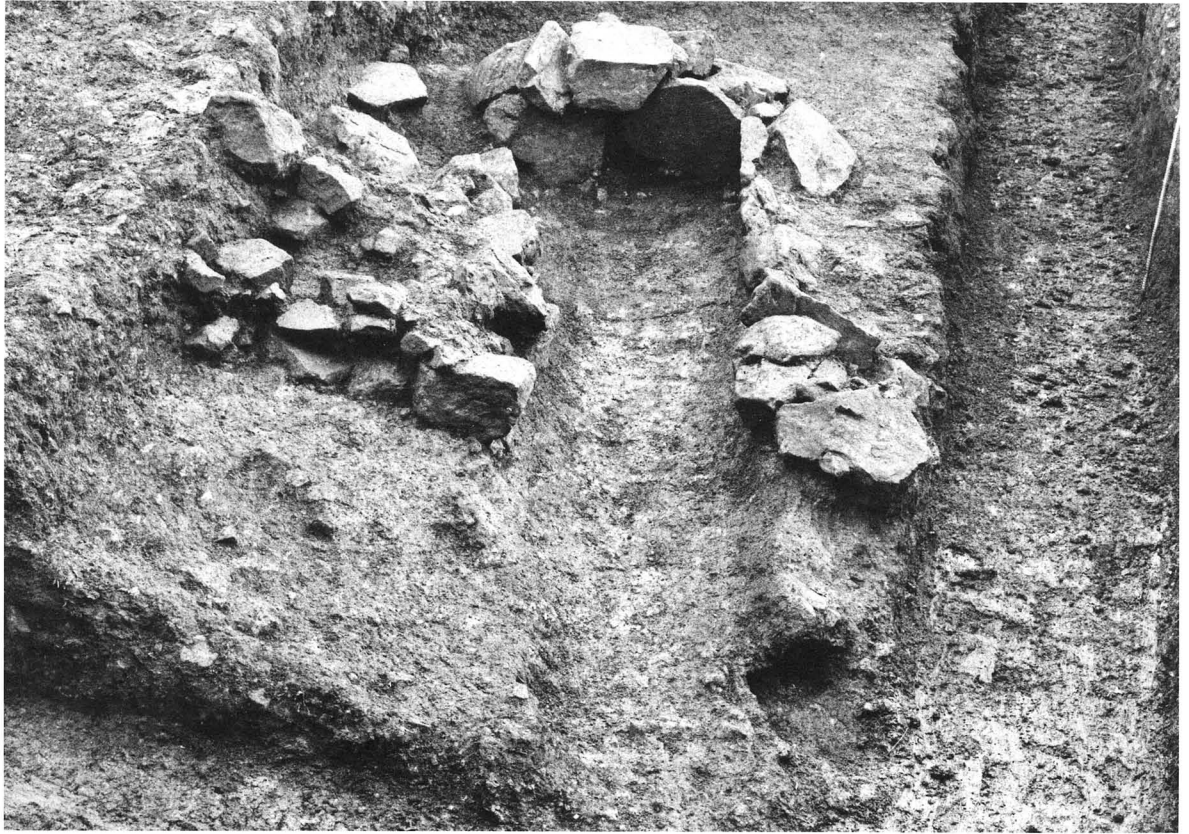
竪穴式石室基底部（東より）



竪穴式石室基底部近景（東より）



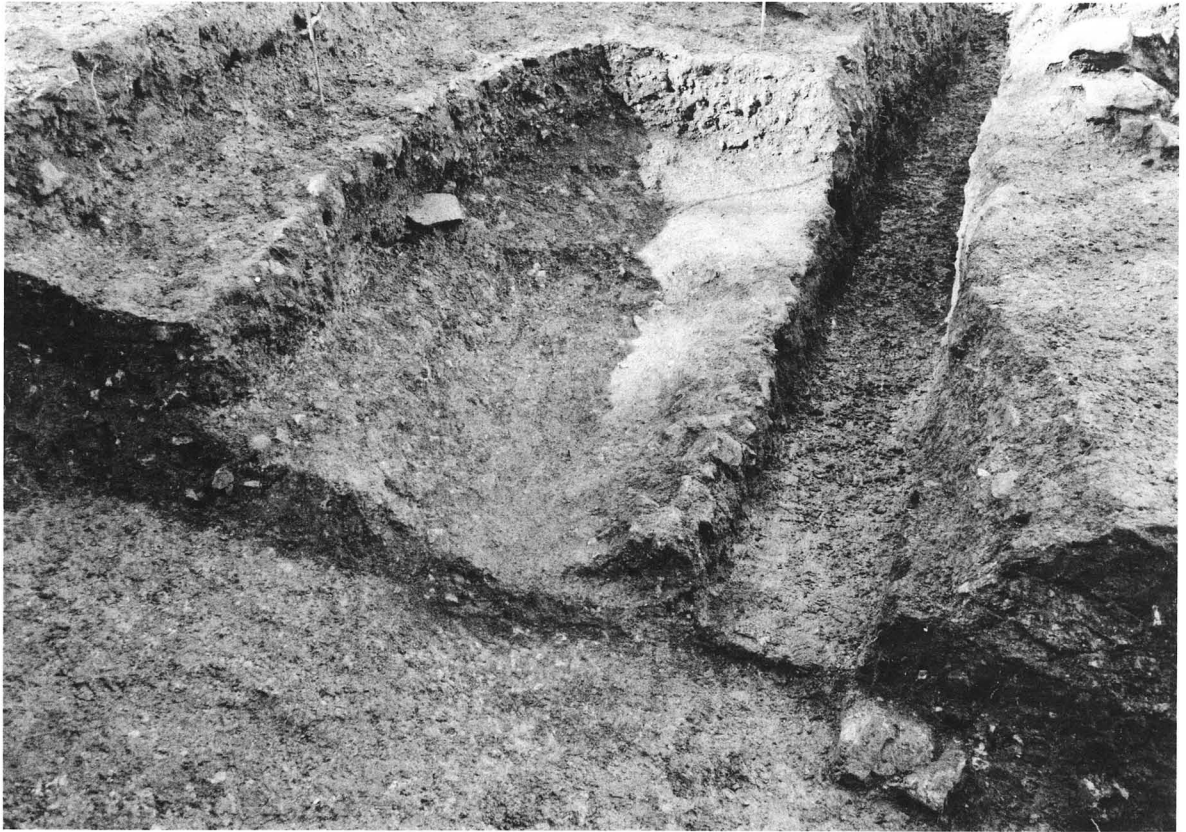
竪穴式石室基底部近景（西より）



竪穴式石室基底部（南より）



竪穴式石室基底部（西より）



竪穴式石室棺底（南より）



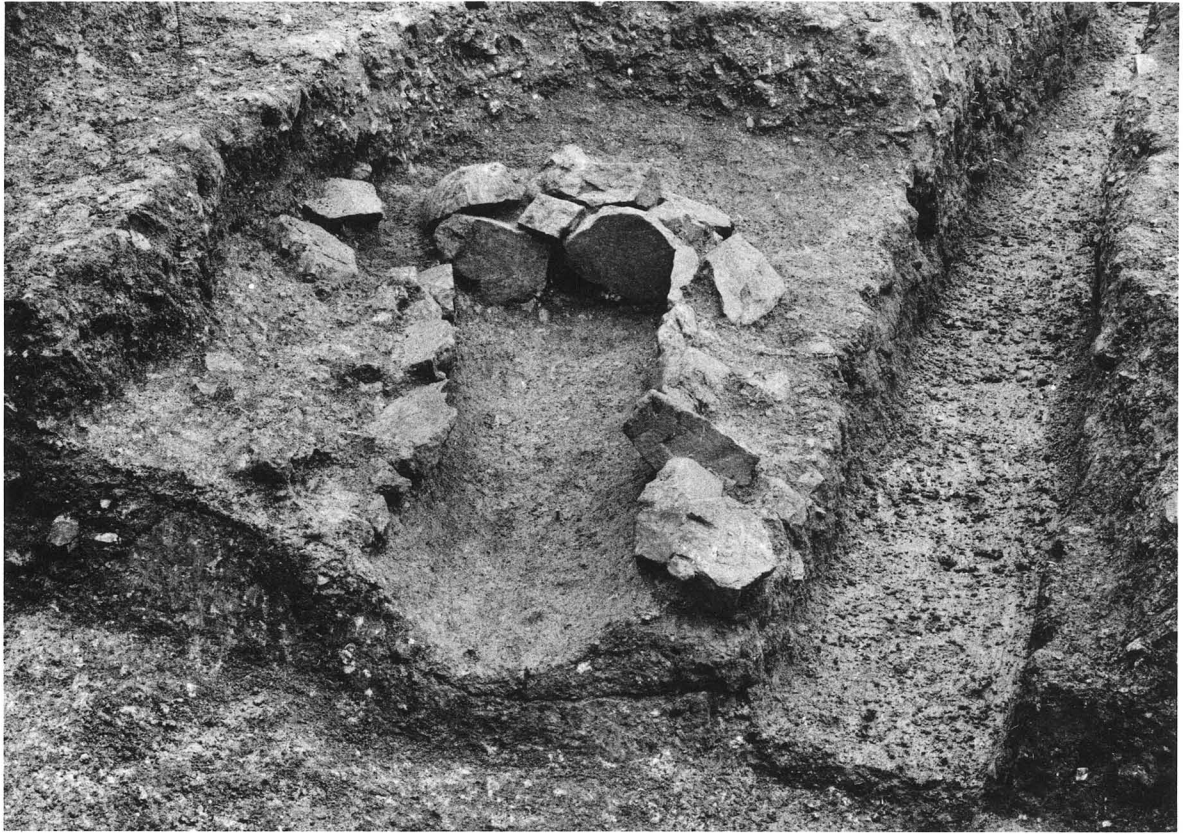
竪穴式石室横断面（南より）



竪穴式石室基底部（西より）



竪穴式石室棺底（東より）



竪穴式石室横断面 (南より)



竪穴式石室側壁後方石積状況 (南より)



竪穴式石室北半分（南より）



竪穴式石室北短側壁（南より）



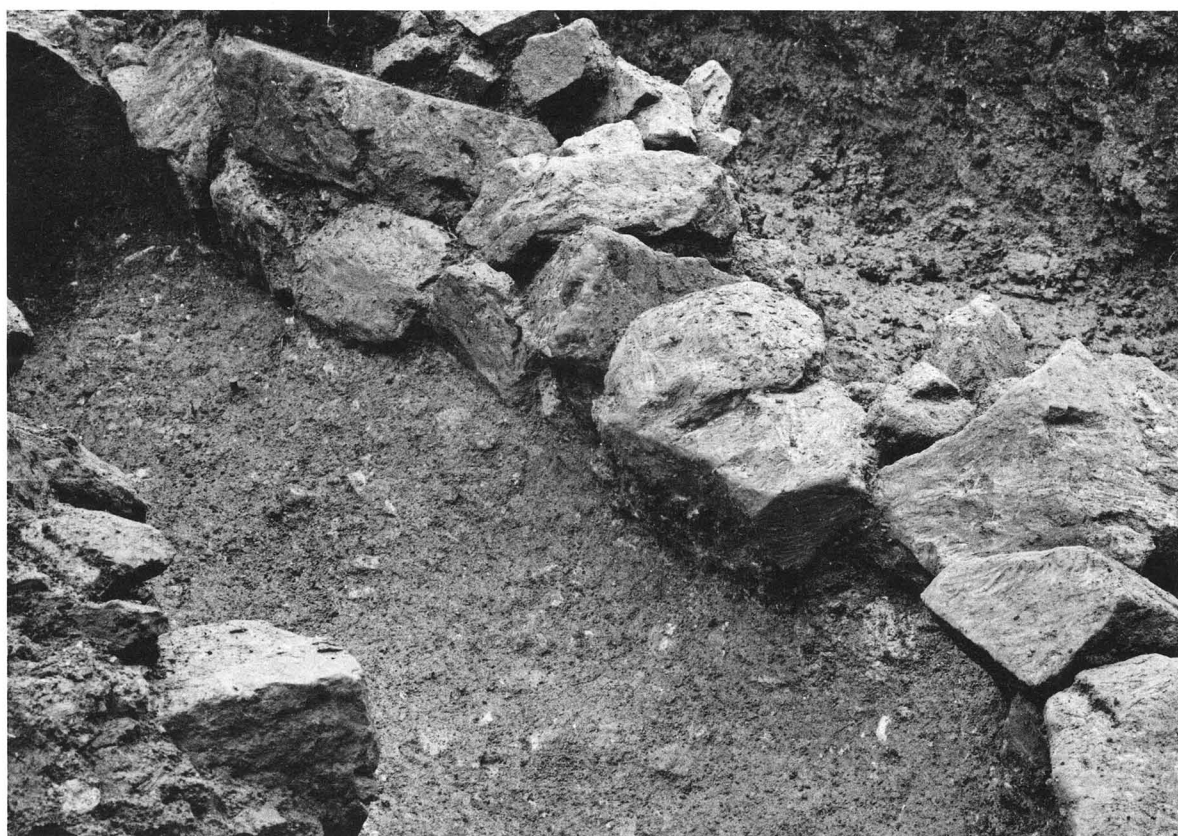
竪穴式石室北短側壁後方（北より）



竪穴式石室北短側壁横断面（東より）



竪穴式石室西側壁（南東より）



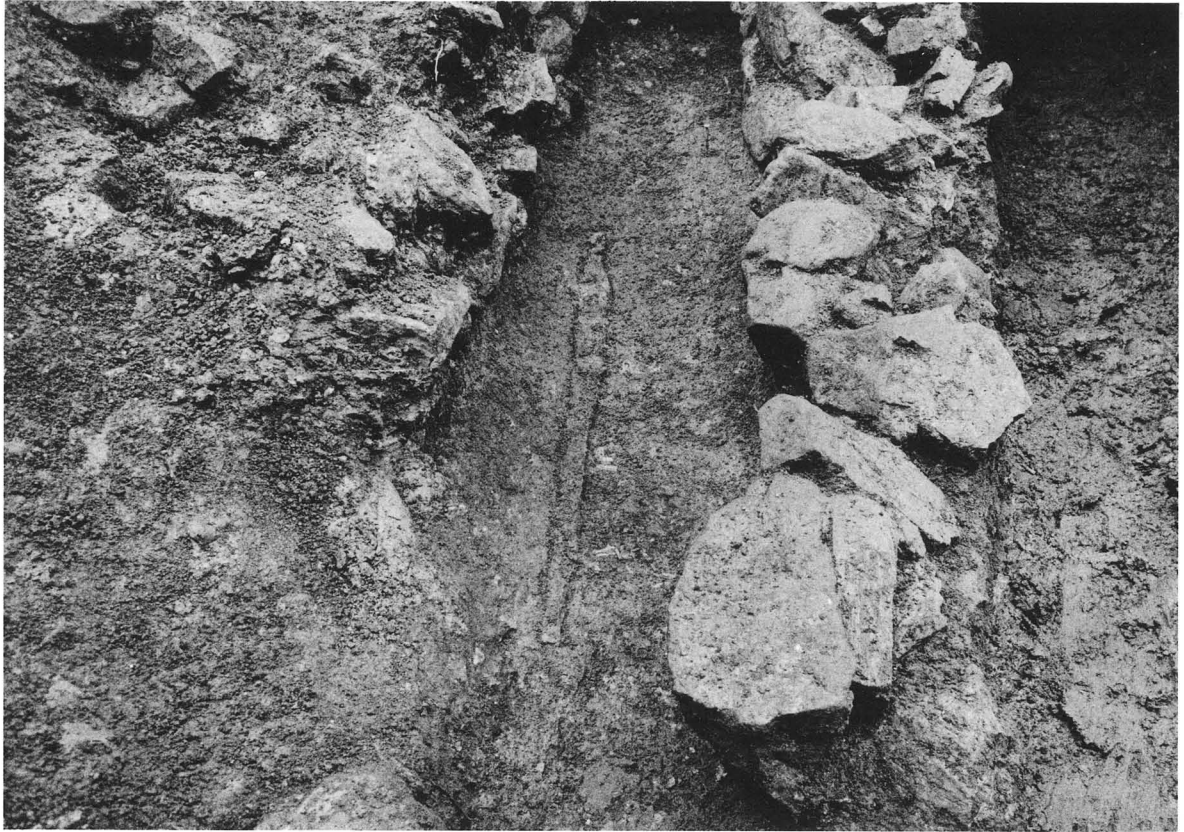
竪穴式石室東側壁（南西より）



竪穴式石室西側壁近景（南東より）



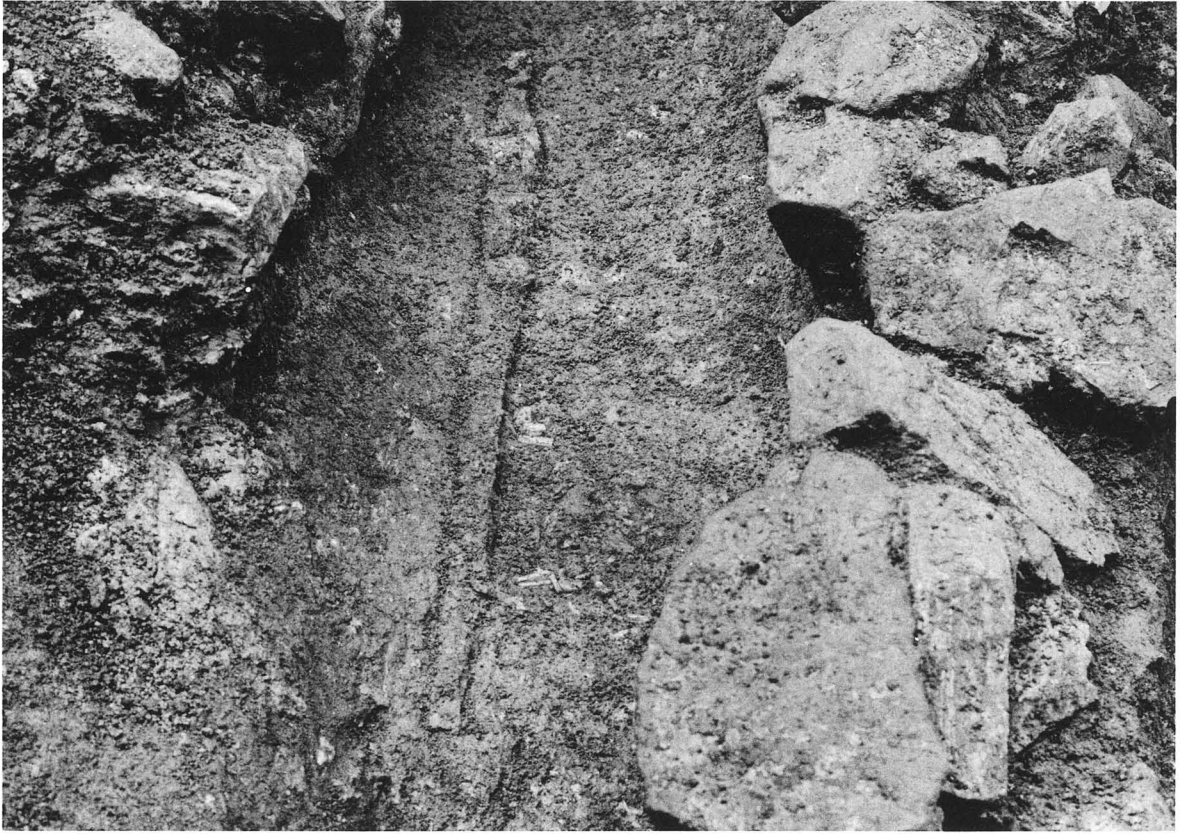
竪穴式石室東側壁近景（南西より）



副葬品出土状態（南より）



副葬品出土状態（北より）



副葬品出土状態（南より）



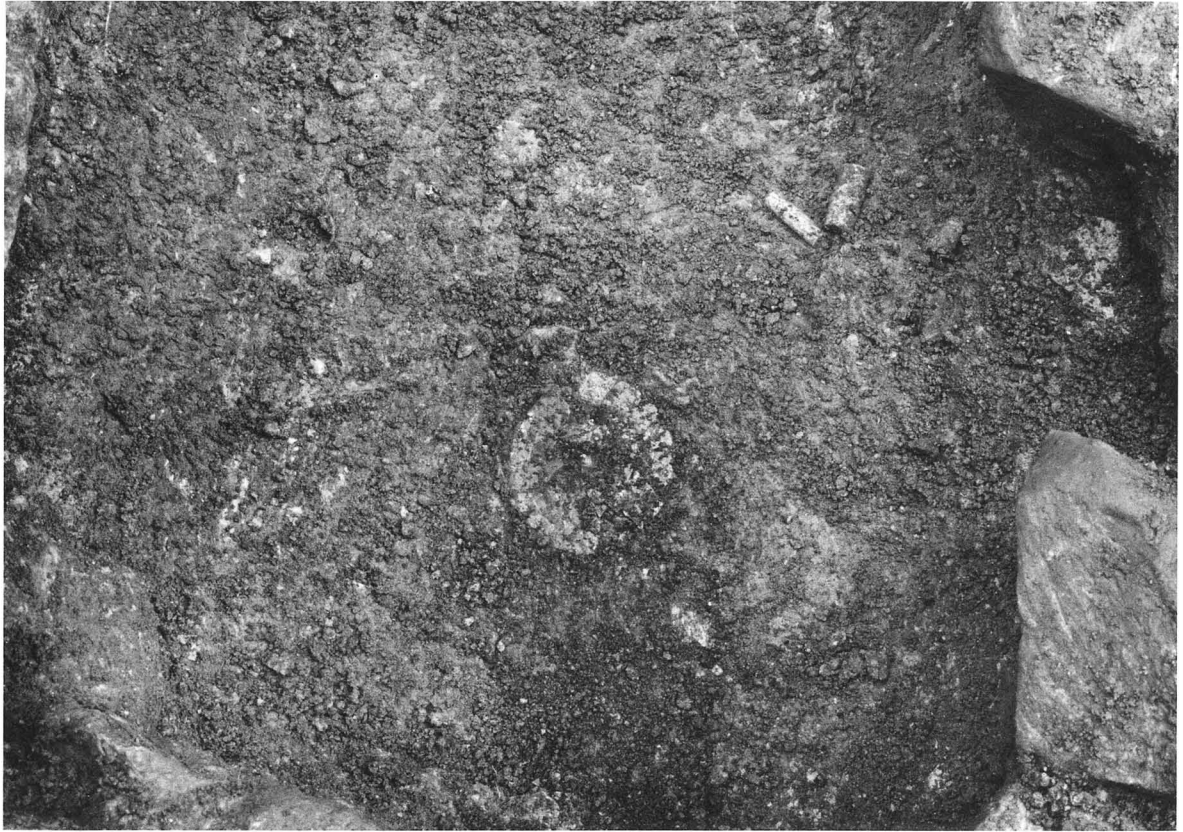
副葬品出土状態（北より）



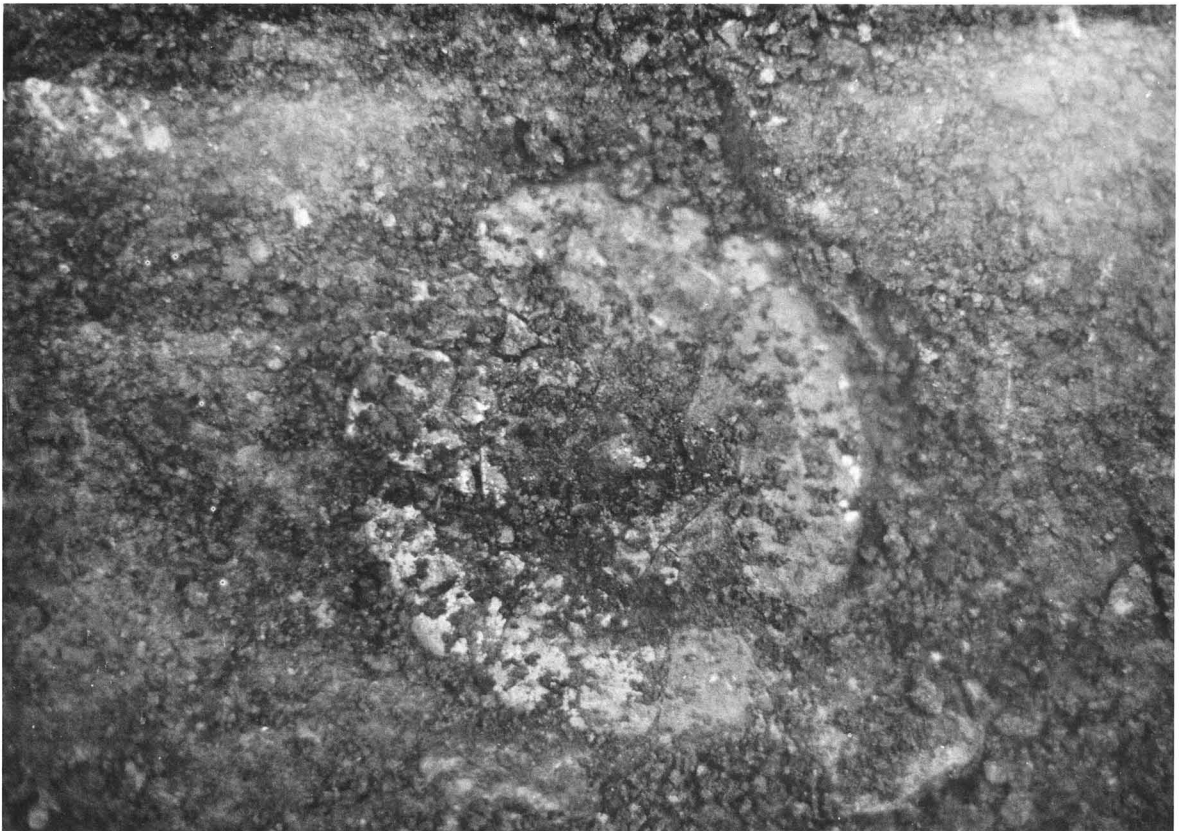
玉類（首飾り・腕輪）出土状態（北より）



玉類（首飾り・腕輪）鏡出土状態（南より）



鏡・玉類（首飾り）出土状態（南より）



鏡出土状態（北より）



玉類（首飾り）出土状態（南より）



玉類（首飾り）出土状態（北より）



玉類（首飾り）出土状態（南より）



玉類（首飾り）出土状態（南より）



玉類（首飾り）出土状態（東より）



玉類（首飾り）出土状態（北より）



玉類（腕輪）出土状態（北より）



玉類（右腕輪）出土状態（北より）



玉類（左腕輪）出土状態（北より）



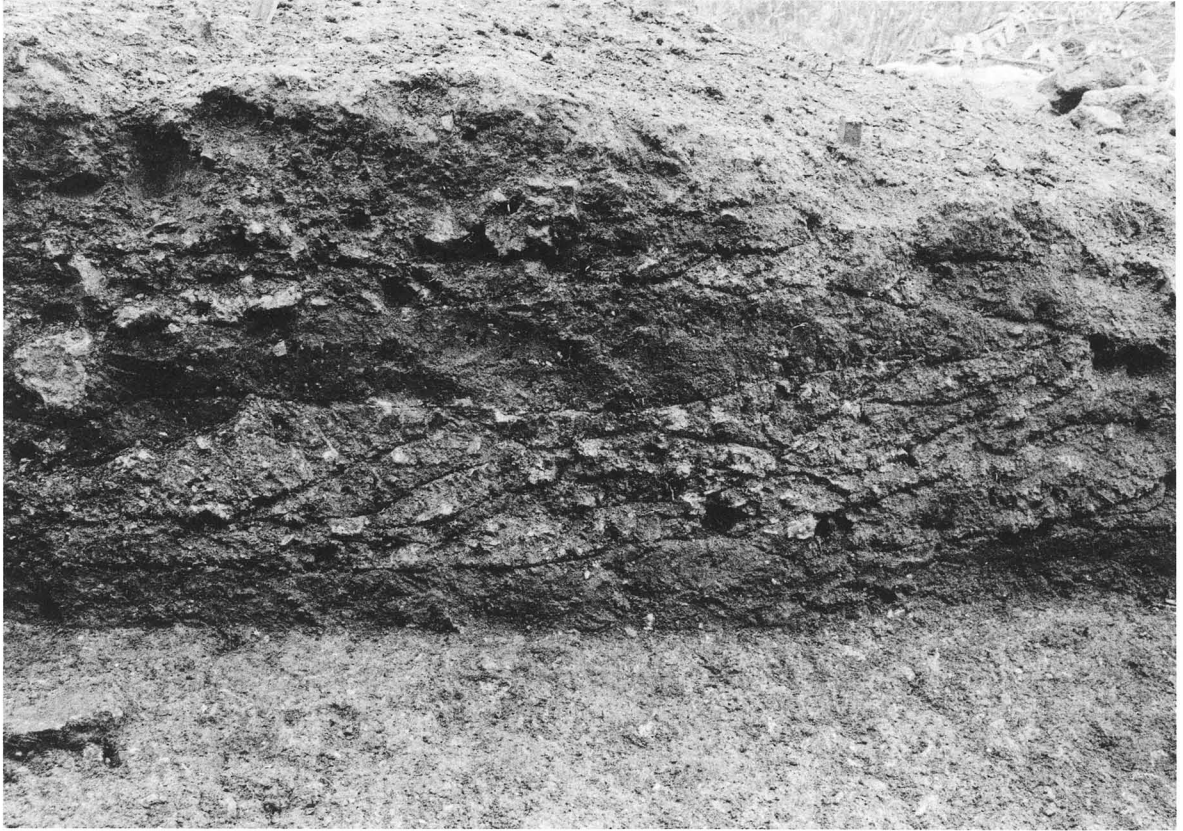
刀子出土状態



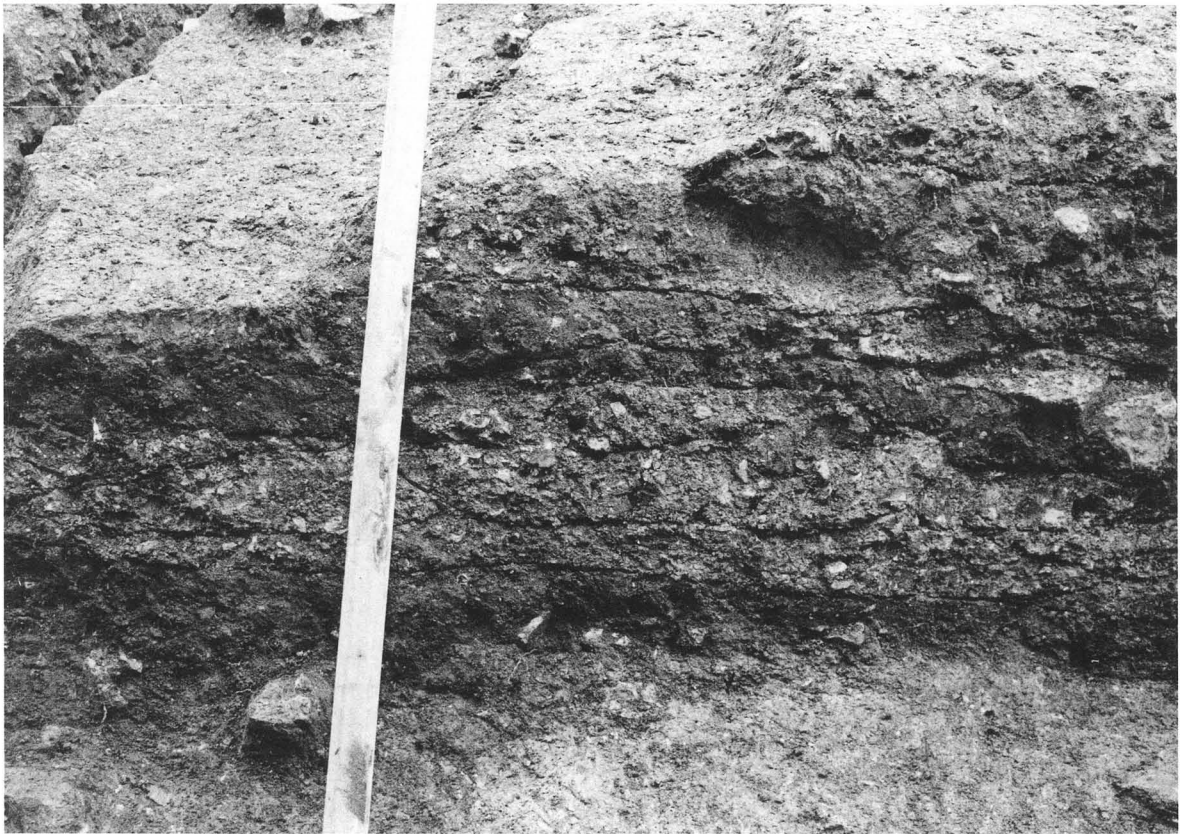
須惠器跡出土状態



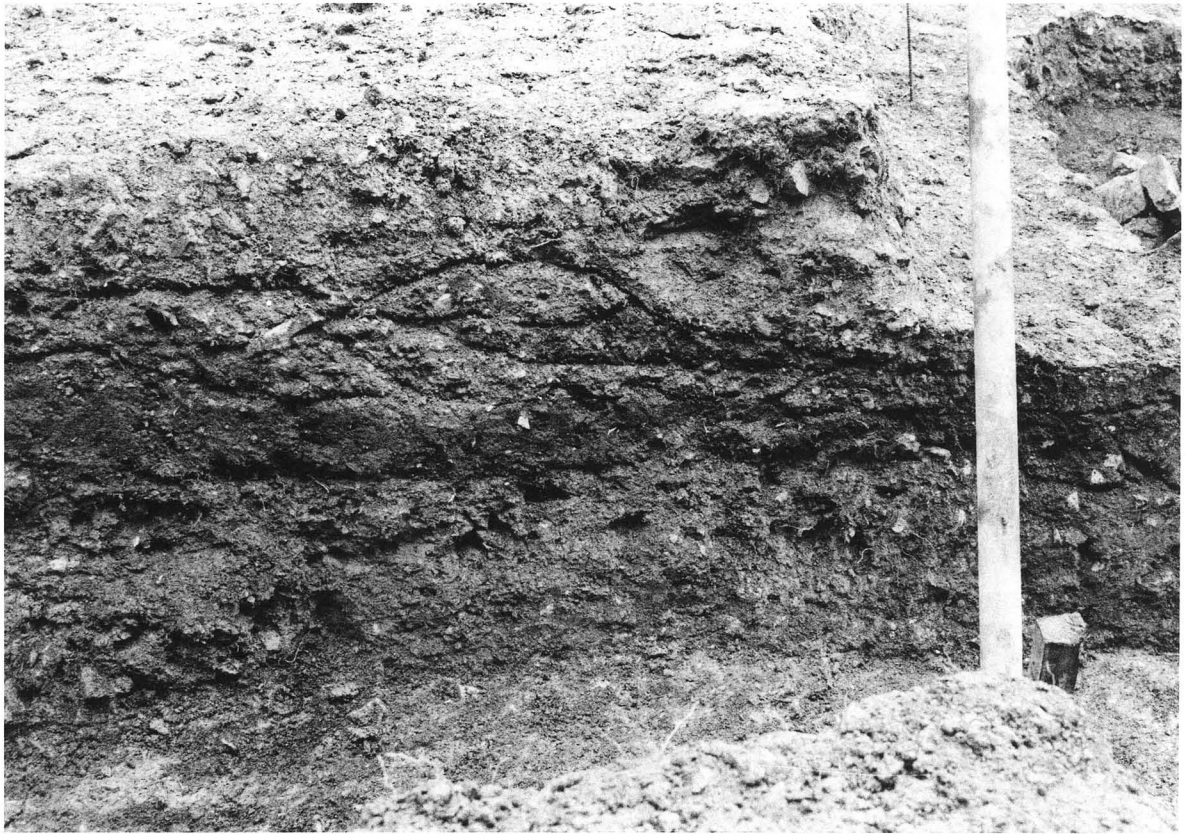
須惠器跡出土状態近景



墳丘断面土層1 (南より)



墳丘断面土層2 (南より)



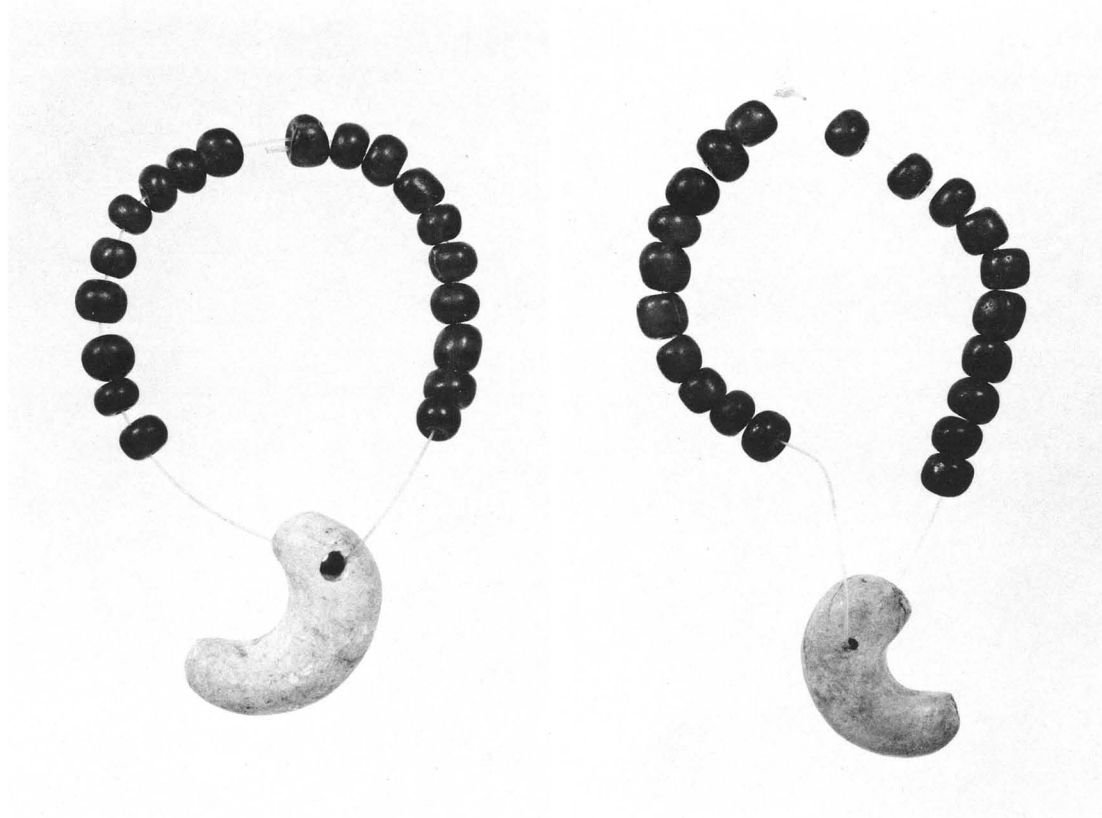
墳丘断面土層 3 (東より)



墳丘断面土層 4 (東より)

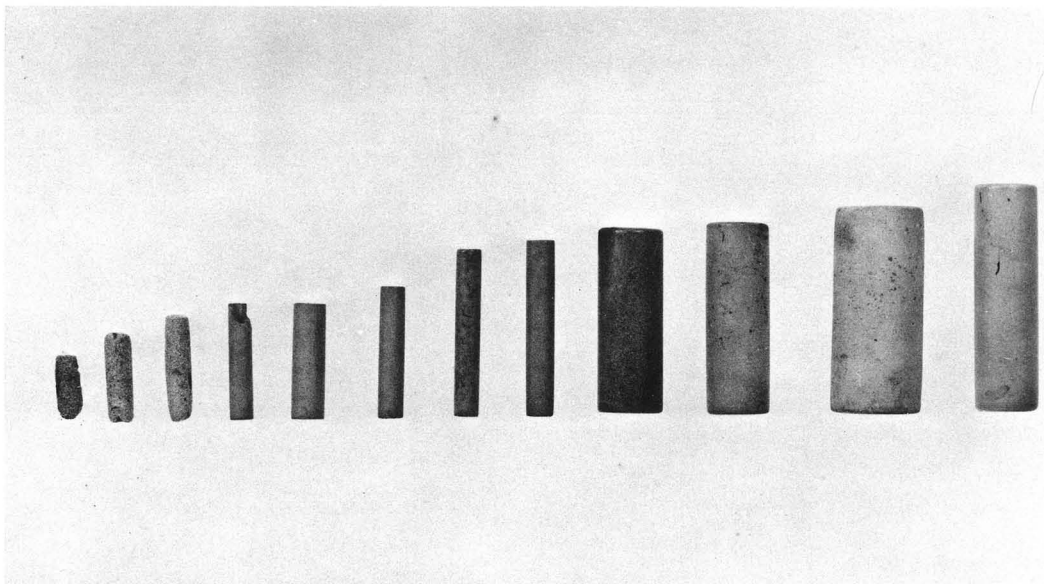
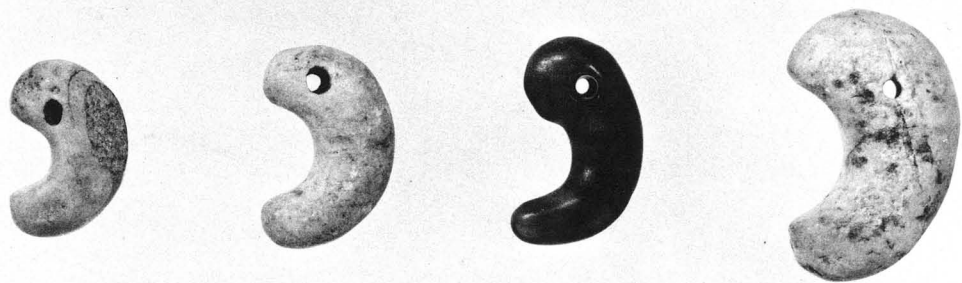


首飾



右腕輪

左腕輪



(上) ガラス小玉, (中) 勾玉, (下) 管玉



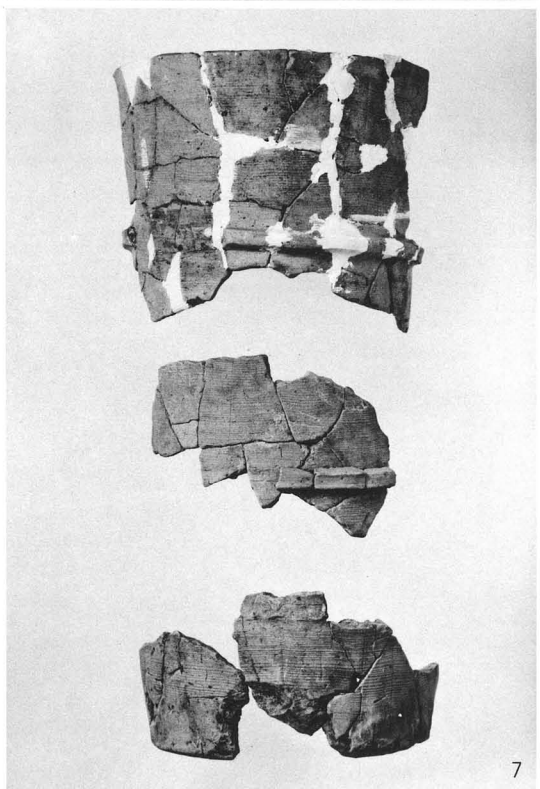
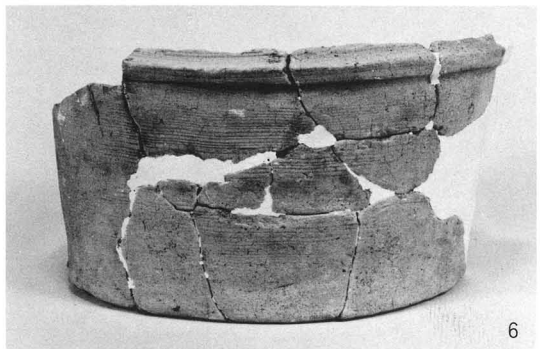
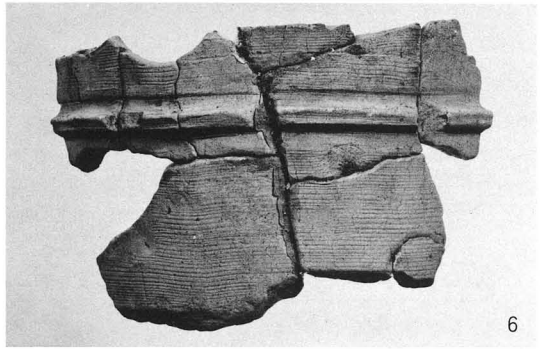
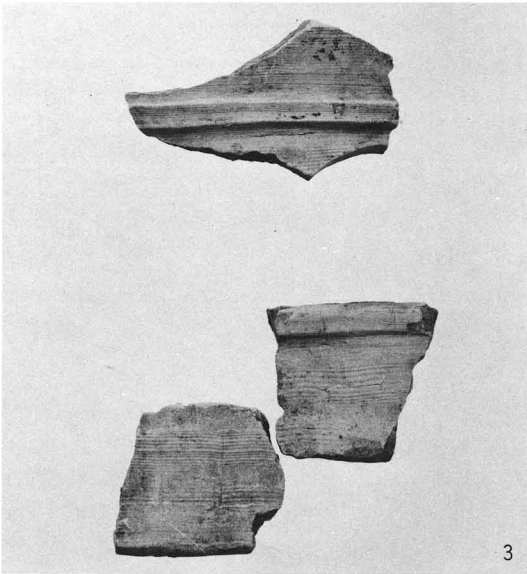
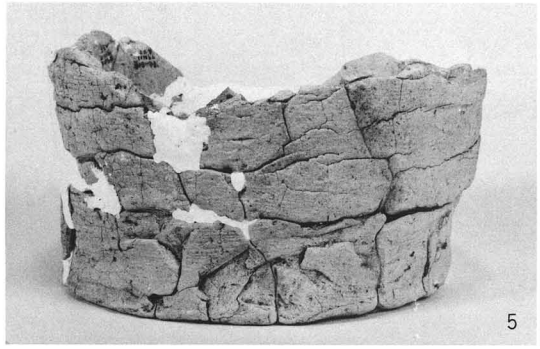
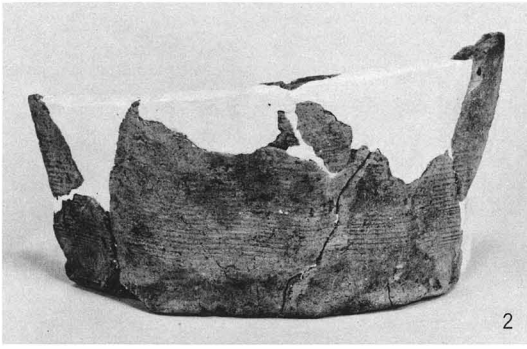
珠文鏡



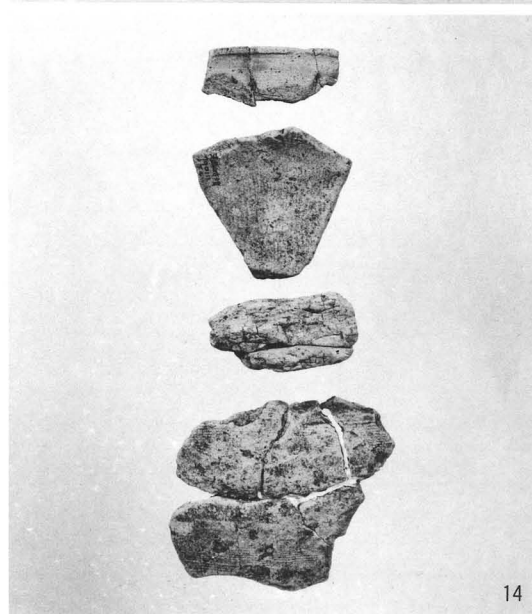
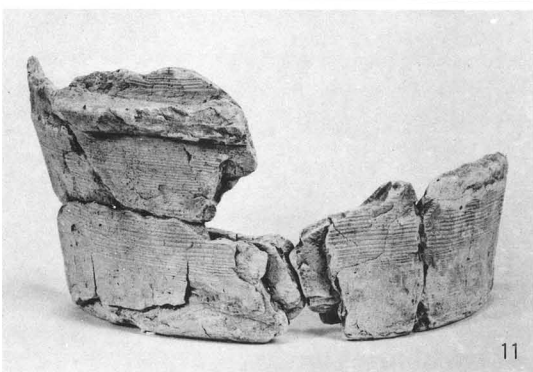
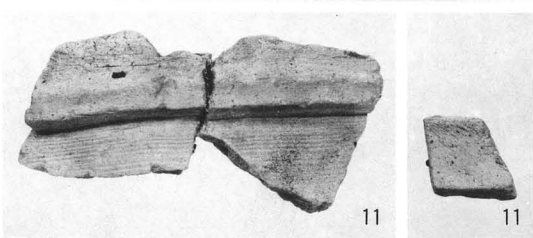
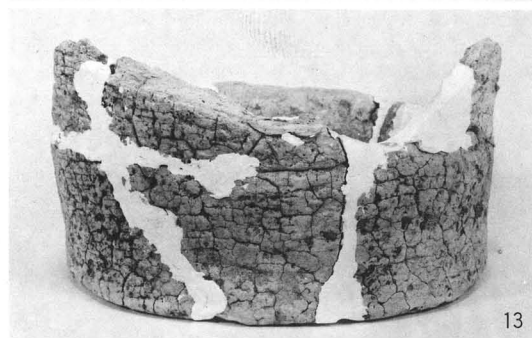
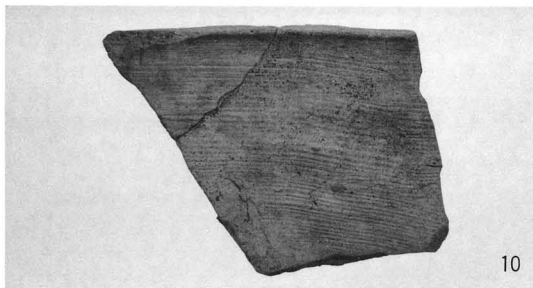
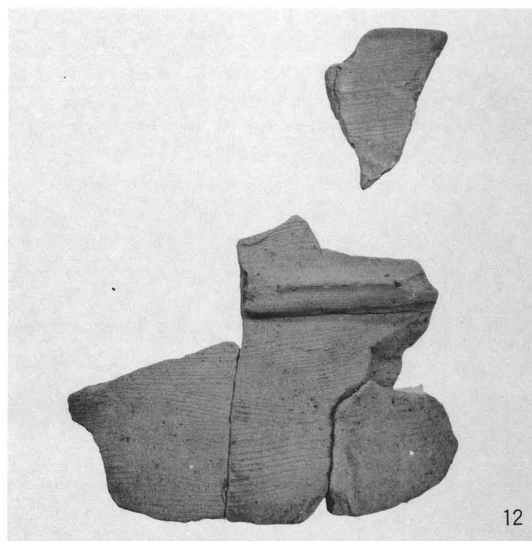
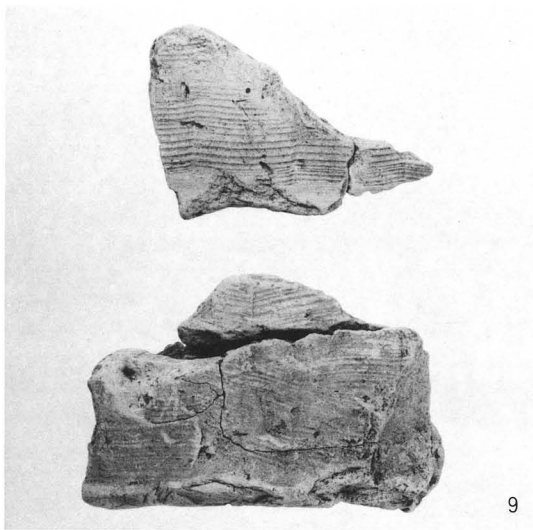
鉄刀



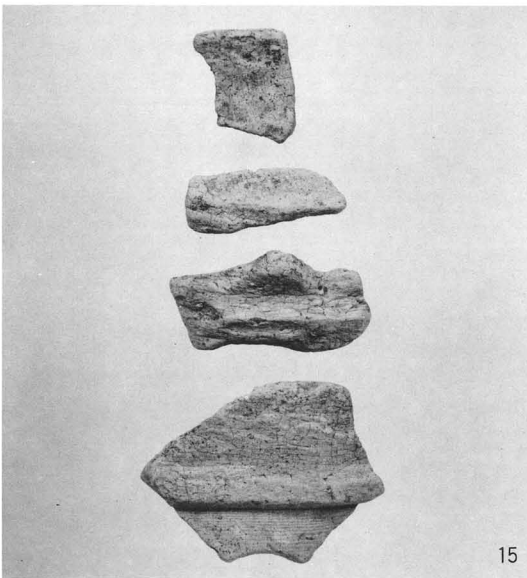
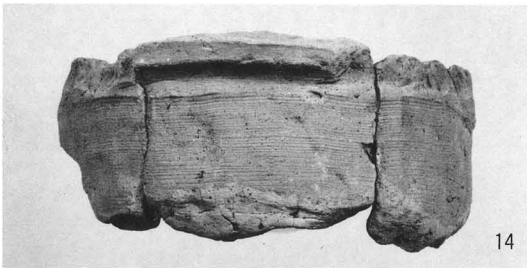
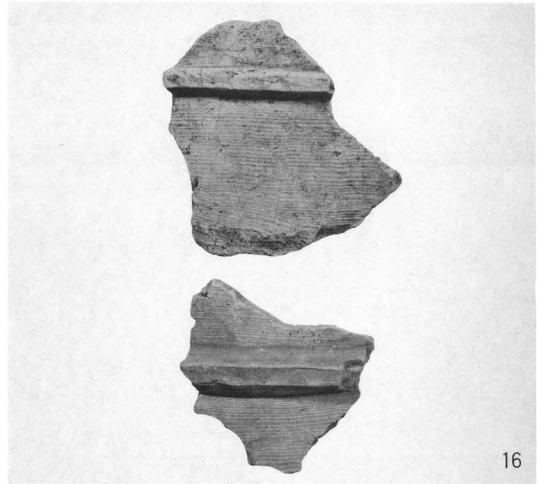
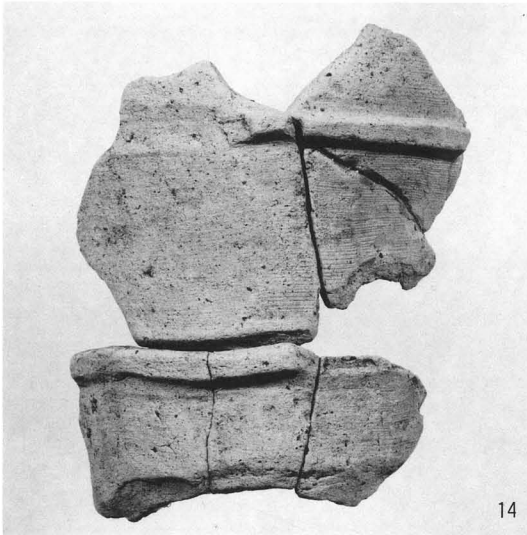
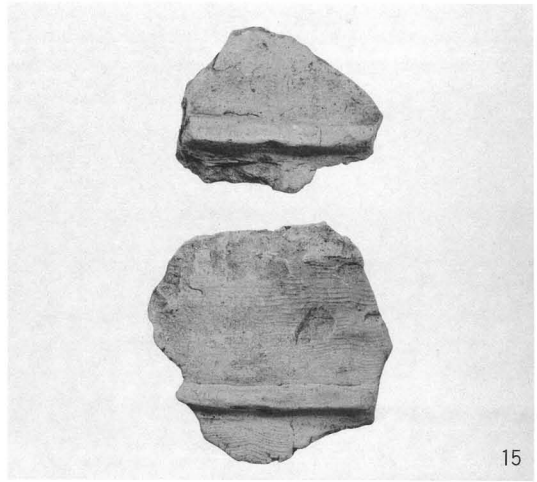
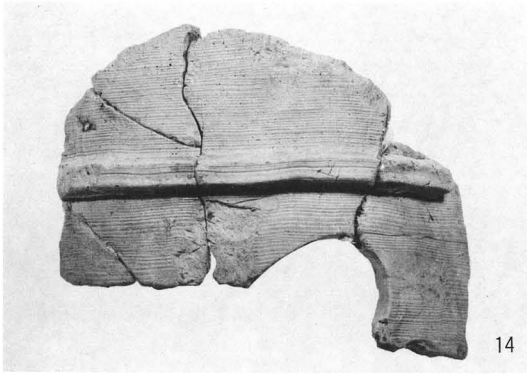
(上) 刀子, (下) 須恵器跡



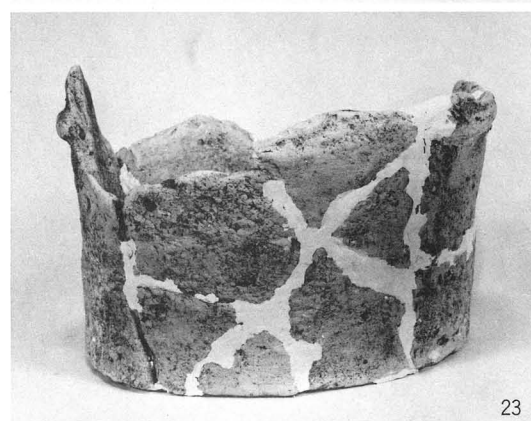
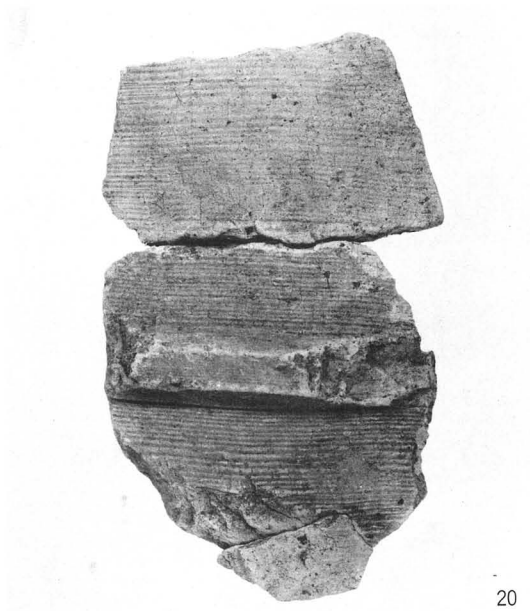
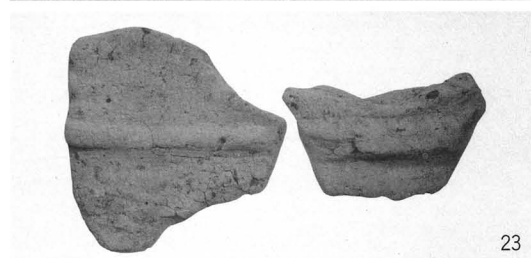
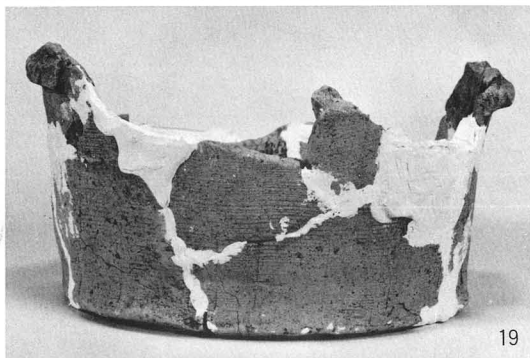
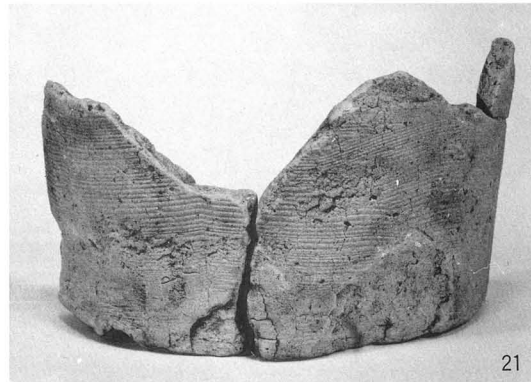
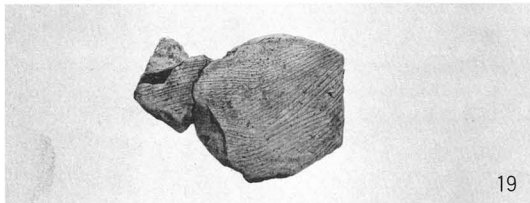
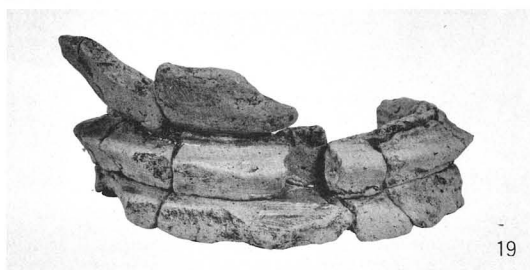
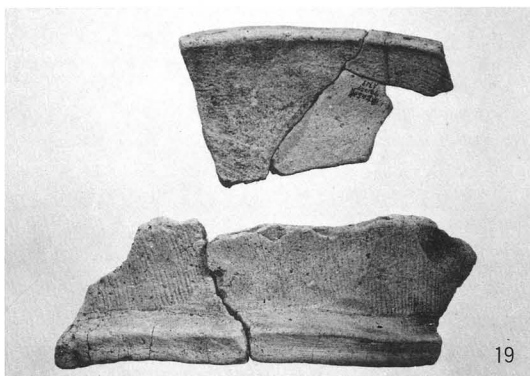
2~7号 ハニワ



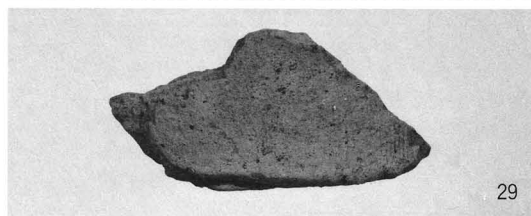
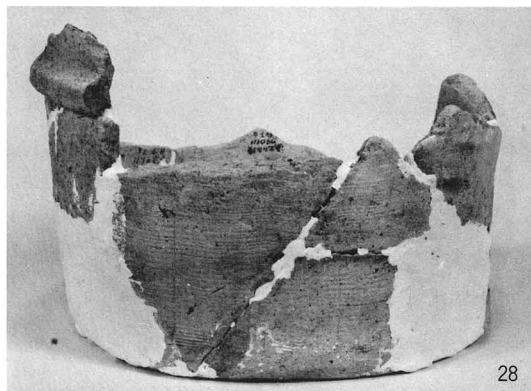
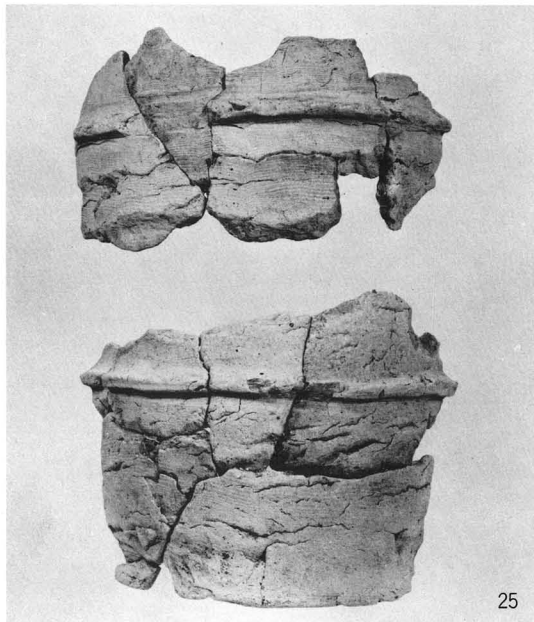
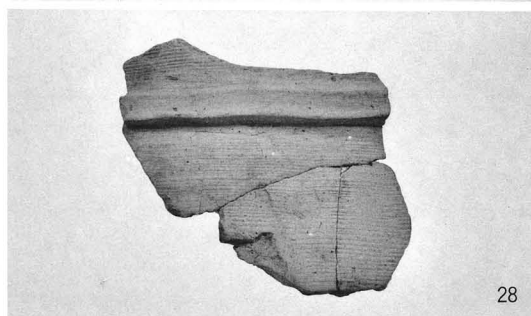
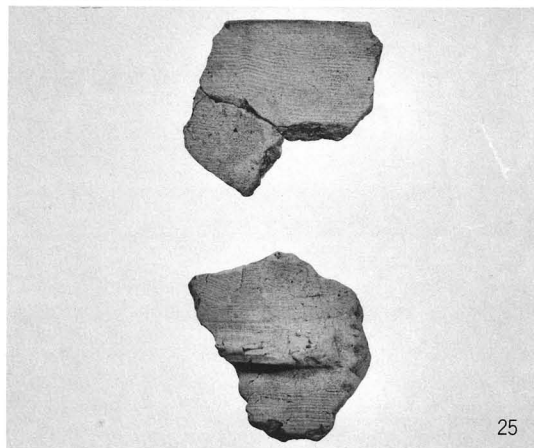
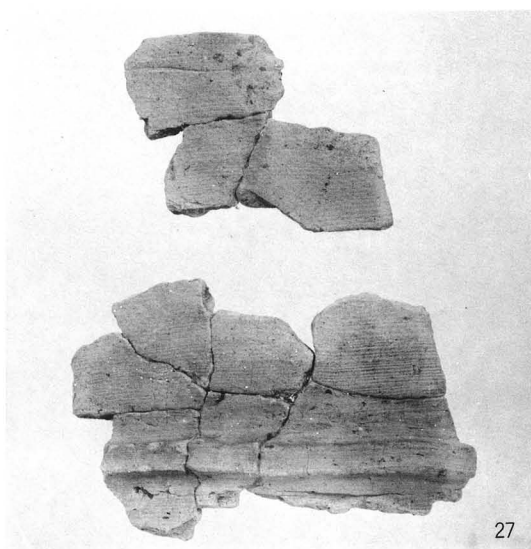
9~14号 ハニワ



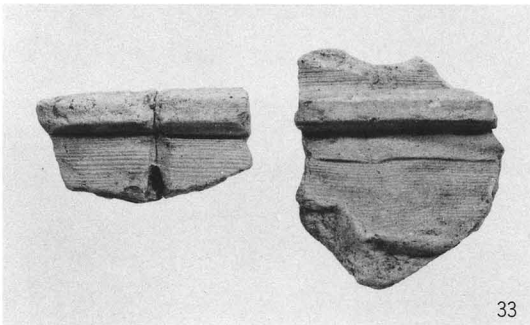
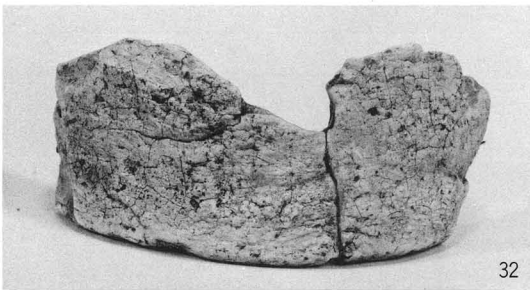
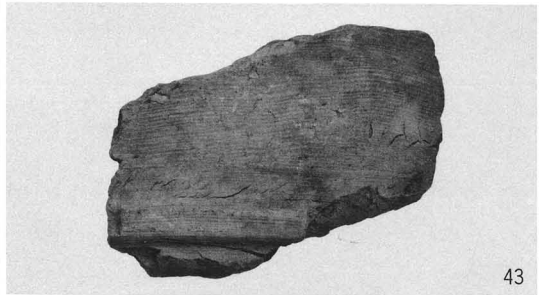
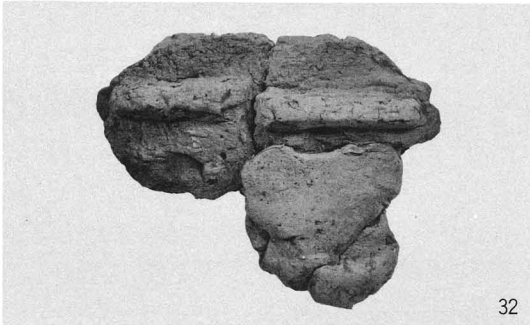
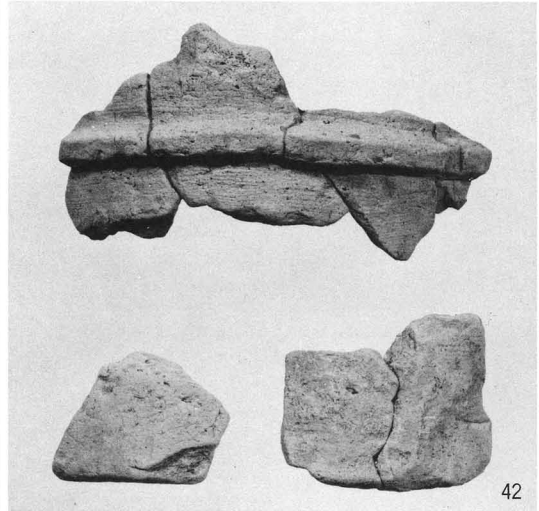
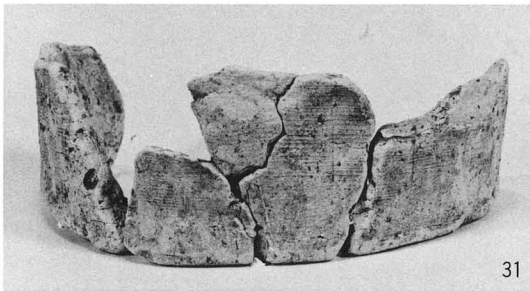
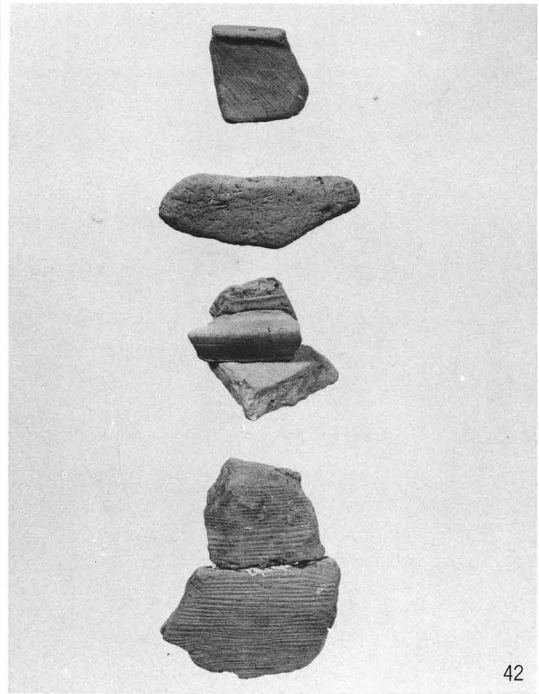
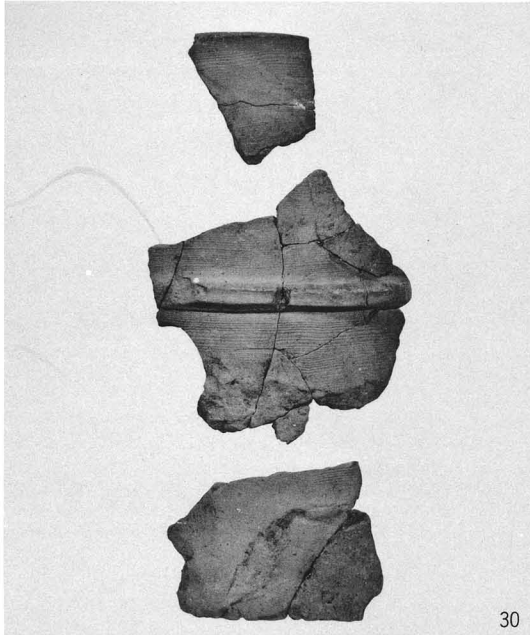
14~17号 ハニワ

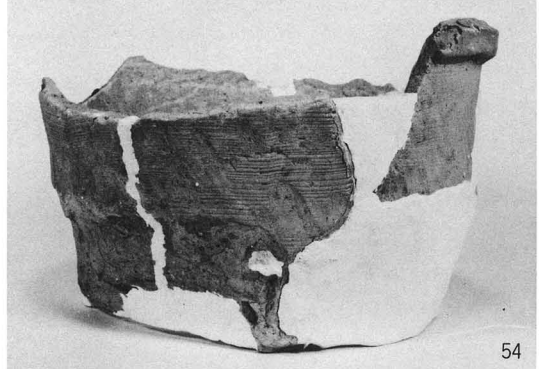
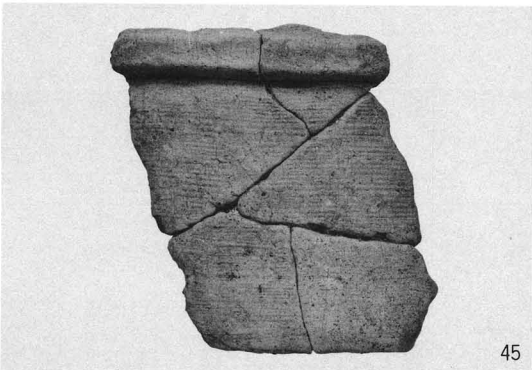
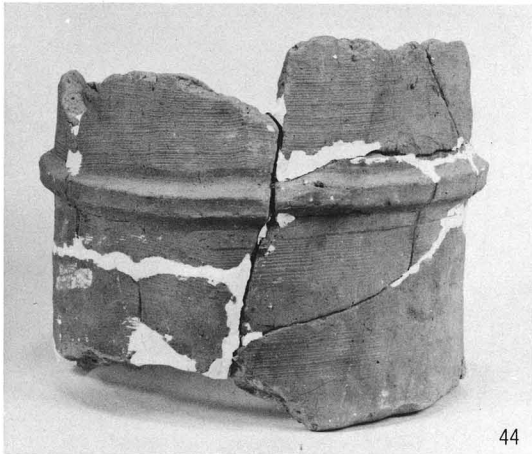
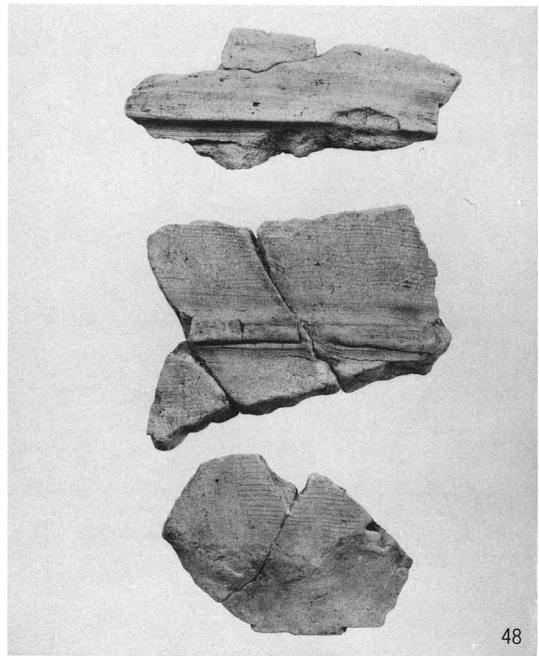
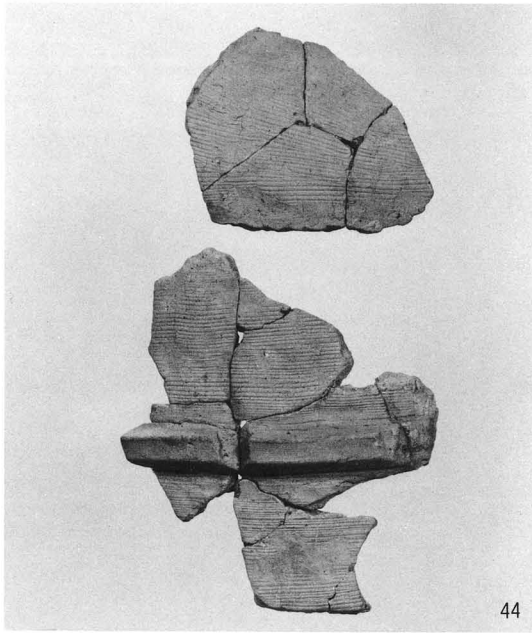


19~21・23号 ハニワ

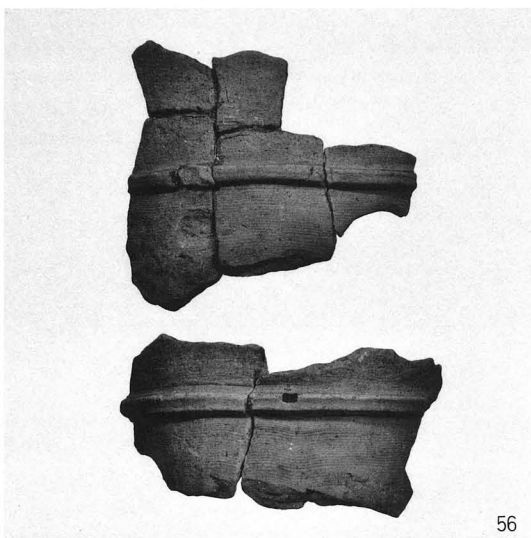


24・25・27～30号 ハニワ

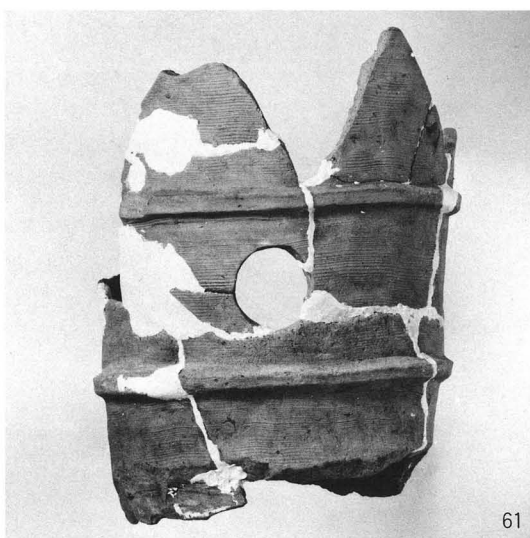




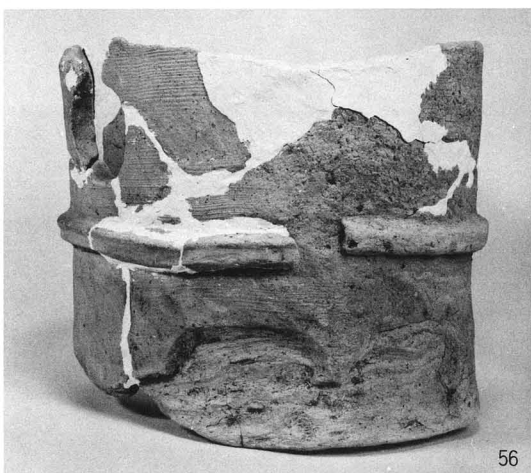
44~46・48・53~55号 ハニワ



56



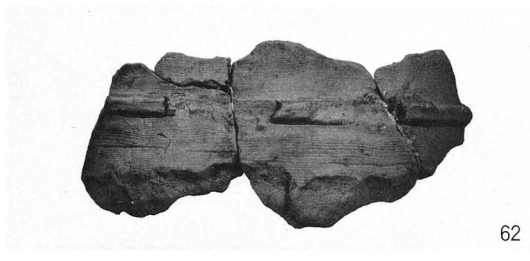
61



56



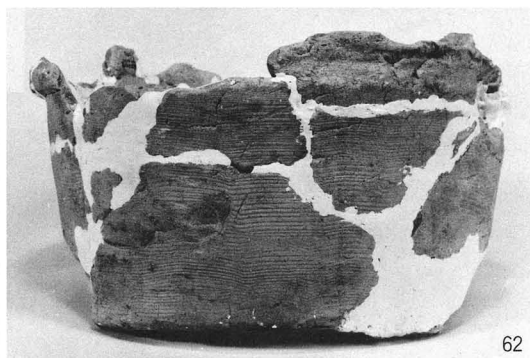
61



62



59



62



60



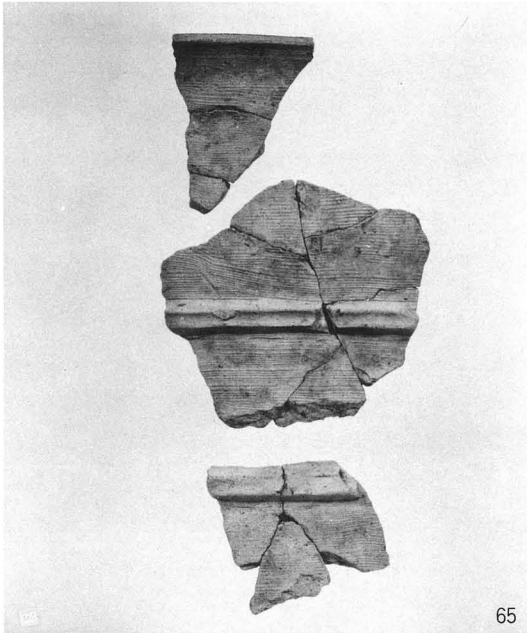
63



65



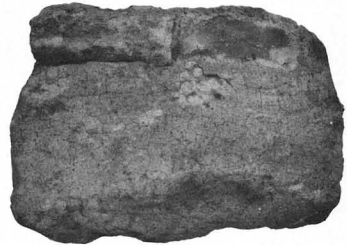
67



65



68



68



66



68

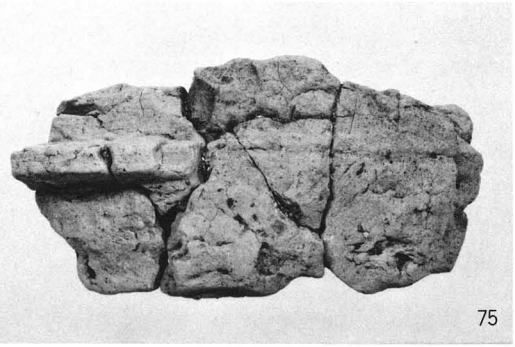


68

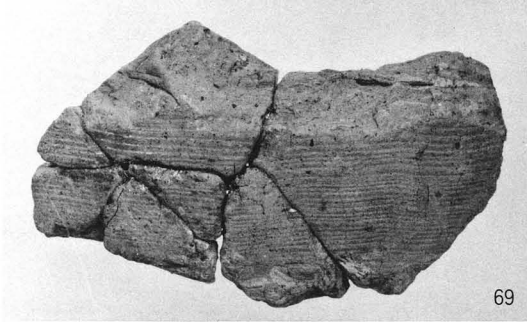
65~68号 ハニワ



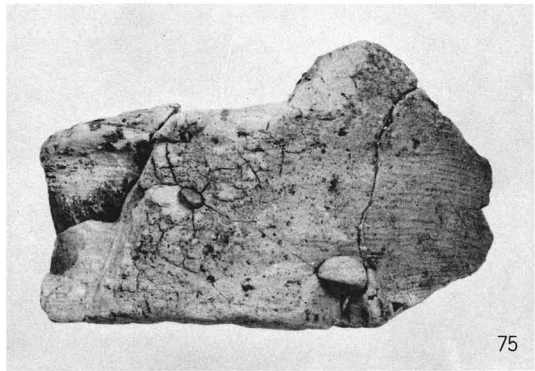
69



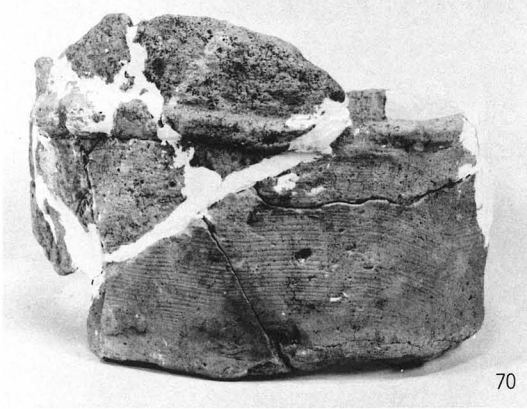
75



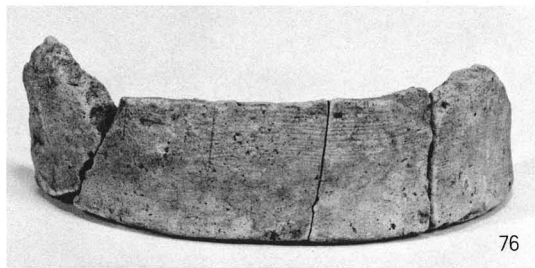
69



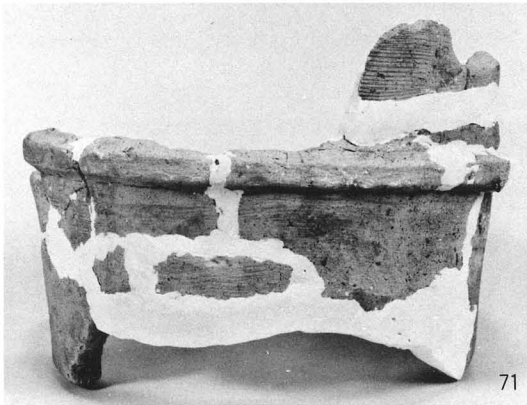
75



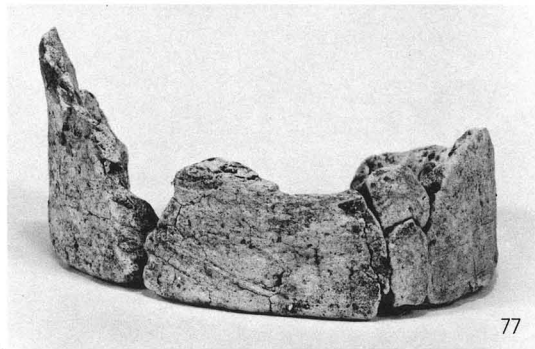
70



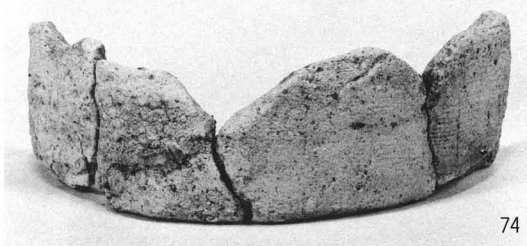
76



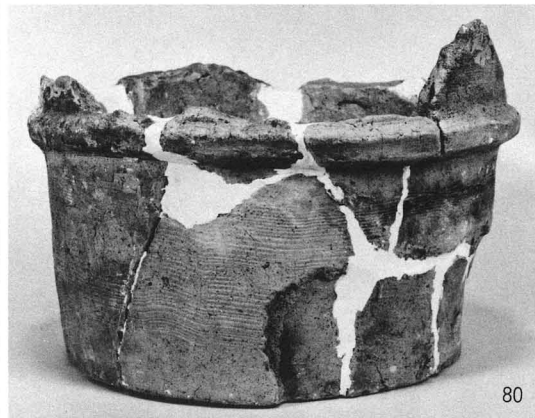
71



77

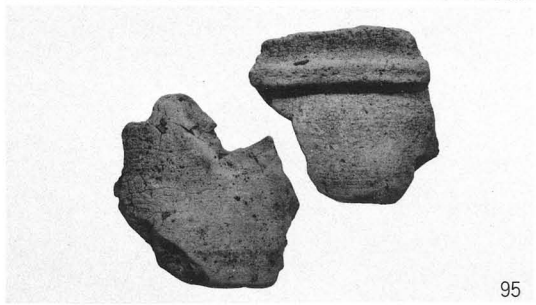
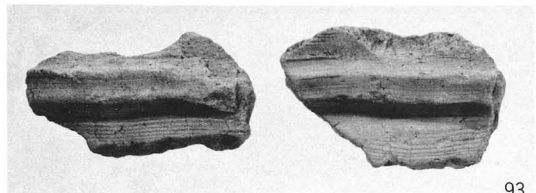
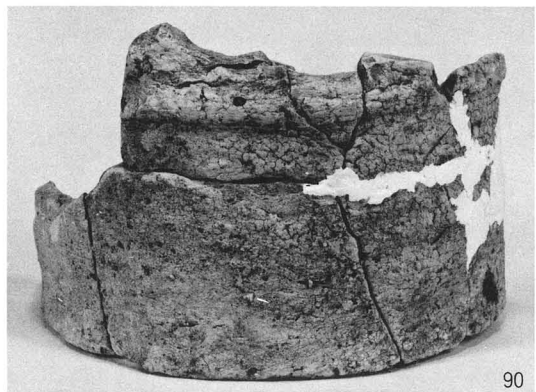
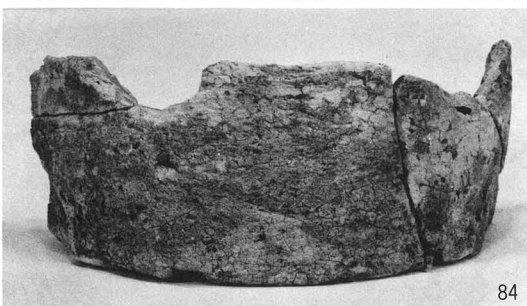
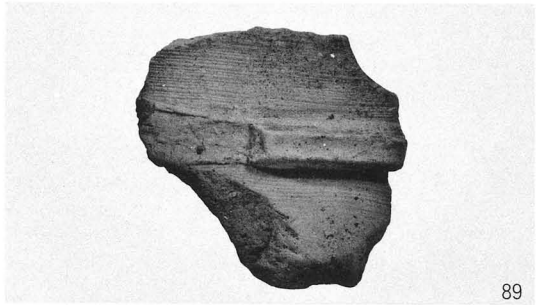
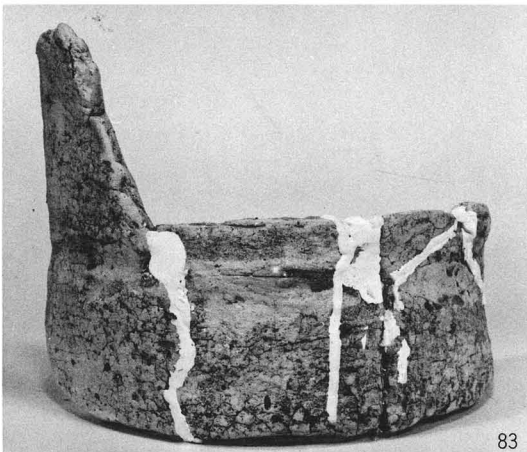
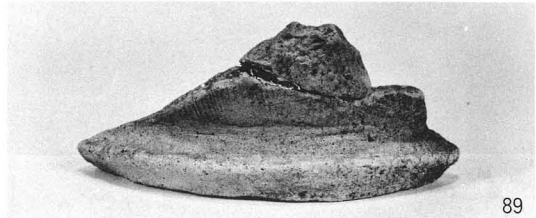
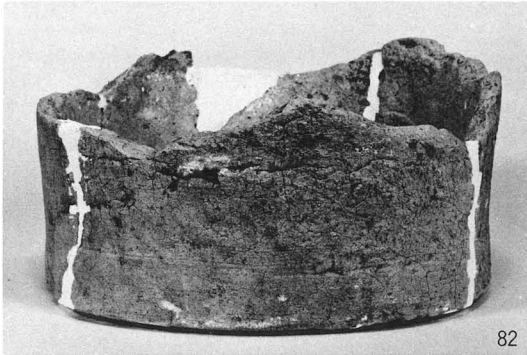
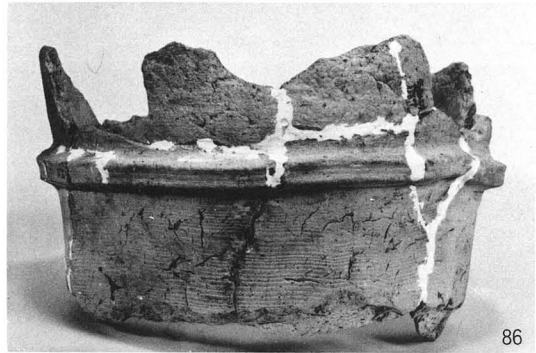


74

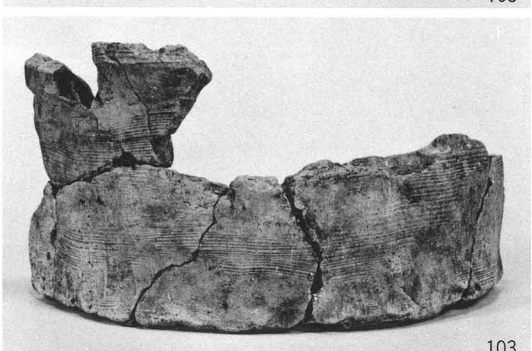
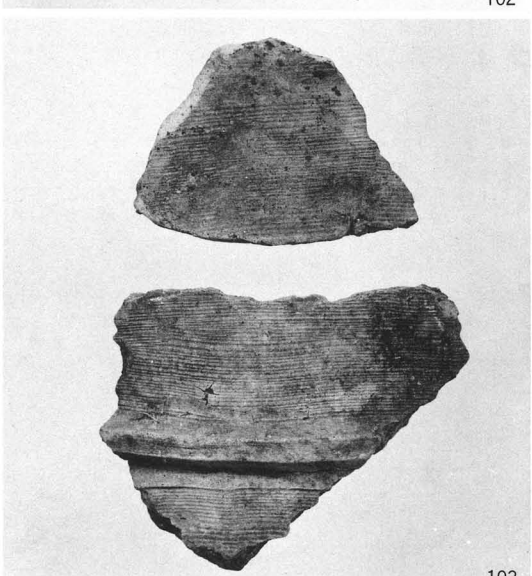
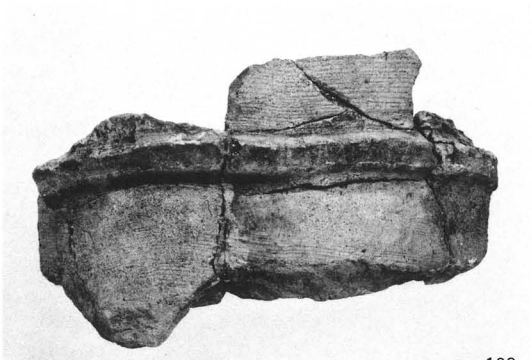
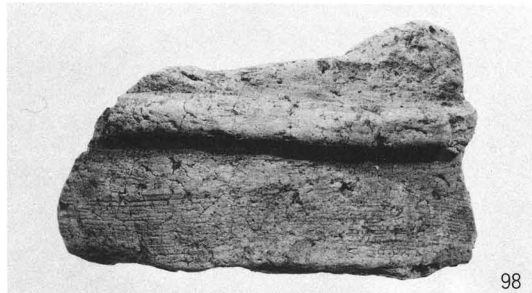
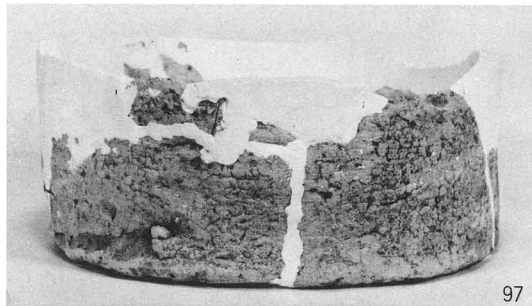
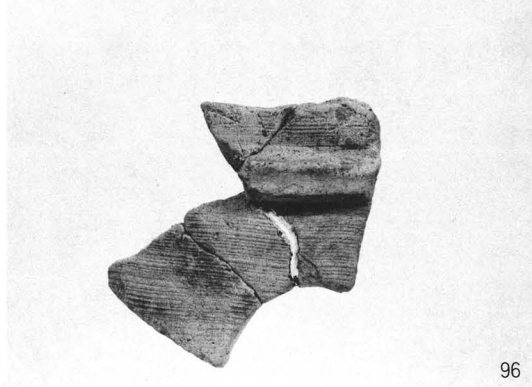
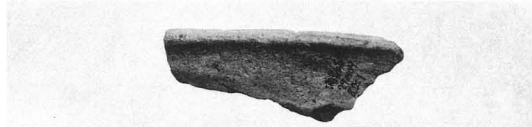
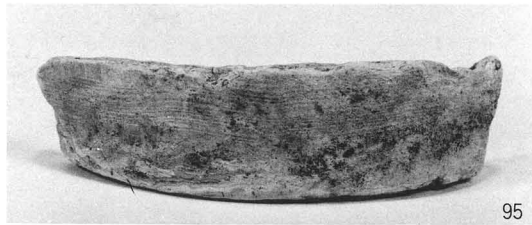


80

69~71・74~77・80号 ハニワ



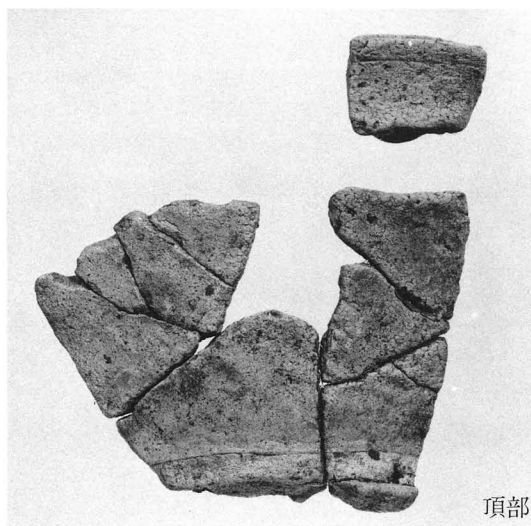
81~86・89・90・93・95号 ハニワ



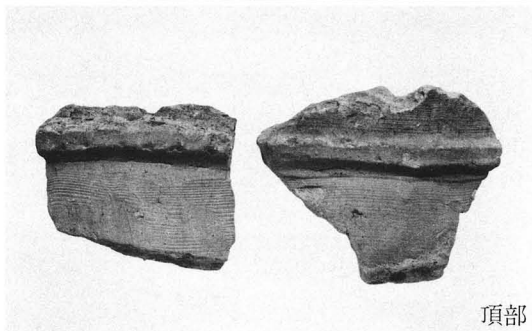
95~98・102~104号 ハニワ



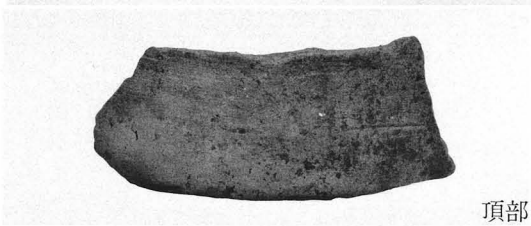
105



頂部



頂部

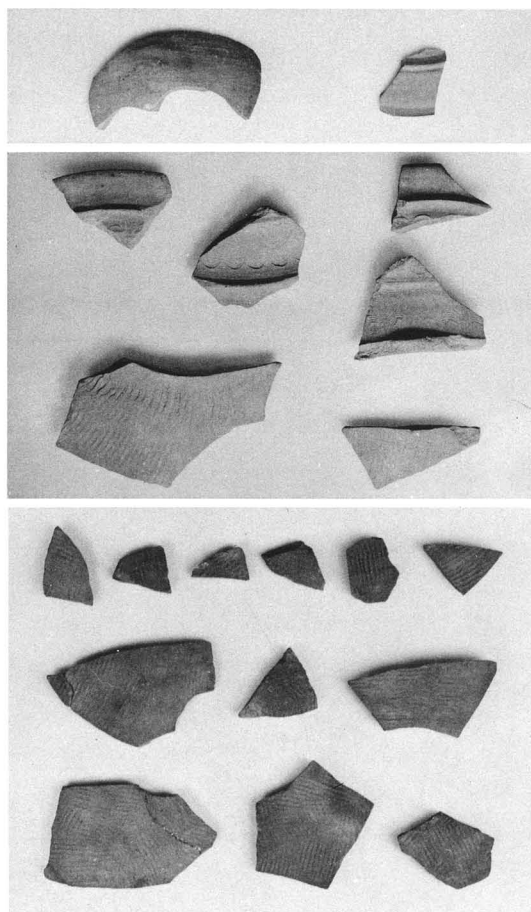


頂部

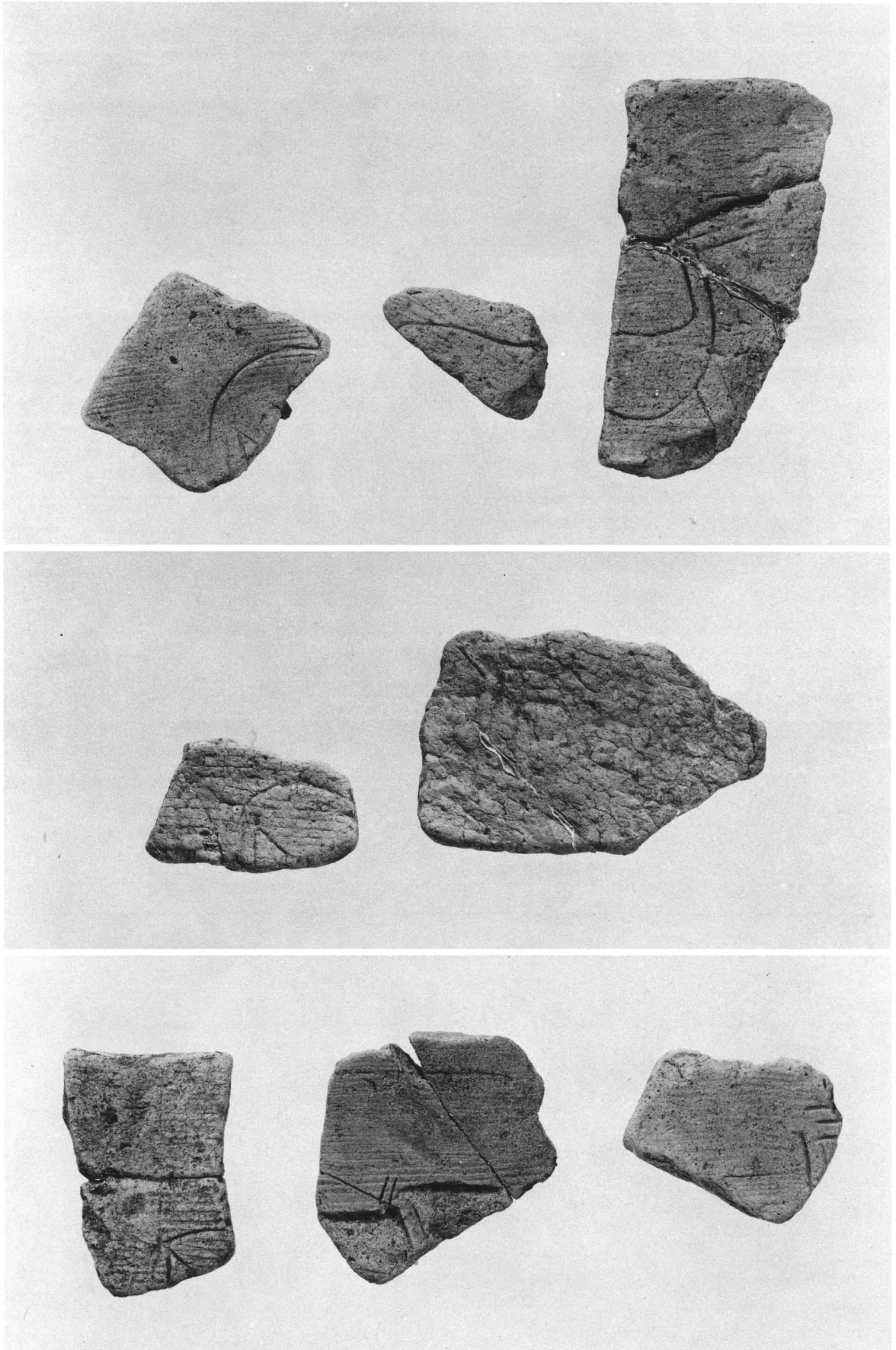
105号及び墳頂部出土ハニワ



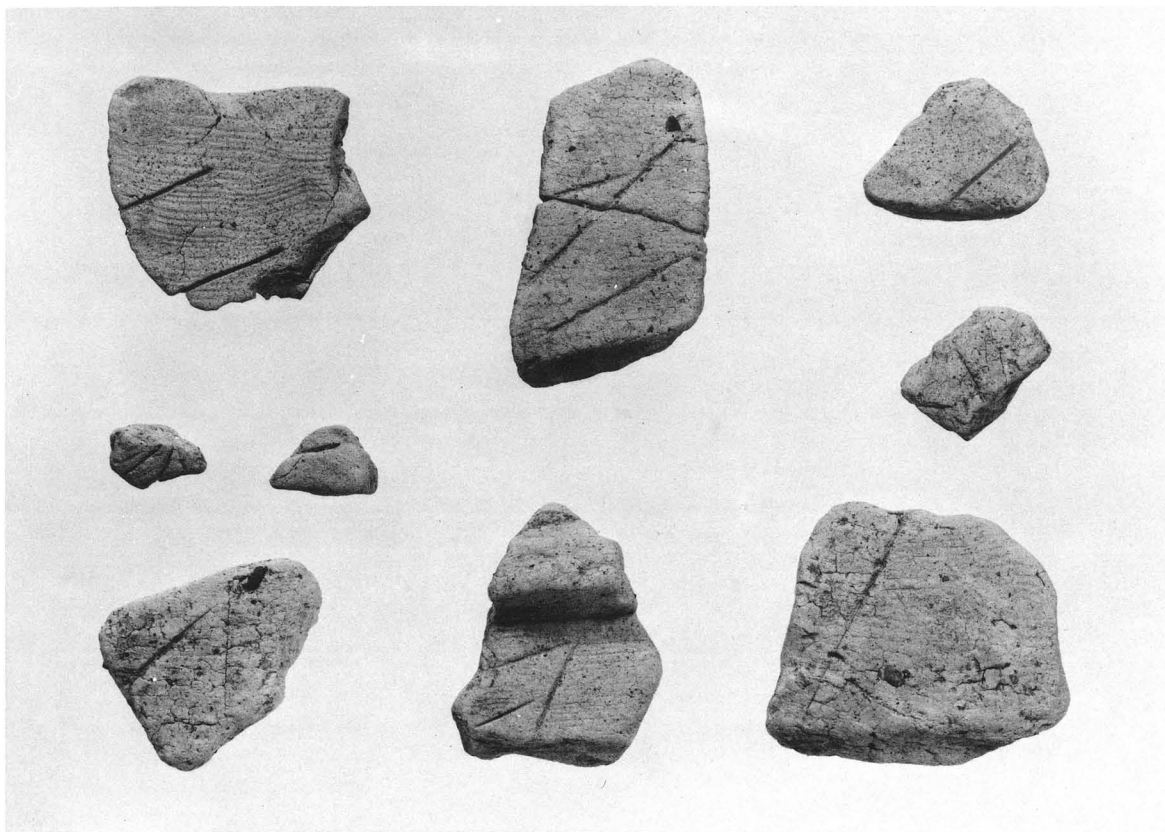
18号 ハニワ



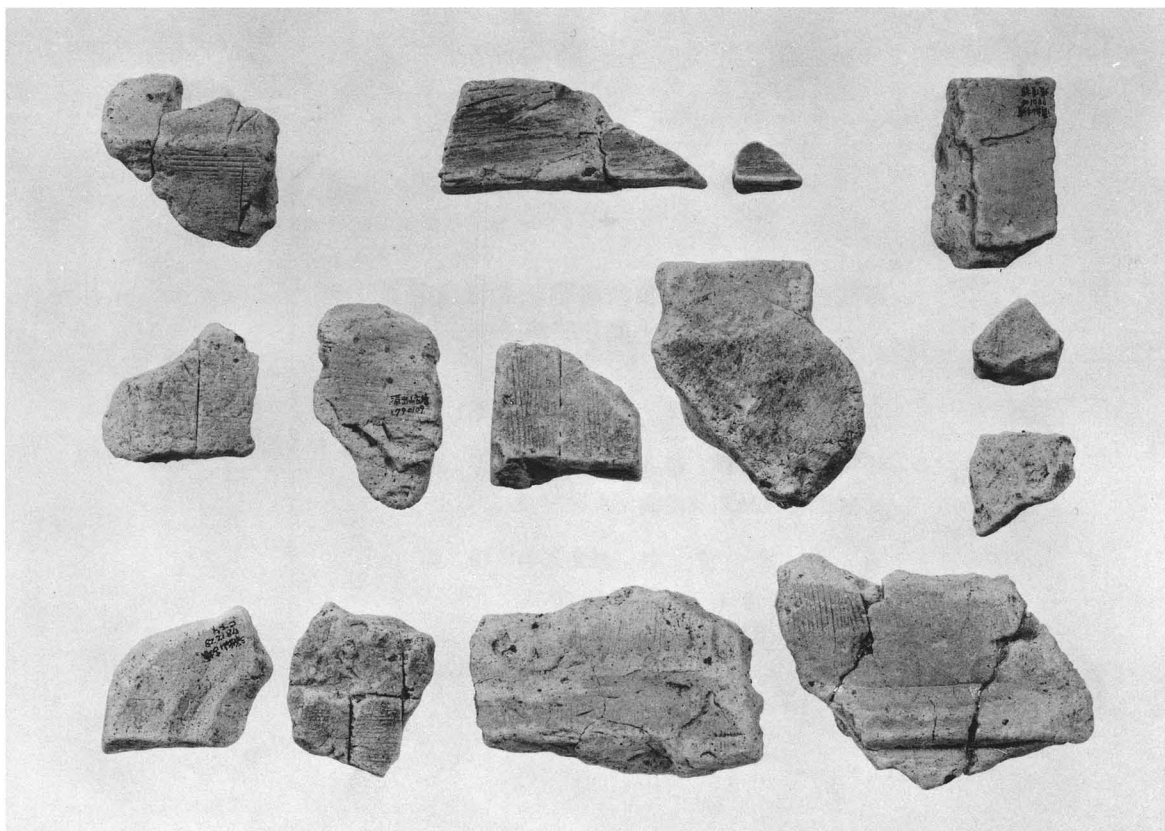
(上) 竅, 蓋, (中・下) 広口壺



刻線文ハニワ



刻線文ハニワ



形象ハニワ

昭和57年 3月15日

昭和57年 3月20日

北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅷ
——高月町涌出山古墳——

編 集 滋 賀 県 教 育 委 員 会

発 行 滋 賀 県 教 育 委 員 会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

印 刷 株式会社 中 村 太 古 舎

大 津 市 京 町 三 丁 目 4 - 3 2

T E L (0775) ② 4 3 7 0

1,690